

世界宣教のため共に働くクリスチャン

家族の絆

THE FAMILY TIE

Allen Finley

Lorry Lutz

木ノ内一雄訳

クリスチャン パートナーズ

Partners International
-Japan

はじめに

本書の目的は、世界の教会がお互いに助け合うにはどのようにしたらよいのか、またその聖書的な根拠は何なのか、を明らかにすることにあります。それと共に、本書で紹介する現地の指導者の生活や意見は、直接、海外宣教にたずさわっている方々のみならず、教会の一般信徒の方にとっても、得るものが多いのではないかと思います。

聖書を開くとき、私たちは初期教会がいか「聖徒たちの欠乏を補う・・・」（第二コリント9：12）援助の働きに、熱心であったかを知ります。使徒パウロは、コリントとマケドニアの教会で集められ、他の国、他の文化圏に住むクリスチャンたちへの援助の捧げものについて、それが信仰的にどのような意味があるのかを説いています。

初期のクリスチャンたちは、自分たちを一つの体（家族）とみなしていました。その考えに従って、教えや説教を必要としている家族に人を遣わし、物質的に恵まれず困っている家族には、その欠乏を補うため物質的な援助をしたわけです。

しかしながら、歴史的に見ると、宣教のために人を遣わすという考えはそのまま引き継がれましたが、仲間の家族の物質的欠乏に対して助け合うという考えは、単に無視されたと言うより受け入れられなかった、あるいは拒否されて来たと言えます。

しかし、今日この考えは再び見直されてきています。経済的に

恵まれない状況にある「現地の人」。(注) たちを助けるということに、関心、あるいは興味を持つクリスチャンが増えて来ているからです。

現地のクリスチャンをどのようにして援助したら良いのか、といった内容の問い合わせを、教会、あるいは宣教団体から、頻繁に受けるようになって来ています。

教会宣教委員会 (The Association of Church Missions Committees: A C M C) では、繰り返し「第三世界の宣教を助けるには」といった内容で勉強会を開いています。そして、この勉強会のための基本的な教材が、福音宣教情報サービス (Evangelical Missions Information Service) から出版されました (1980年6月)。

ウルバナ79年 (訳注: 米国イリノイ大学で開かれる宣教大会) では、決心者カードに記入した若者たちへの「宣教に参加するための10のステップ」のなかに、初めての試みとして、現地の働き手を援助することが含まれました。インター・パーシディ (訳注: 大学間) 宣教主事であるジョン・カイル氏は、私たちに、次のウルバナ81年までに現地の宣教を助けるための具体的なアイデアをまとめ、本にしておくことを勧めました。

注: 本書でいう「現地の人」とは発展途上国の人を指します。

もちろん、全ての人は特定の国の市民で、その人も、他の国の人から見れば「現地の人」となります。しかし、本書で「現地の人」と言うときは、私たちが宣教している地域

本書ではまた、今までの伝統的な宣教団体が、現地の教会の自立化を図ることにより、その宣教団体が目指していた教会の急速な成長が世界のあちこちで達成された、という事実を取り上げます。高い人格と学歴、そして全身全霊をキリストに捧げた現地のキリスト教指導者たちが、ゆっくりではあっても確実に現地での宣教の前面に出て来ています。現地の教会の自立を積極的に助ける福音宣教団体によって、宣教のやり方は変わって来ているのです。

今日、世界中のキリストの体に対して、広くそして効果的に福音を宣べ伝える機会が開かれています。家族（教会）の頭なる主イエス・キリストは、ご自身の使命を達成するために、人材、物資ともに用意されているのです。

そしてそれは今、私たち「家族（体）」次第なのです。「愛によって行いなさい」、そうすれば全ての体は一つとして機能し、主が私たちにするようにといわれた仕事をなしとげることが出来るのです。

カリフォルニア州サン・ノゼにて
アレン・フィンリー
ローリー・ルツ

日本語訳まえがき

1984年、Christian Nationals Evangelism Commission (CNECと略称する)のプレジデント、フィンリー氏が来日された時、かねてより同氏の友情に接し、又同氏の発展途上国におけるキリスト教の宣教後援活動に深い共感を持っていた日本の有志が会合した結果日本における支部設立の話が実を結び、我々の団体、クリスチャン・パートナーズと称するボランティア活動団体として今日に至っている。

その当初、フィンリー氏が我々に、海外宣教後援活動の基本的な考えを述べた書として寄贈してくれたのが、このFamily Tieであった。フィンリー氏とローリー・ルツ氏の共著である。

フィンリー氏は1960年から1987年迄、CNECの本部のプレジデントとして奉仕された方で、1987年、その職を現プレジデント、ルイス・ブッシュ氏に譲った後も、専ら2000年を目標とした伝道プロジェクトの議長として活躍されている。このCNECは1943年に設立された。各地にあるいは教会を建て、あるいは伝道の指導者を育て、あるいは生活の援助を行う等により、世界の隅々にまで福音をつたえるための奉仕団体である。現在は50以上の国で2000人以上の奉仕活動が支えられており、又、数千の子供達がキリスト教の教育を受けることが出

来るよう援助を行っているのである。子供達のキリスト教教育を支えるこのプロジェクトはSACと称され、これには日本の支部である我々クリスチャン・パートナーズも僅かながら参画させてもらって児童の学費援助を行っているのである。

さて、キリスト教宣教について書かれたものは数多くある。しかしその援助方法について、聖書に基づき、且つ実経験に裏付けられた主張は少ない。特に日本の社会の中で育って来た我々にとって、海外の宣教後援は未だ極く不馴れな段階にある。この書に学ぶべきことが多い所以である。

この書は謙虚な書である。その主張は要するに、発展途上国においてのキリスト教の宣教は現地のクリスチャンに任せねばならぬし、充分任せられるの一語に尽きる。

訳者木ノ内一雄氏は現在クリスチャン・パートナーズの理事である。クリスチャン・パートナーズは、前に述べたようにその事業の1つとして現在米国の本部からの助言によって、13名(未だ13名しか有志の協力を得られていない)のインドネシアの貧しい家庭の子供の里親をしているが、木ノ内氏は昨年西カリマンタンの現地を視察してこられた。

Family Tie は当初よりこれを日本語に翻訳することが望ましいと考えられて来た。今回、2年間の木ノ内氏の無償のご努力でこれが完成したことはまことに感謝である。氏は多忙な会社の仕事を了えて帰宅してから、毎日少しずつ翻訳を進められたとのことである。私は読みはじめて、実に読み易く流暢な日本語で綴られているのに感心し、氏の文章力に驚いた。ちなみに氏は米国のウィートン大学で夫人と共に神学、特に宗教教育を専攻された方である。

我々日本人はもっとボランティア活動を経験せねばならない。

われわれはあまりにも経済的取引ばかり成長させて来た。そして気がついた今、世界の中で孤立してしまいそうな自分達なのである。我々はもっと援助せねばならない。しかもそれは具体的な対象を見つめた私的ベースで。隣人を愛し、いと小さき者のために尽くすクリスチャン・パートナーズのカリフォルニアの本部は、その40余年の歴史の中でボランティアはそのこと自体神からの祝福であることを体験して来た。しかしおろそかにしてはならないいくつかの事柄はある。この書は精神的要件のみならず、具体的なノウハウを提供してくれるであろう。

再び、木ノ内一雄氏の業績に敬意を表してこの序文を閉じることにしよう。

1989年7月21日

クリスチャン パートナーズ
理事長 草野計雄

目次

はじめに	i
日本語訳まえがき	iv
第1章 家族の一員：ポール・チャン	1
第2章 宣教の実は結んだか	17
宣教の成功とは	19
近年の発展	20
宣教の働きは完了したか	22
宣教師を送るには	26
新しい宣教支援	28
第3章 聖書の立場：現地のクリスチャンを助ける	31
「兄弟に助けが必要な時」	33
家族の絆	35
「彼ら自身にまかせよう」症候群	37
神の家族に外国人はいない	38
不公平の是正	39
全ての僕（しもべ）	43
だれが最初になるか	44
第4章 現地指導者への印象：真実か誤りか	47
スポイルする	51
援助してはならない	53

信頼出来ない	55
宣教師は欧米人	60
全ての良い考えは欧米から	61
第5章 現地の人を助けるのは理にかなう	67
第6章 問題を直視する	85
選択の手順の間違い	86
金銭による支配	88
文化の違いは期待の違いを生む	88
問題が起こるのは	95
彼ら自身に間違いをさせる	97
第7章 どのように援助するか	101
第8章 実りある関係を築く	123
どのように適当と認めるか	125
考慮すべきこと	127
どのように助けるか	131
相互誓約の署名	134
誓約は守られているか	136
第9章 援助した結果	139
第10章 宣教団体間の協力	155

第11章 どのように分かち合うか	165
人と人の結びつき	168
もっと援助するには	172
現地に出かけて行く	178
第12章 私たちの参加の意味	183
付録I	195
付録II	197
NOTES (注)	201
BIBLIOGRAPHY	208
訳者あとがき	vii

第1章

家族の一員：ポール・チャン

チャン・バオ・ホワは1932年中国で生れ、今日では英語名ポール・チャンで知られています。彼の人生のエピソードは、本書「家族の絆」(Family Tie)で示されている「共に働く神の家族」の概念を良く表しています。

「シュー」、「シュー」、．．．巨大な動輪を動かすピストンの音と共に、汽車はゆっくりと長沙駅を動き始めた。桂林行きの夜汽車の中で、チャン・バオ・ホワは汚れて縞になった窓ガラスから、外をながめていた。そこには工場と倉庫の、灰色と黒の世界があった。そして、それらが薄汚れた人民服の人たちを飲み込んで、ゆっくりと後ろに流れていった。彼の心には、中国の記憶がいつもカラー写真のように美しく生きていたので、このような暗い、白黒の世界は彼の心を僅かに曇らせた。しかし、家に帰ることの出来るこの喜びは、何をもってしても押えることは出来ない。「ゴットン」、「ゴットン」と響く車輪の音もまた、家に帰る．．．家に帰る．．．家に帰る．．．と、彼の心にそれが事実だと教えてくれているようであった。

1949年、彼は難民としてこの中国を離れた。以来30年の間、この日を夢見て来た．．．そしていつも実現しないものとし

て諦め、考えないようにしてきたものであった。しかし、今、この夢が現実となっている。明日の朝、故郷桂林に着くのだ。．．． 駅にだれが迎えに来てくれるのだろう。．．． 一番上の兄には、許可が得られたので中国を訪問する、と手紙に書いた。が、返事を待つ時間のゆとりがなかった。母親はもうすでに80才になっていた。この30年の間には、母親の安否をきずかったことが何度もあった。特に60年代の終わり、文化大革命の間の6年間は、家族についての情報が何も入らず随分心配したものだ。

チャンは家族に会う前に少し寝ようと、狭い小さな寝台を整えた。この旅の間、いろいろなことがあった。香港から広州に行く途中、偶然、何人かのクリスチャンに会った。そして、彼らに香港から持って来た数冊の聖書を渡した。長沙では昔かよっていた聖書学校と教会を捜してみた。しかし、それは徒労だった。

今はもう寝るだけ。．．．

明りを消し、ポール（チャン・バオ・ホワの英語名）は重い外套を頭の上までかけ、堅い寝台に横になった。しかし、寝つかれなかった。車輪の音が再び、帰る．．．帰る．．．帰る．．．と心に響き始めた。

寝つかれないままに、いろいろな記憶が頭の中を駆け巡った。

．．．

バオ・ホワと彼の兄は、道路を封鎖しているバリケードに近づいていった。雪が月の光の下で舞っていた。突然、道路を封鎖している兵士のライフルが二人に向けられた。彼らの胃は恐怖でしめつけられ、その場に動けなくなった。

牧師である彼らの父は、どのような理由があろうとも、人々が戦い、殺し合うことに耐えられなかった。そして、同じ中国人同

第1章 家族の一員：ポール・チャン 3

志が共産党と国民党に分れて血を流さなければならない現実に失望し、このような争いに息子たちがまきこまれるのを恐れた。そして、息子たちを逃がすことにした。

バオ・ホワはその時13才だった。母親にとって、この小さな息子を難民として、隠れ場所や、食物を求めてさまよい歩かせるには、あまりにも小さかった。しかし父は強く言った。

「母さん、息子たちを、神様の御手にゆだねるんだ。南京までいたるところに、たくさんの友だちがいるからそこで泊まり、食べさせてもらえるはずですよ。南京にはこの子たちの姉、バオ・インがいる」

息子たちが家を出る時、母親は泣いた。バオ・ホワもまた母親と同じ気持ちだった。．．．

兵士たちの銃口を前にして、恐れは現実のものとなった。来なければよかった．．．

兄はやっとのことで口を開くことが出来た。

「私たちは学生です。休みで家に帰るところです。汽車に乗るお金がないので、歩いて帰るところなんです．．．武器は持っていません。見て下さい。持っているのは服だけです」

兄は肩からバックを下ろし、母親がつめた毛布や衣類、そして少量の食物を兵士たちの前に取り出した。

銃をつきつけたまま、兵士たちは小声で話し始めた。恐怖に怯えた、やせた少年が問題を起こすとは考えられなかった。兵士たちはバリケードを開け、手で通るよう合図した。

二人は寒さも空腹も感じないままに夜道を歩き続け、父が教えてくれた村にたどりついた。

旅の途中、何度もこのような危険な目に会った。二人がボートで湖を渡ろうとしたところを共産軍の警備隊を見つけ、周りに弾

丸の雨を降らせたこともあった。

しかし、旅の記憶も今ではところどころはつきりしなくなって来ている。父親は伝道のためよくこの地を旅し、説教をし、聖書を教えた。そのためクリスチャンだけでなく、未信者の人からも尊敬され、親しまれていた。こういった人たちの家を泊まり歩きながら、何日もかかって、やっと南京にたどり着いた。

南京での思い出はもっと温かかった。家族や友人のこと、そして好きな音楽のことや神様との個人的な交わり、といった記憶が続く。

ポールと兄が国民党の首都、南京に着いた一年後に両親もここに避難して来た。家族が無事で再び会え、一緒に生活出来るようになったのは何と素晴らしい事だっただろう。中国では、この戦争を通して若者たちの間に大きな虚無感が広がっていった。そして、多くの人々がキリスト教に関心を持つようになった。中国インター・バーシティ・フェロースhipが新しく組織され、学生のリバイバル運動に大きく寄与した。これは、中国の教会における新しい進展であった。ポール自身も神様との個人的な出合いを体験し、福音を個人的に受け入れ、周りの若いクリスチャンの熱意と影響で、急速に成長していった。

ポールの父は南京の大きな教会で牧会を始めた。そして、ここに多くの大学生が集まって来た。この若い人たちを教育する必要から、1946年、タイ・ツン神学校が開かれた。生徒は50名だった。ポールの父、チャン牧師は中国福音クルセードの指導者たちから、この学校の最初の校長になるよう説得された。

中国福音クルセードには、中国内陸奥深く入って福音を宣べ伝える、13人の宣教者がいたが、彼らの宣教の報告、即ちクリスチャン以外は決して足を踏み入れようとしない中国奥地での人々

第1章 家族の一員：ポール・チャン 5

の回心の物語は、聴く人々の心を強く打った。そして、タイ・ツン神学校の学生もまた、休暇の間、同じようにチームをつくり、トランペットやアコーディオンを持って村々を巡り歩いた。

ポールのこういった心地よい楽しい思い出も、迫って来た内戦の黒雲とともに、急速に色あせていく。神学校の食堂のテーブルで、学生たちが緊迫した議論をかわすようになった。共産軍が次々と都市を陥落させ、自分たちの配下に治めながら長江にまで近づいて来た、というニュースも入って来た。何人かの学生は「中国の共産党はソ連と違って、あれほどまでにクリスチャンを迫害しないだろう」と言った。それでも「多分、聖書学校や神学校は認めないだろう」ということで、他の学生と一致した。多くの学生は「共産党になったら、『西欧帝国主義』と西欧人宣教師に一切のかかわりをもつことは危険だ。西欧からの援助のお金すら、汚れたものとされるであろう」と推測した。

お金の価値が急速に落ちていった。国民党政府は5千元、及び1万元の中国紙幣を出し始めた。米も不足していった。南京に逃げて来た難民たちは、共産党の支配下で、家族の崩壊を告げた。それは、土地の没収や共同生活の強制、年長者を無視したやり方などの結果であった。国民党の無秩序な撤退により、共産党の脅威は容赦なく南京に迫って来た。

夜汽車の寝台のなかで、ポールの頭に次々に思い出がよみがえって来る・・・

南京から南に行く鉄道が切断される前、父、チャン牧師は70人の学生たちを長沙に移した。1948年、12月のことであった。

2、3ヶ月の間、神学校はフウ・ナン聖書学校の施設を借りて

授業が行われた。しかし、6月になると再び赤軍の脅威が学校を覆ったため、立ち退かなければならなくなった。

すでに、全ての輸送機関は、政府関係者とその家族の避難のために優先して使われるようになっていた。チャン牧師は桂林に行くことにし、残り少なくなった学生たちにどこで落ち合うかを告げた。桂林ではクリスチャン・アライアンス聖書学校が、彼らのために建物の二階を一時的に使うのを許してくれていた。生徒と職員は小さなグループに分れ、桂林まで旅立つことになった。

チャン牧師は最も成績の良い6人の学生と行動を共にすることにした。途中わずかな時間であっても、彼らを教え、訓練を与えることができるからである。彼らの乗った汽車は、わずかな距離を走った後、すぐに退避線に入り、そこで一週間以上も止ってしまった。軍の鉄道の使用を優先するためであった。

次の日、ポールが出発のため長沙駅に来た時、状況はもっと悪くなっていた。あまりにも多くの人のため、いつもの駅とまるで違っていた。この汽車が長沙を出る最後だった。屋根にも連結器にも人が鈴なりになっていた。彼はやっとのことで機関車と石炭車の間にわずかな場所を見つけた。煙突の煙がまともにぶつかる場所だった。にもかかわらず、列車の乗務員は彼を見つけると「場所代」を要求した。そして彼がお金を持っていないことが分ると、その場所に立つことを許さなかった。

プラットホームでは人々はほとんどパニックの状態だった。女の人が見失った我が子の名前を狂気のように叫んでいた。その声は喧噪と混乱の中に消えていった。若い夫婦が持っていた大きなバッグが突然開いた。二人は何とか中の物をもとに戻そうとしたが、人々の足に踏まれ散っていただけだった。

出発のベルが鳴った。ピストンがゆっくり回り、列車は動き始

第1章 家族の一員：ポール・チャン 7

め、ポールはホームに残された。その時、突然だれかがポールの腕を掴んだ。

「ポール、手すりを掴んで。デッキに乗っかるんだ」

雑踏のなかで、神学校の友、アーサーが幸運にもポールを見つけたのだった。

自動車は加速をつけていった。二人は手すりにしっかりと掴まった。風がまともにぶつかり、煙は顔を黒くしていった。なぜだれもここに立とうとしなかったのか明らかだった。しかし、この桂林行きの自動車には空いている所はここしかなかった。そしてここに自分の命を託すより他はなかった。

アーサーは、風の音にまけないよう大きな声で言った。

「次の駅に着いたらロープで体と手すりを結び付けよう。ロープは僕のカバンの中にある」

二週間の間、ポールとアーサーは、避難列車のデッキのステップに立っていた。夜は骨にまで達する寒さ。雨の日は、全身がずぶ濡れになった。ススとほこりで真黒になった。夜、かわり番に「見張り役」になった。寝てしまうと、手すりに結び付けたロープだけが頼りで、ほどけないよう見張っていなければならなかったのだ。

ある朝、列車の中でひどく泣き叫ぶ声が聞こえた。次の駅でホームに出て来た人の話して分かったのは、若い女の人の膝の上の赤ちゃんが、線路に落ちていった、ということであった。睡魔に負けた一瞬の出来事であった。

またある時は列車が狭いトンネルに入り、屋根に乗っかっている人をトンネルにぶつけて落していった。列車に乗った多くの人がこのようにして途中で命を落した。

二人は毎日讃美歌を歌い、暗唱聖句を口ずさみ、その日一日無

事に過ごすことが出来たことを感謝した。中国の美しい田園風景を見ながら、何度も何度もポールの心に「わたしは山にむかって目をあげる。わが助けはどこから来るのであろうか（詩篇121：1）」、の聖句がひびいた。ポールは自分の生涯でこの時ほど神様の臨在と、家族が自分のために祈っているのを強く感じたことはなかった。

田舎はどこも南に逃げる難民であふれていた。彼らはまさに、共産軍に追いつかれる一歩手前を逃げていた。食物はほとんどなく、物価は2、3ヶ月の間にほとんど4倍にもなった。親たちは子供たちと生き別れになり、逃亡兵たちがおしよせ、略奪した。不法が支配し、頼りになるのは自分だけだった。

二人は桂林の神学校にやっとのことでたどり着いた。この二人が最後だった。両親はどれほど安心したか分らなかった。

つかの間の喜びの後、新たな問題が持ちあがって来た。学校を運営する資金は、中国福音クルセードの上海事務所を通して欧米から来ていたが、その援助は次第に制限されるようになった。チャン牧師はこのような事態になることを予期して、なんとか学校が自立出来る道はないものかと模索していた。欧米人宣教師のある人たちは、チャン牧師があまりにも自立を強調するため「反西欧的である」とみなした。自立は特に「運営」と「方針の決定」に向けられた。ある宣教師はチャング牧師を批評して「彼が求めるのはお金と物質的な援助で、私たちではないのだ」と言った。

しかし今やタン・ツン神学校の事態は急をつげた。欧米からの援助が途絶えた今、自立するしか道はなかった。ポールは学生たちが道端に座って、時計や衣類を売り、自分たちの食べる物に変えたのを覚えている。

チャン牧師はまた、石鹼や日用品、そして校庭で野菜を作った

りして、学校を維持しようとした。にもかかわらず、赤軍が桂林に近づいて来るにつれ、学校を続けるのは難しい状況になって来た。

列車が急に停止した。それと共に、ポールは1979年の現実引きもどされた。上半身を起こしたが、すぐには自分がどこにいるのか分らなかった。記憶があまりにも生々しかったので、現実に戻るのに時間が必要だった。窓ガラスに付いた水蒸気を拭くと、汽車が小さな駅に入ったのが分った。降りていった人たちの影がプラットフォームから消えると、すぐに、汽車は再び動き出した。ポールは東の空がわずかに白み出したのに気付いた。もうすぐ朝．．．彼の心は感謝で満たされた。神様は、もうすぐ、30年にわたる祈りに答えてくださるのだ。

彼は両手でしっかりと、コートを握り締めているのに気付いて苦笑した。汽車に乗って眠りから覚めると、いつもこのようにしているのである。長沙から桂林の恐ろしかった汽車の旅が、いまだにそうさせるのである。列車が再び動き始めると、ポールは単調なレールの音にまた眠りにさそわれ、記憶の夢のなかに戻っていった．．．

チャン牧師が自分の部屋にポールをよんだのは、1949年の始めで、学校は桂林に移ってまだ3ヶ月しかたっていなかった。母も部屋の隅にいて泣いていた。父が重大なことを話そうとしているのが分った。

「私たちはもう逃げません」

父は力強く言った。が、ポールには父が自分の肩に手を置くことによって、その柔らかな顔をかろうじて保っているのが分った。

「共産軍が桂林に、2、3週間以内に入って来る、という情報があった。輸送機関は全て国民軍の撤退のために使われていて、もう学校をどこかに移すことも出来ない。それに安全な場所はこの中国大陸にはない」

ポールは多くの学生に信仰の確信と献身の道を示してきた、父の暖かい黒い目と、力強い顔を見た。そして、自分だけどこかに送られるのを直感した。

「おまえの兄さんは、家族がいるのでここにとどまる決心をした。双子の弟たちはまだ幼い。しかし、おまえはもう17才だ。それに信仰を持っている。私は、神様がおまえを用いてくださるものと信じている。この戦争が終わったら中国には、御言葉によって訓練を受け、他の人を導くことの出来る神の人が必ず必要になる。私たちはおまえを香港にいかせることにした」

父は広東にくだるジャンクを見つけて来た。そしてポールは再び共産軍から逃げる、難民の一人となった。彼は着のみ着のみで、やっとのことで香港にたどり着いた。

だがその時、自分の故郷を再び訪れるのに、30年の歳月が必要とは、夢にも思わなかった。

汽車が桂林に近づくころ、太陽がまぶしく輝いていた。ポールは「尖った」山々の雄大な景色に、再び息をのむ思いだった。驚いたことに田舎は彼が出たころとほとんど変わっていなかった。しかし、彼が知っている人たちは大きく変わっていた。父のチャンはすでに死んでいた。そしてそれは皆からも聞かされるであろう悲しい出来事だった。ほんの僅かではあっても、彼のところにもこういった情報は断片的に流れて来ていた。しかし、中国から

第1章 家族の一員：ポール・チャン 11

の手紙は、注意深く、言葉を選んで書いてあるため、想像でもって補う必要があった。

ポールが香港で高等学校に行き、聖書学校に通っていたころは時々であっても父から手紙が来た。しかし、1962年に兄の手紙が、父が死んだことを伝えた。それまで、父が獄に入れられていた、という噂も聞いていた。「我が思想の遍歴」という題で、父の名で北京の新聞に記事が載ったこともあった。

たくさんのキリスト教指導者たちが、集中的な「再教育」の対象とされた。チャン牧師は信仰を放棄しなかった。にもかかわらず「私は偉大な人民と共に立ち、全ての反革命的行為を根こそぎにし、永遠の平和と恵みと幸福が、資源豊かで偉大なる民主的中国に実現されるために、毛主席の指導に従う」という文を書くことに同意せざるを得なかった。

ポールは文化大革命の間の6年間のことを、暗い気持ちで思い出した。この間、家族からの、また家族についての消息が全く途絶えてしまった。また、数千のクリスチャンが投獄され、拷問され、殺された。

ポールが出来たことは、家族の安全を信じ、祈ることだけだった。

何年もたって、家族はやっとポールに父の死について、本当のことをいっても大丈夫だと感じるようになった。チャン牧師は、10年の重労働の刑を受け、その3年後、獄のなかで死んだのだった。

ポールの家族もまた、ポールがどのようにしているのか何も知ることが出来なかった。香港で、彼は欧米のクリスチャンの基金からなるCNECの学費援助を受けた。そして、米国ワシントン州にあるシアトル・パシフィック大学で学び、ゴールデン・ゲー

ト神学校で音楽の修士号を取得した。ポールは北米中を演奏してまわり、オーストラリアにも足を伸ばした。数千枚というレコードを売ったが、彼の母は一度もこの息子の歌を聴く機会はなかった。

ポールは母のために、テープレコーダーと自分の歌のテープ、そして、特に大きな活字で書かれた中国語の聖書を持って来ていた。

しかし、母親にとって一番大きな喜びは、息子が、父が望んでいた福音の宣教師になった、ということに間違いなかった。それだけでなく、息子は今、シンガポールのCNECで、シンガポール、マレーシア、ビルマの人たちに福音を宣べ伝えるプログラムの責任者となっている。

母親は多分、CNECについて、中国での中国人宣教師を助けるほんの小さな宣教団体、ということぐらいは覚えているであろう。しかし今や世界的規模の宣教団体となり、40近い国で1,500人以上のその国のクリスチャン指導者を援助している、ということは知らないであろう。

ポールは、死んだ父もまた、CNEC（今日のChristian Nationals Evangelism Commission）のやり方、すなわち「資金と必要な物資を援助するが、かわりに我々の名を使うことや、我々の目的のために働くことを求めない」という方針に同意したであろうことを確信していた。何故なら、このことは、30年以上も前に父が実践しようとしたことだったからである。

自動車は30年前、まったく違った状況のなかでポールが出て行った町、桂林に入っていた。駅に着き、プラットホームに降りると、同じような服を着た人たちが大勢いた。どのようにして兄

第1章 家族の一員：ポール・チャン 13

弟を見つけようかと不安になって来たとき、突然見覚えのある笑顔が近づいて来た。兄弟4人が立っていた。手をさしのべ、抱き合うと、皆の顔から涙がとめどもなく流れて来た。兄弟全員が駅まで迎えに来てくれるとは思っていなかった。

よその町で働いている三人の兄弟は、特別に休暇を取って来ていた。皆、社会で責任ある地位につき、尊敬を得ていた。一人は先生、もう一人はバスケット・ボールのコーチ、三人目は医者、そして四人目は、冶金学の教授になっていた。皆、迫害の長い年月を通して、主に真実をつらぬいていた。

彼らは、兄弟の妻の一人が働いている病院から車を借りて来ていた。その車で、長兄の家族と住んでいる母のところに行った。

アパートに着いたとき、兄が言った。

「私たちはここの3階に住んでいます。母は階段の昇り降りは出来るのですが、なにぶん81です。非常にゆっくりとしか出来ません。それで部屋で待っているのです」

それから気を利かせて言った。

「先に行って下さい。私たちはしばらくここにいますから」

ポールは腕に大きな聖書の入った包みをかかえ、階段を駆け登った。そして、30年の歳月を忘れ、17才の少年に戻って叫んだ。

「お母さん、ただいま」

数ヶ月の後、ポールは友達への手紙で、この劇的な出会いについてこのように書いている。

母は台所の扉のそばで私を待っていました。しばらくはただ泣くだけで、話すことも出来ませんでした。その後、母は神様に感謝の祈りを捧げ始めました。それは、息子に再び会えたことと、

息子が神様のために用いられていることを感謝したものでした。これは、今まで何年も何年も続けて来た母の祈りだったのです。兄弟たちがあがって来たとき、扉を閉め、皆で天の父なる神様に祈りました。

皆と一緒に毎日は貴重でした。家族で祈り、聖書をひもときました。そしてアコーディオンの演奏で、小さいころ両親が教えてくれた古い讃美歌を、何度も何度も歌いました。母はポケットから一片の紙切れを取り出して私に見せました。

「これが、私の聖書です」

15年間、それしかなかったのです。私が持って来た大きな活字の聖書は、母にとって最も嬉しい贈り物となりました。

三日三晩、兄弟一人一人いろいろな事を話しました。母は81歳のわりには元気でした。また、兄弟たちは良い仕事についていました。神様が私の家族を祝福して下さっているのを知り、心から感謝しました。

神様はポールに対しても同じように良くしてくれていた。アメリカでの勉強を終えた後、妻のニエン・チャンと一緒に香港にもどり、そこで教会を牧し、青年への伝道を始めた。1975年、クリスチャン・ナショナルズよりシンガポールで働くよう依頼され、それ以来、ポールはここで、数千にわたる中国語のテープによる教材の貸し出しプログラム、通信教育コースなど多方面にわたる教会の宣教活動にたずさわっている。

ポールはクリスチャン・ナショナルズに直接責任のある、地区コーディネーターの一人、つまり、東南アジア・コーディネーターとして各国宣教の援助を総括している。しかし、CNECによる直接の宣教活動は地区コーディネーターまでで、1500人の

現地の宣教者が自分たちの委員と共に方針を決め、予算をたて、スタッフを任命している。

ポールの「離散している」中国人（中国大陆以外の地に住んでいる中国人）に対する宣教への熱意は、シンガポールの教会への宣教の熱意となり、積極的な助け合いの関係を築いている。またタイ北部、ビルマ、西カリマンタン（旧ボルネオ）への旅行は、葡萄園の隅で福音宣教のために頑張っている、現地人宣教者とふれあう良い機会となっている。ポールのこうした働きにより、ダイヤック族（ボルネオ内陸に住む現住民）のためのトレーニング・プログラムやファミリー・キャンプが出来た。また、多くの人が、教会建設のために頑張っている。彼は、シンガポールの教会の人たちに、タイ北部や他の地域に住む子供たちの学費を援助する、CNECのスポンサー・ア・チャイルド・プログラム（クリスチャン・ナショナルズの教育援助部門の一つ）を紹介した。また、難民の村や、独特の文化を持つ未開の部族の人たちのなかで働いている中国人宣教師たちを、積極的に支援している。ビルマ人のクリスチャンたちが、ビルマと中国との国境に沿った村々で宣教活動をしているのを知ると、シンガポールの教会とCNECの人々に、彼らを援助をするように働きかけた。

ポールは離散している中国人と、どこでも自分たちの言葉で話すことが出来、またその文化を理解し、その習慣を一緒に楽しみ、彼らの問題を理解することが出来る、という特権を持っている。そして、この特権は、聖書の真実を分かち合うことに用いてこそ、初めて生きて来るのだ。

私たちは第三世界のいたるところに、ポール・チャンがいるのを知っている。そして、西欧の献身的な宣教師の働きの果実であるこれらの二代目、三代目のクリスチャンがいて、責任ある「家

族」の一員として世界中の教会の重荷を担っているのを...

第2章

宣教の実は結んだか

1950年、中国はいわゆる竹のカーテンを下ろし、他の国との交流を閉ざした。

外国人宣教師は皆、国外に追放され、聖書は焼かれ、教会は倉庫や単なる「集会所」に変わった。クリスチャンは「紙の帽子」をかぶせられ、街を引きまわされた。信仰の故に多くの人が死んだ。ウオッチマン・ニーは獄中で死に、ウォン・ミンダオ（中国のビリー・グラハム）も、22年間獄に入れられた。ミンダオは獄から釈放されたとき、肉体は弱っていても、彼の信仰は弱められることなく、喜びで満たされ、神を讃美しながら出て来た。

そしてクリスチャンの交わりである教会は・・・私たちには、もはや中国には教会があるとは思えなかった。結局、中国では、キリスト教は根を張ることは出来なかった、西洋の宗教としてしかみなされず、「外国の悪魔たち」によって広められた、としか理解されなかったのだ、と・・・

1965年、偉大な教会史の専門家であるケネス・スコット・ラトゥレットは、このように書いている。

「キリスト教は、帝国主義と植民地主義に結び付いていたために、革命により、キリスト教を信じている人たちの社会的な力が無くなるよう期待された・・・というのが中国大陸の場合であっ

た」(注1)

しかし本当にそれが中国に起こったことだったのであろうか。

1970年代になり、中国が再び西側の国々に扉を開き、交流を始めた時、教会についてのニュースもまた伝わって来た。驚いたことに生きて、活発に活動している教会があった。クリスチャンの集りがあり、家の教会があり、また、めだたないように戸外でも集会が持たれていた、というのだ。

それ以前、わずかであってもこういった情報は、私たちのところにもれて来てはいた。例えば、毛沢東の死ぬ少し前から、中国人伝道者が頻繁に国境を越えて大陸内に入り、10人、20人、30人といった小さなグループの信者に洗礼をほどこし、集会で御言葉をとりついでいた、といったような。

そして国境が開かれるやいなや、中国を訪れた人により、中国の教会では、初期教会の頃のような、癒し、死んだ人の蘇り、といった奇跡が行われているという情報を、持ち帰って来るようになった。

1980年6月、タイで開かれた世界宣教会議で、世界中から集まった代表者は、中国大陸には500万人以上のキリスト教信者がいる、という報告を受け衝撃を受けた。この数は、革命軍が宣教師を国外に追放した時の、中国での信者の実に5倍である。今日では、この数はもっとふえ、約2500万から5000万人のクリスチャンがいると推定され、また、50万以上の家庭で集会が持たれ、そして1983年までには400以上の公式の、いわゆる「自立の三原則」に則った教会が新たに生れる、とされている。

一体、このタネは誰がまいたのだろうか。それは、1950年以前の中国にいた宣教師によってまかれた種から生れた、と言え

る。それでは水をやったのはだれか。御言である。中国人クリスチャンを通して働かれた御霊なのだ。

宣教の成功とは

宣教の成功とは、一体何なのであろうか。それは、宣教師の数でも財産でも組織でもない。その社会に植えられ、しっかりと根をはり、力強く成長する教会によって決まる。

宣教の最前線にいる宣教師と、彼らを送り出している人たちが「お互いに助け合い、祈り合って」植えた種の実である教会が、その地域社会に不可欠な存在になっているかどうか、ということである。

毎日、全世界で6万の人が新たにキリスト教を信じ、毎週新しい教会が1200建てられている。

今世紀の始め、アフリカでは人口のたった3パーセントがクリスチャンだった。しかし、今では1日に2万人がキリスト教を信じるようになってきている。このままでいけば、今世紀末には48パーセントの人がキリスト教信者となると思われる。

韓国では、毎日、6つの新しい教会が生れている。ブラジルではプロテスタントの成長率は年6パーセントで、これは人口増加率（2.8パーセント）の二倍以上にあたる。

宣教師は教会がその地域で根を張るため、キリスト教の宣教だけでなく、広く一般的な教育の発展にも力をそそいで来た。最近まで、アフリカでは85パーセントの児童が、クリスチャン・スクールに通っていた。第三世界に、数多くの大学や神学校がその国の指導者を訓練するためにつくられた。また、ラジオ放送や、医療プログラム、救援活動、及び開発計画などにも力を注いでい

る。これらは、5万5000人のプロテスタントと4万5000人のカトリック宣教師による、広い意味での宣教活動の一環で、人々への愛と深い関心から生れたものである。

近年の発展

宣教師を他の国に送り出すという、その働きの主役がヨーロッパから北アメリカの教会に移って来たのは、1940年代の半ば頃からである。1793年、英国バプテスト連盟は最初気乗りしなかったにもかかわらず、ウィリアム・カーレーをインドに宣教師として送ることに同意した。カーレーは自分の召命をはっきりと自覚し、議会で宣教師を送ることの必要性を強く主張し、自分を宣教師としてつかわすことを強く求めた。そのため、教会指導者の一人は我慢出来ずこのように叫んだという。

「若い人、座りなさい。もし神様が異邦人を改宗したいと望むなら、君や私の助けなしで、ご自身でそうなされる」

しかし、神様はカーレーを40年以上「異邦人を改宗」する器として用いられた。そして、彼は現代宣教の父として知られるようになった。

カーレーの前にも、モラビアンといった偉大な宣教者が、ヨーロッパにはいた。しかし、1812年までアメリカにはこのような宣教者はいなかった。アドニラン・ジャドソンと彼の仲間がインドに行ったのが最初だった。しかし、ジャドソンはインドを出なければならなかった。そしてビルマに移り、そこで神の器としての偉大な働きを始めた。

ミカエル・グリフィスは、19世紀初期における宣教の活動をこのように述べている。

第2章 宣教の実は結んだか 21

ウィリアム・カーレーの時代には、まだ、デイヴィッド・リビングストンは生れていなかった。モファットはまだ、アフリカに着いていなかった。ラテン・アメリカにはプロテスタントの宣教師はいなかった・・・フィリピン、台湾、日本、韓国、タイ、インドシナも同じだ・・・私たちは、162年前（1810年）には、第三世界には現地人のクリスチャンはおろか、プロテスタントの宣教師はほとんどいなかった、ということに気づき、衝撃を受ける。（注2）

しかし、19世紀における植民地主義の台頭とともに、ヨーロッパと新大陸の宣教師たちは、ほんのわずかの間に、世界の主な地域をキリスト教布教のための拠点とした。

しかし、それも、1914年の世界戦争の勃発と共に、宣教に対する熱意は急速に衰えていった。そして、第一次世界大戦の終了と共に、宣教師を送るその大役はヨーロッパから新大陸に移っていった。世界的大恐慌もまた、キリスト教の広まる速度を遅める一つの要因となった。

第二次世界大戦後25年間に、第三世界の71の国が、西欧の支配から解放された。こうして独立を獲得した国々は、西欧の影響を出来るだけ排除しようとした。今や西側のものであれば何でも自動的に受け入れるというのではなく、「国家の尊厳と国民の誇りを損わない」という前提が、必要であった。

しかし、この25年の間は、欧米人宣教師の最も活躍した時代でもあった。100以上の新しい宣教団体が生れ、世界のすみずみにまで宣教師が送りこまれ、宣教師の活躍出来る場も増えていった。いわゆる「フェイス・ミッション」(Faith Mission)の時代の幕開けである。1946年、外国福音

宣教会 (EFMA; Evangelical Foreign Missions Association) と超教派外国福音宣教会 (IFMA; Inter-denominational Foreign Missions Association) に所属する40の団体は、1969年には104になり、しかもその半分以上は第二次世界大戦後に設立された。

このような中であって、ラトウレットは、キリスト教は今までどの宗教も経験しなかったほどに人々の間に広まり、受け入れられて行くと考えた(注3)。キリスト教は、西欧とそれ以外の地域の人々とを地球的な規模で結び付け、仲間としていった。例えば、1974年のローザンヌ会議では、アフリカからの出席者が非常に多く目についた。

第二次世界大戦後に出現した、偉大な宣教の時代は「世界家族」としての一体感を教会にもたらした。そして、これは自分の国や自分の馴れ親しんだ文化を離れ、異なった言葉、習慣、皮膚の色の人たちの中で、キリストのために奉仕して生きる人たちによってもたらされたものである。

世界のいたるところで御言葉を伝えるこれら宣教師の働きのために、教会はその地域社会のなかで根付き、成長し、他の地域にも広がっていった。今日、42億の世界人口のうち、10億から12億の人が自分自身をクリスチャンとみなしている。そして、今や第三世界の人たちも、積極的に世界宣教の重荷をになおうとしている。

宣教の働きは完了したか

このような近年の状況により、私たちの宣教の役割はもうすで

に完了したのだ、と考えていいのであろうか。

そうではない。

ロジャー・パームは、雑誌「決断」で、タイ協議会の報告をしているが、そのなかでこのように述べている。

「西暦2000年までに世界の人口はおおよそ60億になります。そして、そのうち52億の人はイエス・キリストの福音に接することはないでしょう・・・20年後、イエス・キリストの福音を知らない人が今よりもっと増えているのです」（注4）

世界宣教のためのUSセンターの使命は、宣教への関心を高めることと、27億にも上る「まだ福音を聞いたことのない人たち」への宣教師を教育することだ。「まだ福音をきいたことのない人たち」を大きく分けると、中国人（10億）、ヒンズー教徒（6億5千万）、イスラム教徒（7億）の三つになるが、これをさらに細かく分けると1万7000の部族になる。欧米宣教団体のうちこれらの人々の間で働いているのは、10%にも満たない。このためタイで議決された「2000年までに20万人の宣教師を」のスローガンは、欧米および世界宣教に目覚めた第三世界の教会にとって、非常に困難な目標になっている。

世界で最も宣教師を必要としている地域が、政治的に最も宣教師の受入れを拒み、抵抗している地域でもある。インドは新しい宣教師の入国を制限し、外国人宣教師は、ここ15年の間に40%にまで減少している。古くからの宣教師はとどまることを許されても、新しく入国しようとする宣教師へのビザは、インド人が現時点で出来ない分野の専門家にも限られている。インディラ・ガンジー元首相は、「宗教はインドではインド人自身で宣教されなければならない」と主張し続けていた。

ビルマは1966年、全ての外国人宣教師の入国を禁止した。

ビルマは単なる旅行者にとってもビザを取得するのが難しい国である。

ブラジルはかつて最も宣教師の入国に寛容で、外国人宣教師も3000人ほどいたが、最近、新しく入国する宣教師に対して、制限を加えるようになって来ている。

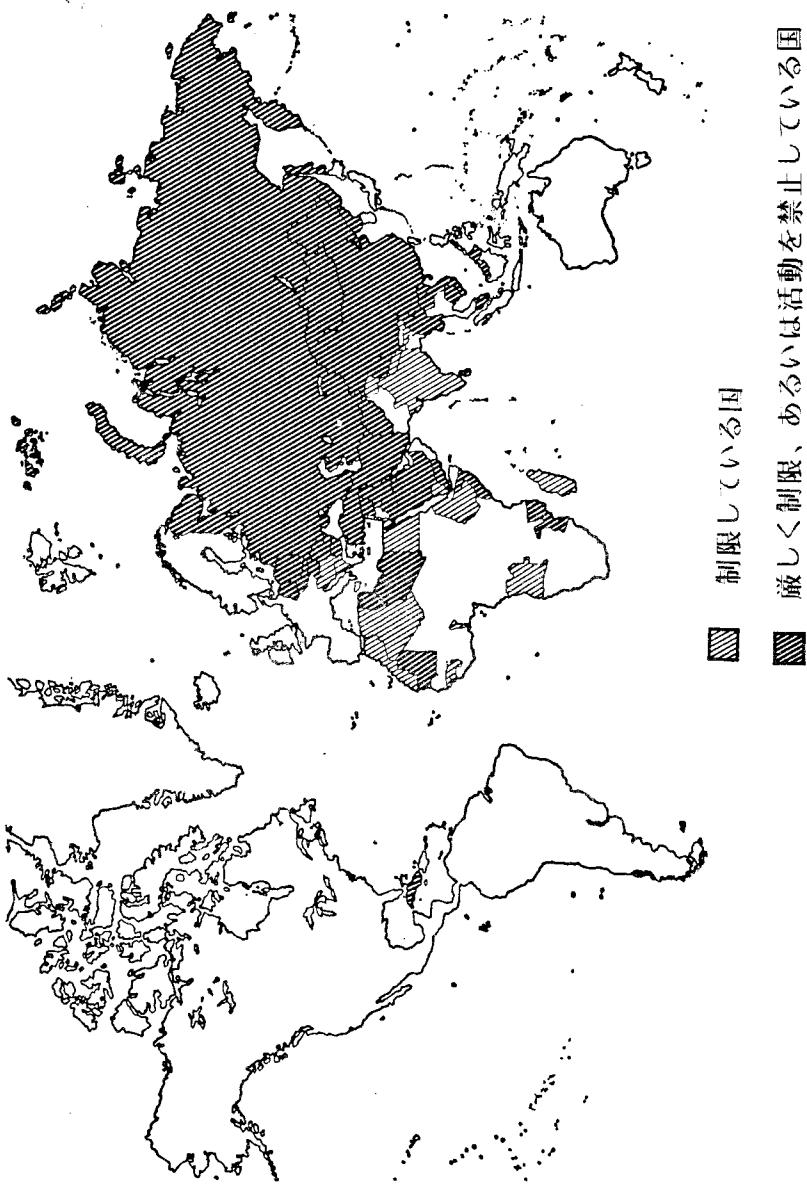
40ヶ国以上の国が、外国人宣教師の入国を認めないか、入国を厳しく制限している（地図参照）。特にアメリカ人に対しては政治的な理由からも制限を加える国が増えて来ている。例えば、ラテン・アメリカの国々では事あるごとに「アメリカ帝国主義」を叫び、アメリカ人宣教師も多くの場合「アメリカ帝国主義」と同じようにみなされている。

イギリス人宣教師で、著述家で講演家でもあるステファン・ネイルはインドで宣教していたが、クリスチャニティ・トゥデイ誌とのインタビューでこのように言っている。

第三世界の教会は「宣教」や「宣教師」といった言葉を嫌うようになって来ています。それは、私たちの失敗です。私たちは、あまりにも長く、彼らのところにとどまりすぎたのです。彼らにとって「宣教」及び「宣教師」という言葉には、西欧の侵略、権威主義、独立の障害、といった意味が重なっていません。（注5）

スリランカからの学生は、このように言う。「外国の宣教団体は、私たちを『宣教のためのロボット』にしたてようとしています」。

ある地域では、その国の政治的な制約と国民の愛国心が外国人宣教師の働きを制限しているだけでなく、伝えられる欧米の道徳



外国人宣教師の活動を制限している国

の退廃が、ますます宣教活動を難しくしている。例えば、イランで数年前起こった「キリスト教国」アメリカの低い倫理的、道徳的水準から自分たちの国民を守ろうとして立ち上がった宗教的指導者の革命が、それまでの欧米人宣教師の働きを無にしてしまった。

しかし、このような制約にもかかわらず、正しいやり方で宣教活動を行っている宣教師にとっては、以前よりもっと大きな可能性が、世界のいたるところに生まれている。神様の宣教のプログラムを阻止する迫害、不信、法的制約や政治的動乱は、神の宣教プログラムの発展を阻止するには至らなかった。ただ、過去に行われた方法と戦略を変えたにすぎないのだ。

宣教師を送るには

私たちは今までのやり方や熱意では「西暦2000年までに、20万人の欧米人宣教師を送る」というのは、実現不可能な目標となっているのを、事実として受けとめなければならない。北アメリカからの宣教師の数は増えてはいる。「ミッション・ハンドブック」12版によれば、短期の宣教師の数を加えると、1975年から1979年にかけて19%の増加があった。にもかかわらず、ハロルド・リンゼルは「福音宣教情報サービス」で、私たちの国が精神的に目覚めることなくして、北アメリカのクリスチャンによって世界を宣教することは期待出来ない、と言う。彼は1980年代に10億、あるいはそれ以上の人々に福音を宣べ伝えるという大きな挑戦を「ほとんど到達出来ない目標」（注6）と言う。1976年から1979年にかけて、全体で毎年3.5

第2章 宣教の実は結んだか 27

%宣教師が増えた（注7）にもかかわらず、最も大きな宣教団体である、IFMAとEFMAでは、宣教師の数はほとんど増えなかった。

例えば、超教派海外宣教協会（IFMA；Inter-denominational Foreign Missions Association）には49の団体、合計1万662人の宣教師（宣教師の資格のある国内スタッフを含めて）が登録されていたが、1980年にはその数は1万679人で、2年間にたったの17人増えたにすぎない。海外福音宣教協会（EFMA；Evangelical Foreign Missions Association）には81の団体が所属し、7632人の宣教師がいるが、その同じ期間にかえて0.2%の減少をみた。多くの主な教派で宣教師の減少を見たにもかかわらず、サウザン・バプテスト教会の海外宣教部門だけが成長を続けた。ただし、その宣教部門が1981年2月に発行したニュースによれば、それは1980年に短期「ボランティア」の数が27%増えたことによるもので、全体の宣教師の数は2%、数にして2人、増えたに過ぎない。

このように宣教師の数が増えないといった問題に加えて、欧米人宣教師を送り出す費用が加速度的に上昇している。ゴードン・カーウェル神学校の名譽学長、ハロルド・オッケンガーは次のように言う。

私の牧会する教会では、40年にわたり、年間予算25万ドルで142人の宣教師を援助して来ました。今日では、71人の宣教師を送り出すのに51万ドル、一人当たり7千ドル必要です。一組の宣教師をラテン・アメリカ、インド、あるいはヨー

ロッパに送るのに、自分の教会の牧師以上に費用がかかるとしたら、どれだけの教会が宣教の情熱を持ち続けられるか疑問です。(注8)

現在、多くの宣教団体は、一組の宣教師の家族を海外に送るのに、年3万ドル見ている。ヨーロッパのような物価の高いところでは、それ以上になる。一年に6%の物価上昇であれば、2000年には年間11万8000ドル以上になる。目標を達成するには、現在のほぼ6倍が必要だ。北アメリカにおける宣教のための予算が、現在、総額15億ドルに達していないことを考えるならば、私たちは世界宣教のために何か新しい別の方法を考えなければならぬ、ということに気がつかされる。

新しい宣教支援

今までの私たちの伝統的な考えでは、宣教師といえば欧米人、数を増やすといえば、欧米人宣教師の数を増やすということだった。しかし、宣教師を第三世界に求めることが出来るとしたらどうであろう。現に、この地域に住む人たちは世界宣教のために大きな貢献をしている。第三世界には、1万3000人以上の宣教師がいるが、1972年から1980年にかけて、282%の増加が記録されている(注9)。もし私たちが宣教師という概念のなかに、第三世界に住むクリスチャンで、訓練を受け、福音が宣べ伝えられていない人々や、近隣の文化にキリストを伝える人を加えるならば、目標の20万人はもっと容易に達成されるに違いない。

これらの「新しい概念の宣教師」には、部族や言葉の違い、歴

第2章 宣教の実は結んだか 29

史的な反目といった問題もあるかもしれない。しかし、ほとんどの場合、第三世界の人どうしということで、お互いに受け入れ易いといった良い面も多いはずである。

第三世界の宣教師であっても、新しい土地につかわされるには経済的な援助は必要である。そして、第三世界に住むクリスチャンの多くは、宣教師となる意志があり、またその資格、資質もあるが、財政的な基盤に欠けている。

韓国では、1980年に開かれた宣教集会で、1万人の若い人が海外宣教に参加する意志を表明した。教会が毎日6つ、新しく生まれているという驚くべき成長を示しているにもかかわらず、全世界に1万人の宣教師を送り出すというのは、財政的に無理である。韓国人宣教師の費用は西欧人宣教師の4分の1（1ヵ月2500ドルに対して625ドル）だが、それでも1万人の韓国人宣教師を送り出すには、1ヵ月625万ドル、1年間で7500万ドルが必要である。また、韓国には外貨持ち出し制限がある。もし、欧米からの援助があれば、こういった問題は解決され、もっと多くの宣教師を海外に送り出すことが出来るようになるであろう。

現地のクリスチャンの働き手を、外国のクリスチャンが援助する、というのは昔からあった。しかし多くの人が、このやり方に対して、聖書的な裏付けがあるのかどうかを問題にしてきたのも事実だ。ある人は、パウロは始めから自立した教会をつくろうとし、他の地域の教会からの資金の援助を求めなかった、と言う。また、ある人は、よその国の人たちを援助することに大きな問題と危険があることを指摘し、過去の経験から強い疑問を投げかける。

次の章で、次のような問題について、私たちの考えを述べてみ

たいと思う。

- ・現地のクリスチャン指導者を助けるのは聖書的か。
- ・不満や危険に打ち勝てるか。
- ・現地のクリスチャンを助けられるか。

第3章

聖書の立場；

現地のクリスチャンを助ける

祈禱会の後、年とった牧師がゆっくりと立ち上がった。そして静かに言った。「兄弟、私たちは長い間、だれかがギリアマ族に
つかわされることを祈って来た」

それから、今さらながら自分の決断がどんなに大変なものであったか、思い知らされているかのように息を止めた。

「私が行きます」

そう、これがケニアにあるアフリカ内陸教会（A I C ; Africa Inland Church）の牧師、ヨシュア・ムティアンディが、ギリアマ族に行く最初のカンバ族宣教師になる決心をした時のことだった。ギリアマ族は数世紀にわたり、イスラム、キリスト教、そして西欧文明に抵抗して来た。暑い、ほこりっぽい、海岸線に沿った平原に住む彼らは、ほとんどの時間を、ヤシ酒をつくることにあてていた。そして、全ての儀式的最後は、飲めや歌えのらんちき騒ぎになった。子供たちのための学校もなく、医療施設や教会もなく、また粗末な草ぶき屋根と土の家に住み、着るものも暑いのでほとんど必要としなかった。村

の真中にある「木の神」を祭る小屋ですら、中は散らかしっぱなしであった。彼らには目的もなく、向上心もなかった。

ムティアンディ牧師は自分の家族を涼しい高原に残し、ギリアマ族の村の一つに移り住んだ。そして、彼らの生活に入り込み、キリストを証しし始めた。

ギリアマ族は福音を受け入れようとはしなかった。しかし、難産だった村の女を助けるといった出来事を通して、次第に、村人たちは彼に心を開くようになっていった。そして最初の教会が建てられた。

アフリカ内陸教会（A I C）には涼しい高原の地を離れ、福音のため低地に住んで働こうという何人かの牧師がいる。暑く、乾燥した不毛の地ではあっても、このような地で働こうという人にはこと欠くことはないのである。しかし、彼らには資金がなかった。

ギリアマ族のなかで働く1人の牧師はこのように言う。

私は宣教師としてこの地で働くため献身しました。しかし、お金が無いのです・・・私一人がここで生活するのに精一杯です。私の家族へのゆとりはありません。私には8人の子供がいますが、私がここ数百キロも離れた海岸で宣教している間、神様だけが、私の家族がどのように生計を立てているかご存知です。私の今の収入では、家族と一緒に住むことは出来ません。

教会員たちはギリアマ族に送った自分たちの宣教師に援助を続けるため奮闘し、ギリアマ族の人たちも次第に福音を好意的に受け止めるようになった。もっと多くの宣教師を送ることが出来れ

ば、収穫の実を結ぶのは確かであった。

ケニアのアフリカ内陸教会総長、ムルワ師がクリスチャン・ナショナルズに手紙を書いたのは、このような状況にある、1974年のことであった。アフリカ内陸教会は、アフリカ内陸宣教（Africa Inland Mission）の働きの結果生れた教会組織で、まだ福音が宣べ伝えられていない8つの部族に宣教活動を行い、わずかながらでも新しい働き手のために援助をしていた。ムルワ師は、このように書いた。

「私たちにもう10人の宣教師がいたら、もっとギリアマ族の人たちに福音を宣べ伝えることが出来ます。私たちの宣教師を援助するのに必要なお金は、月々わずか50ドルにすぎません」

クリスチャン・ナショナルズは、この10人の働き手を援助するスポンサーをさがした。その結果、数年でギリアマ族の村々に10以上の教会が建てられ、4人のギリアマ族の若者が聖書学校に入り、自分たちの部族に福音を宣べ伝えるため、学び始めた。

ケニア人宣教師がギリアマ族のなかで働けるよう、私たちが援助をしたことは、正しかったであろうか。聖書では、経済的な必要を手紙に書き、援助を求めた、この牧師のような人を助けることについて、何と言っているのだろうか。

「兄弟に助けが必要な時」

わたしたちは、兄弟を愛しているので、死からいのちへ移ってきたことを、知っている。・・・世の富を持っていながら、兄弟が困っているのを見て、あわれみの心を閉じる者には、ど

うして神の愛が、彼のうちにあるか。子たちよ。わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもって愛し合おうではないか（ヨハネ第一3：14-18）。

ヨハネは、仲間のクリスチャンに対する燃えるような愛をかかげ、イエス・キリストの本当の弟子とは何なのかを教える。

「私たちは、兄弟を愛しているので、死からいのちへ移ってきたことを、知っている」

このヨハネの言葉は、イエスの言葉でもある。

「互いに愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」（ヨハネ13：35）。

ヨハネは、私たちが兄弟を愛しているので、私たちが救われている、つまり神の家族の一員なのだ、と言う。私たちが豊かであるにもかかわらず、生活に最低限必要な物すら持っていない、貧しい兄弟を無視して、私たちが彼らの「家族」の一員である、とすることが出来るのであろうか。私たちが彼らに心を閉ざしているのに、彼らと家族であると言うことは出来ない。ヨハネは私たちに単なる言葉だけでなく、その言葉を実践するように求めている。「あなたに、神様の祝福がありますように」という言葉と共に「ここにあなたの必要な物があります。私が持っている物をどうぞお使い下さい」と言えなければならないのである。そして、これは単に必要という以上のもの、つまり「正しい」事なのだとヨハネは言う。

ギリアマ族につかわされた牧師には、経済的な「必要」があった。なぜなら、経済的な理由により、彼は家族と一緒に住むことが出来なかったからである。このような牧師を助けるのは、聖書

第3章 聖書の立場；現地のクリスチャンを助ける 35
的に見て「正しい」ことなのである。

家族の絆

しかしながら、私たちの貧しい家族の必要を満たすということが「正しい」ことであるならば、マス・コミュニケーションと衛星通信の今の時代、私たちの責任は耐えられないほど大きい、と言える。なぜなら、世界のあちらこちらから、私たちの手に負えない大きな「必要」が伝えられて来るからである。教会はいつの時代にも「家族」の特別の必要について責任を負ってきた。使徒パウロは、ガラテヤの教会に「だから、機会のあるごとに、だれに対しても、とくに信仰の仲間に対して、善を行おうではないか」（ガラテヤ6：10）と呼びかている。

パウロはシリアのアンテオケで牧会を始めた時、このことを実際に実行している。新しいアンテオケの教会と古いエルサレムの教会には、伝統や、宗教儀式をめぐる対立があり、緊張関係があった。にもかかわらず、エルサレムからアガボが来てアンテオケの教会の兄弟たちに、日照りによるエルサレムの教会の困窮を伝えたとき、彼らは「兄弟たちを助ける決心をした」のである。そして、彼らの出来る最大限のことをし、捧げものをバルナバとパウロに託してエルサレムにつかわした（使徒11：28, 29）。大切なのは、この援助の贈り物が、個人にではなく、教会の役員から役員（長老たち）に正規の手続きを経て送られたということである。

ユダヤの地以外で最初に生れた教会が、「家族」の必要を分かち合うという原則を実行に移した。彼らはシリアという外国に住み、異った文化のなかで生活しているにもかかわらず、ユダヤに

いるクリスチャンを彼らの兄弟と認め、「物質的に恵まれない状態にある」彼らのために、単なる言葉だけではなく、実際的な援助を送ることによって、真実な愛を示したのである。パウロのこの考えは、数年後にもコリントの人たちに同じことを求めているので、今一度確認することが出来る（コリント第二9：2）。彼は、援助の贈り物を集めるためにテトスをつかわすとき、コリントの人たちは自分の気持ちに答えてくれる、ということを知っていた。この考えからすると、今日の私たちにとって、私たちが貧しい人たちからの「援助を求める集中砲火」を浴びているのではなく、私たちが関心を持っている人たちの「必要への積極的意志的な応答」が神様から求められている、ということになる。

ヤコブは「富の間違った使用」について、次のように厳しく戒めている。

あなたがたの富は朽ち果て、着物はむしばまれ、金銀はさびている。そして、そのさびの毒は、あなたがたの罪を責め、あなたがたの肉を火のように食いつくすであろう。

あなたがたは、終わりの時にいるのに、なお宝をたくわえている。見よ、あなたがたが労働者たちに畑の刈入れをさせながら、支払わずにいる賃金が、叫んでいる。そして、刈入れをした人たちの叫び声が、すでに万軍の主の耳に達している。あなたがたは、地上でおごり暮らし、快楽にふけり、「はふられる日」のために、おのが心を肥やしている。そして、義人を罪に定め、これを殺した。しかも彼は、あなたがたに抵抗しない（ヤコブ5：2-6）。

ヨハネは、もし私たちが兄弟を愛せないのであれば、それは私

第3章 聖書の立場；現地のクリスチャンを助ける 37

たちがまだ死から命に生れ変わっていないからだ、と強く警告する。「わたしたちは、兄弟を愛しているので、死からいのちに移ってきたことを知っている」（ヨハネ第一3：14）。「私たちの兄弟を愛せない」ということには、私たちが助けることが出来るにもかかわらず、助けを必要としている兄弟姉妹に、心を閉ざすということも含まれる。これは、結果的に彼らの死に加勢しているということに他ならない。

一方、私たちの家族の「必要」が示され、神様の導きに従う準備が出来ているなら、神様の霊が私たちの心に強く働きかけ、特別の仕事、あるいは必要な地域での奉仕を示されるのではないだろうか。このことはテトスの経験でもある。パウロはコリントの人たちにこのように書いている。「私があなたがたにたいして持っている同じ熱情を、テトスの心にも与えて下くださった神に感謝する」（コリント第二8：16）。

「彼ら自身にまかせよう」症候群

教会はユダヤ人社会に生れたが故に、最初から、人種と文化的な誇りから解き放たれる必要があった、と言える。不幸なことにこの罪は、欧米の教会にも深く根を下ろしている。人種及び文化的な優越感は、自分中心という結果をもたらす。私たちは、自分の教会の会員を受入れる。また、自分の教派の人たちを「私たちの家族」とする。そして、彼らの必要を補うことは、私たちの神様が与えて下くださった責任とみなす。しかし、私たちは他の国のクリスチャンは「外国人」であって、彼らの必要は彼らの責任だと思ふのである。

27年間インドで奉仕し、このような矛盾に悩まされて来た宣

教師、ケネス・ドナルドは次のように私たちに尋ねる。

「貧しい文盲の人たちや、借金にあえぎ、わずかな収入でやっと自分たちの土とわらぶきの教会を持つことが出来た人たちのことを思うとき、私たちはここ欧米にある素晴らしい宮殿のような『自分の』教会堂を正当化出来るでしょうか」（注1）

神の家族に外国人はいない

ペテロがカイザリアのコルネリオの家を訪ねた時の出来事は、「家族」とは何であるかを私たちに教えてくれる。

私たちはその出来事を、このように描くことが出来る。

ペテロはユダヤ人としての誇りの強い、また性格の激しい人だった。そして今、異邦人であるローマ人で一杯になった家の中に立っている。近くに座っているのは神様を求める、献身的なコルネリオ。ペテロは最初、異邦人の家に入ろうとすらしなかった。しかし、神様はそのような彼をいさめた。そしてペテロが説教を始めたとき、ここにいる異邦人たちはキリスト教に回心した。ペテロと一緒に来たユダヤ人たちは、「聖霊の賜物が異邦人にもそそがれたのを見て驚いた」（使徒10：45）のである。

この経験を通して、ペテロと彼の同労者は、神の「家族」に外国人はいないことを学び始めた。そしてこのことは、ペテロが後にエルサレムに戻り、教会指導者の前に立ったとき、異邦人と交わりをもった彼の行動を正当化するために、伝えなければならない事実であった。

私たちは今だに、神様の「家族」には世界中の全ての国の人が含まれている、ということをおぼなければならぬのである。私

第3章 聖書の立場；現地のクリスチャンを助ける 39
たちの家族は多民族から成り立ち、私たちの責任はその全ての民
族に及ぶのである。

例えば前述したケニアの教会は、カンバの教会の願いに答え、
家を離れ、家族を離れ、自分の育った文化を離れ、まだ福音が伝
えられていないギリアマ族のなかに宣教師をつかわす、というこ
とで彼らの責任をはたしているのである。しかしながら、彼らは
より広い神の家族の支援が必要である。海のむこうの兄弟姉妹た
ちはこの必要を認め、それに対し愛のうちに応えた。

不公平の是正

パウロが捧げものをするようにコリントの教会に求めたとき、
彼は持ち物の平等ということに焦点を合せた。

「それは、ほかの人々に楽をさせて、あなたがたに苦勞をさせ
ようとするのではなく、持ち物を等しくするためである。すなわ
ち、今の場合、あなたがたの余裕があの人たちの欠乏を補い、
後には、彼らの余裕があなたがたの欠乏を補い、こうして等しく
なるようにするためである」（コリント第二8：13，14）。
しかし、これとは別の次元の平等が、最初のキリスト教会議が招
集された時に問題となった（使徒15）。パウロとバルナバは、
教会内に人々の育った文化的な違いがあることを認め、自分たち
の文化的な価値観を他の人に押し付けてはならない、と強く主張
した。なぜなら、ユダヤ人指導者たちは、異邦人がキリスト教徒
として受け入れられるためには、まず割礼を受けユダヤ人になる
という文化的な伝統に従わなければならない、と主張していたか
らである。

この論争でペテロはパウロとバルナバの側に立ち、議会でカイ

ザリアのコルネリオの家での経験を繰り返して言った。

．．．兄弟たちよ、ご承知のとおり、異邦人がわたしの口から福音の言葉を聞いて信じるようにと、神は初めのころに、諸君の中から私をお選びになったのである。そして、人の心をご存じである神は、聖霊をわれわれに賜わったと同様に彼らにも賜わって、彼らに対してあかしをなし、また、その信仰によって彼らの心をきよめ、われわれと彼らとの間になんの分けへだてもなさらなかった。しかるに、諸君はなぜ、今われわれの先祖もわれわれ自身も、負いきれなかつたくびきをあの弟子たちの首にかけて、神を試みるのか」（使徒15：7-11）

ペテロもパウロも、異邦人に対する彼らの伝道の成果を示し、ユダヤ人であっても異邦人であっても、私たちは皆、精神的に平等であるというこの原則を大胆に弁護した。

そして、ヤコブが最後に「神が初めに異邦人たちを顧みて、その中から御名を負う民を選び出された．．．」（使徒15：14）という事実を認め、この会議を締めくくった。

教会はこの会議で、国籍、文化、人種の違いが、私たちの救いを否定することは出来ない、という事実を正式に認めた。全ての人は、神の「永遠の家族」の一員なのである。ジョン・バイロンはその事実を、このように歌う。

私たちは神の家族

そうです、私たちは神の家族

神は私たちが一つとなるため、この世からつれ出された

それは、私たちがこの世に光をもたらすため

第3章 聖書の立場；現地のクリスチャンを助ける 41

救いの平等は教会の礎石で、宣教の原動力である。にもかかわらず、自分たちと異なる礼拝のやり方や信仰の表現をする人々に対する尊敬の欠如は、論争の種となり、教会どうしの理解を妨げる原因となる。

例えば、西欧の宣教師は、ピアノやオルガン、あるいはパイプ・オルガンが、自分の国では場末のキャバレーやバーで使われているにもかかわらず、アフリカの教会で使うことを求め、彼らのドラムや他の楽器を、「異教徒」の祭りで使用されているといった理由で認めなかった。

現地の指導者たちの宣教を助けるとき、宣教師たちは、しばしば欧米のやり方に従った礼拝や教会の運営、責任のとり方、生活の仕方などを求めた。もし現地の指導者たちが「神の家族」として、私たちと平等であり、私たちと共に御国を相続する人たちであることを受け入れているならば、私たちは精神的にもお互いに平等であることを認めなければならない。

全てのクリスチャンは、キリストを頭とする体の一部分を形成している。したがって、全身は、おのおのの体の部分がお互いのために等しく関心を払うとき、最も良く機能するのである。

「からだは一つ、御霊も一つである。あなたがたが召されたのは、一つの望みを旨として召されたのと同様である。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ」（エペソ4：4、5）なのである。

インド、アフリカそしてラテン・アメリカにある教会もまた、北アメリカと同じように、聖霊が教会を導き、たしなめ、なくさめ、また罪ありとする。礼拝のやり方や、生活様式が違っていても、そんなことはちっとも私たちの問題ではない。それは神が決める事なのである。助けを必要としている教会を助けるというそ

の責任は、聖書に明白に書かれていることで、しかも、論理にかなうことでもある。

宣教学の教授であるピーター・バイヤーハウスはこのように言う。

教会はその置かれている場所や地域だけに宣教の重荷を負っているのではなく、全世界の全てのクリスチャンに対しても同じように宣教の責任があります。「一つの体、一つの福音、一つの世界」においてレスリー・ニュービギンは、現地の教会が自分自身の存続のために奮闘し、なおかつ隣人への宣教の重荷を負わされているとき、欧米の教会が経済的にも人的資源にも十分であるにもかかわらず、時々援助だけですまそうというのでは、いかにも不合理だと言っています。（注2）

欧米社会に住むクリスチャンは、意識する、しないにかかわらず、巨大で広範囲なクリスチャンの活動やプログラムの恩恵を受けている。例えば、キリスト教系の学校や大学はいたるところにあり、またそれらの学校や神学校を卒業した教育者や牧師による指導を身近に受けることが出来る。また、クリスチャンの資金によるラジオやテレビを聞いたり見たりすることが出来、そしてキリスト教団体からの寄附金によって建てられたキャンパスや会議場を利用することが出来る。その他、かぞえあげたらきりがないほどである。私たちの国にいる、ということだけで受けることの出来るこれらの利益は、私たちを自分たちがまわりから完全に自立しているとは言えなくしている。事実、これらの広い意味での依存関係は、私たちに非常に多くの機会を与え、受けることを可能にしているのである。したがって、欧米に住む人たちは、世界

3章 聖書の立場；現地のクリスチャンを助ける 43

で最も裕福で、資金を全体の体でよりも、むしろ一部分、すなわち欧米のみで使ってしまったと言え、私たちは自己本位で、自分中心であると他の国の人たちから言われてもしかたがない、と言える。

しかも私たちは、気前よく与えるときですら無条件ではなく、「西側からのお金は西欧人のため」というのが基本なのである。ビヤン・カトー博士はグリーン・レイク宣教会議でこのような冗談を言った。

「ドルがあるところは、どこにでも、人格としての西欧がいます。もしいなければドルが来るはずがありません」

このことは現地の人にとってはユーモアではすまされない問題である。多くの現地の人、アメリカのクリスチャンは、自分の国の人がいるときだけその国に関心を持つ、と信じているからである。（注3）

全ての僕（しもべ）

私たちは「援助する」側にいるが故に、私たちの心奥深くしみこんだ優越感と闘わなければならない。50年前、宣教師で国會議員だったローランド・アレンは、このように書いている。

信仰の欠乏は、私たちが現地の人を信じることを出来なくさせ、彼らの自立を恐れます。私たちは現地の人の中で、自分ではなくてはならない人物であるかのように振舞い、またそのように思います。．．．もし誰かが現地の人にもうすこし自由な裁量を与えてはどうかと忠告するならば、最初に思うのは、彼らがどのようにしてそれをなしとげるのか、ということより、もし

それをゆるしたなら、とんでもない失敗の発生をどうしたら防げるだろうか、という恐れです。（注4）

未熟な教会を守るという発想と共に、今までの習慣で何が「正しい」かを知っているとする宣教師によって、説教と教育がなされてきた。しかし、宣教の本当の幻を与えられている宣教師は、こうした今までの習慣にとられることなく、人と人との関係でもっとも効果的と思われる方法をとる。

エド・ダントンは、広く行き渡っている間違っただ概念の一つは他の土地の人々、とりわけ西欧人以外の人々は、洗練された西欧人の指導が必要な子供みたいなものだ、と語っていることだと言う。このように信じている人たちにとっては、現地の文化のなかに福音が独自に根付くということは考えられないことである。

そして事実、このような態度の宣教師の故に、現地の人との間に人種的・文化的な亀裂が生じ、「現地の人は信頼出来ない」とし、体の主要部分からの供給、すなわち援助は必要としない、としてきたのである。そして、このことを正当化するため、あいまいな「自立、あるいは自己拡張」が聖書的な規範として前面に持ち出され、「必要にある私たちの兄弟に分け与える」ことの聖書の原則は、無視されて来た。

だれが最初になるか

私たちは教会に、しばしば悲しいほどに僕（しもべ）の態度が欠けていることを、告白しなければならない。歴史の夜明けと共に、私たちの敵である地位、誇り、名声などが、謙遜、奉仕、献身と張り合ってきた。

第3章 聖書の立場：現地のクリスチャンを助ける 45

イエスは本当の牧者は自分の羊のために命をも捨てることと教え、神に従うということは、柔和で自己を捨てるということを示した。そして、イエスは弟子たちに、「．．．しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう」（マタイ19：30）と言った。

イエスは弟子たちに、神は特別の「約束の人たち」だけを愛しているのではなく、どこにでもいる普通の人たち全てを愛していることを示された。

イエスは、家族、同じ言葉の人たち、そして困の中から、自分の名前のために、人々を呼び出される。それが多くの肢体よりなっている彼の「体」なのである。彼らはこの世とは違う新しい秩序に従って生活し、イエスが社会的に排斥されたライ病患者に示されたような、自己犠牲の愛と寛容とお互いへの関心によって、この世を驚かせる。イエスの真実は、パリサイ人や奴隷にまで伝わった。イエスの言葉は、全ての国、そして部族にとどいた。イエスによって呼び出された人こそが、一致と多様性のある神の家族なのだ。イエスが清めた人をだれが罪人とすることが出来るであろうか。神の家族には外国人はいない。そしてお互いに責任を分かち合ってこそ「家族」といえるのである。

ギリアマ族に行くケニアの宣教師を助けることや、同じことをしようとしている人々を助けることについて、聖書は何をいっているであろうか。私たちと同じ神の家族であるこの人たちに愛—すなわち単なる言葉だけでなく実際の行い—でもって応答することは当然のことで、そのことこそ聖書は私たちに求めているのである。

そう。現地の人々を助けることはイエスの御旨にかなうことである。そして、長年にわたり教会と宣教師は、紐付きでない援

助について、ひどく間違っただ概念を持っていたのである。

あなた自身も、このような間違っただ考えを、意識的にしろ無意識的にしろ持っているかもしれない。現地の指導者を助けるための効果的で、有効な方針を打ち出す前に、次の章で、これらの間違っただ概念のいくつかを取上げてみたいと思う。

第4章

現地指導者への印象：真実か誤りか

皆は、彼のことを「ダイナマイト」と呼ぶ。それほど、彼の説教は力強い。この、福音説教者・シオドラは自分の命が助けられた夜のことを、今でも良く覚えている。神様がシオドラの命を助けられたからである。

シオドラは福音宣教のため、フィリピンの山奥のある部族の村まで旅をした。しかし、サタンは彼を殺す計画を立てていたのである。その村の占い師は酋長の一人をけしかけ、ボーロー・ナイフ（フィリピン諸島で用いられている大形ナイフ）でシオドラの働きをこの村で終わらせようとした。この酋長は、ちょうど数週間前、二人の男の首をはねたばかりだった。

酋長は真夜中にシオドラの部屋に忍び込んだ。そして、まだ起きていたシオドラの首めがけてナイフをおろそうとした。

「しかし．．．」と、シオドラは思い起こしながらゆっくりと言った。

「だれかが彼の腕をおさえたのです。そしてナイフは彼の手から落ちました」

酋長の腕をおさえたかたは、その酋長の人生に別の計画を持つ

ていたのである。その時から、酋長はシオドラの信じていた神を信じた。そして、後に、宣教師となった。

シオドラにはこのような証しが、たくさんある。

フィリピンには、100以上の未開の部族が文明から遠く隔たった低地や、人が入るのが極めて難しい山奥に住んでいる。しかし、ほとんどの伝道者は都会に住み、人口の70%を占めるこのような農村や僻地への伝道は無視されている。

この状態を改善するため、1960年、この島々の全ての人々に福音を宣べ伝える目的でフィリピン宣教協会（PMF； Philippine Missionary Fellowship）が組織された。福音説教者・シオドラは、すでにつかの教会を牧し、また、他の組織でも働いていたにもかかわらず、ここ数年来PMFにもかかわって来た。そして1978年、彼は正式にPMFのディレクターになった。

PMFが設立されたその後、指導者たちは、僻地宣教のための実際的な訓練をほどこす聖書学校の必要を痛感させられた。将来性のある若い人を人口600万の大都会マニラに送って必要な訓練を与えた後、再び僻地に呼び戻すのは難しかったからである。

1961年、フィリピン宣教学校（PMI； Philippine Missionary Institute）が設立された。一年に平均60人の生徒数で、PMIはPMFの傘下にある宣教の仕事に、何百という若い人を送り込んだ。PMFの宣教師は、犠牲的な生活を送らなければならないことを知っていたにもかかわらず、応募者は常に定員を越えた。単身の宣教師には月7～10ドル、家族持ちの宣教師には100ドル未満が支給されたが、これだけではその日の生活にも事欠き、子供の教育にまではとても手がまわらなかった。

第4章 現地指導者への印象：真実か誤りか 49

ほとんどの人たちは、経済的な犠牲に耐え、他の仕事に移った人はわずかであった。そしてこれらの人の苦労はむくわれた。

その内の一人、看護婦のリリア・カステロは、宗教教育で修士課程を終え、ミンダナオのママンワ族の中で働く道を選んだ。ミンダナオに行くには、マニラから1日半船に乗り、バスで1日、そして4、5時間険しい山を登らなければならない。にもかかわらず、彼女は「とっても険しいのよ。膝が顎についてしまうくらい」と明るく笑う。

シオドラがリリアを訪問した時、ちょうど5つの部族の長が集まって来ていた。部族はそれぞれ40～50人からなり、草で作った家に犬や豚と一緒に住み、着る物は一枚の布で、それをボロボロになるまで着つくすのである。彼らは今まで一度も平和的な目的で、集まったことはなかった。しかし、今日は違っていた。今日集まったのは、洗礼を受けるためだったからである。

リリアの両親や友達にとっては、なぜ、彼女がこんな山奥の僻地で人生を無益に使っているのか理解出来ない。

リリアや彼女の同労者が休養や病気の治療のためマニラに戻るとき、PMFの本部に泊まるが、最近まで本部は、小さな4部屋のコンクリート造りのビルで、そのうちの2部屋は、スタッフのための寝る場所として使われていた。このみすばらしい建物で仕事は続けられた。40人の宣教師に送る費用や、PMFの必要な経費のほとんどは、国内からの援助で調達されたが、1978年には、PMFは財政的にすっかり行き詰まってしまった。宣教師として任地につかわされるよう待っていた人たちも「保留」とされ、現在のスタッフや宣教師も出費がこれ以上増えないよう、切り詰めなければならなかった。シオドラは島々を訪ね、人々の心が福音に対して開かれつつあるのを見て心を痛めたが、収穫のた

めこれ以上の宣教師を送ることは出来なかった。

彼がクリスチャン・ナショナルズ・エバンジェリズム・コミッション (Christian Nationals Evangelism Commission) に手紙に書いたのは、このような状況にある時だった。そして、CNECはPMFの経済上の負担を引き受けた。

その結果、1983年までに126人の宣教師がPMFで働くことが出来、100以上の教会が建てられた。宣教師は教会で指導者を訓練し、それが終わると次の任地につかわされる。シオドラは次のように言う。

「もし教会がその宣教師をそのまま引き止めておきたいのであれば、宣教師は牧師にならなければなりません。教会は牧師を経済的に助け、自立するのです」

クリスチャン・ナショナルズは、マニラにある本部の建物を新しくするための資金も集めた。この建物はスタッフのための家でもあり、また時折マニラに出て来る宣教師の宿泊施設でもある。

PMFとクリスチャン・ナショナルズのこのような関係を、フィリピンで働いている一人の欧米人宣教師が耳にしたとき、「シオドラと彼のグループは今まで良い働きをしてきて、このことは広く受け入れられています。クリスチャン・ナショナルズのこの種の助けが、彼らをスポイルしないことを望みます」と言った。

この言葉には、ほとんど無意識に、多くの欧米人クリスチャンの持っている態度を反映している。それは、どのような形にせよ現地の教会を経済的に援助することは、彼らのためにならない（なぜなら、欧米人だけがお金を上手に使えるから）、というものである。

この問題、すなわち現地人クリスチャンを援助することに対す

第4章 現地指導者への印象：真実か誤りか 51

る間違った概念を論議する前に、私たちは次のことををはっきりさせたいと思う。それは、欧米の教会はお金だけ送れば良いのであって人ではない、と言おうとしているのではない、ということだ。

聖書は、クリスチャンはたとえどのような文化の中に住んでいようとも、私たちに与えられた使命、つまり宣教の責任をまぬがれることは出来ない、と言う。そして欧米人宣教師には、まだ福音が宣べ伝えられていない地域での宣教、教会が急速に成長しているところでの指導者の訓練や教育等々、やらなければならないことが沢山残されている。世界宣教のためのローザンヌ大会事務総長、ゴッドフレッド・オセイメンサは、このように私たちに警告する。

「私たちは新しいクリスチャンを教育し、訓練するなんらかの新しい方法を見出さないかぎり、一世代あるいは二世代後に、自らをクリスチャンと呼んではいても、誰からも教えられたことのないたくさんの人が出てくる可能性があります」（注1）

欧米は、アフリカ、その他の必要な地域にクリスチャンの働き人を送り続けなければならない。しかし、同時に現地人宣教師を助けることの重要さも理解しなければならないのである。福音宣教について正しく理解すると言うことには、今までの間違った考えを正すということも当然含まれるのである。

スポイルする

1950年代の古典的な宣教の本「文化の接点での宣教」でスタンレー・ソルタウは、現地の教会に「与えることの誘惑」に抵

抗しなければならぬ、とこのように強調している。

現地の人々が宣教師のところに助けを求めて来る時、実際に必要な2～3倍を求めて来るのです。彼らは、社会的な習慣としてそうするだけで、これが道義的な問題とか、性格的な欠陥として見られる、ということを経験する多くの場合、意識しません。彼らの熱心な願いに耳をかさないというのは、特に若い宣教師にとって愛情のない仕打ちと思えるかも知れません。しかし、若いクリスチャンと若い教会を自分の足で立たせ、独立の精神と自主性を養うには、絶対に必要な事です。(注2)

こういった考えは今日でも生きていて、ほとんどの宣教師は、援助が、教会の成長を妨げるか駄目にすると思われ、教会が建てられるやいなや自立しなければならない、と信じている。ソルタウは、欧米の国々は第三世界の教会を経済的に援助してはいけないと信じていた。振り子はあまりにも左に振れてしまった。宣教団体は現地の人々が自立し、自力で発展するために必要な援助までも制限するようになってしまった。

ホートン大学大学院のジェームス・ブルードマン博士は、このように言う。

「成長しようと奮闘している、世界の数えきれないほど多くの弱い教会を助けるのが、正しい宣教ではないというのであれば、この考えのあまりにも近視眼的なのに、私は驚きます」

にもかかわらず「ライス・クリスチャン」をつくることの恐れは容易には消えない。インドで始まったその言葉は、改宗した後自分のカーストを出て、ミッション・ステーションに移り住んだ人たちのために使われた。彼らはクリスチャン・ゲッターで学び

第4章 現地指導者への印象：真実か誤りか 53

働き、結婚し、礼拝を守った。大部分の人たちは本当の改宗者だったが、信仰を告白することによって受ける利益を目的にした人も、なかにはいた。そして、この人たちをさして「ライス・クリスチャン」という言葉が生れたのである。

間違った経済援助は、確かにクリスチャンを、そして教会を弱くし、その自立を妨げる。ジンバブエのクリスチャン指導者、ピアス・ワカタマは彼の著書「第三世界の教会の独立」でこのように言う。

「教会の自主性を守れという聖書の教えは正しい．．．しかしこの原則は守られていません。外国の資金は教会を建設し維持するために用いられます。が、結果はアメリカのドルがその教会の自主性を障害し、しばしば自分たちの費用でまかないきれない夢のような大きなプログラムをその教会に押し付けます」（注3）

資金の援助の仕方によっては、現地の教会に依頼心を起こさせ精神的なかたわにする。しかし、この後で述べるように、正しい資金の援助であれば、現地の教会の自立の道を開き、外国の援助への依存から抜け出させるのである。

援助してはならない

教会の自立を強調するあまり、他からの援助を受けてはならない、してはいけないという誤った考えが広がった。

自立した宣教が、現地の文化、土壌から生れてきたものであれば、その地に根を下ろし、その地域の環境の中で育っていくはずで、現実という冷たい風のなかで枯れてしまう「温室」育ちとは違う。

宣教が、自分たち自身の判断や計画によってなされ、それに対する外からの干渉がなければ、たとえ外から経済援助を受けたとしても、その自立を妨げることにはならないはずである。従来の欧米型の経済援助にともなう問題は、支配するということであり欧米の期待、要求が援助に結び付いている、ということである。したがって、宣教にともなういろいろな問題は、受ける人より与える人の考えを反映しようとする結果、起こってくる。

PMFのような宣教団体は、西欧の組織から援助資金を得るために、その自主性と方針を簡単にまげるようなことはしない。シオドラは、PMFの支持者にクリスチャン・ナショナルズとの関係を手紙に書いて、このように説明している。

クリスチャン・ナショナルズは、私たちの自主性を妨げることはしないでしょ。私たちは、自分たちで役員を決め、その役員によって運営し、フィリピンの実状にあった宣教の方法をとります。したがって、私たちの自主運営の方針は全く障害されることはありません。．．．私たちは、私たちと共に働く宣教師を援助するため、フィリピンの教会と共に働きます。

外国からの援助は、国内からの援助を少なくすることにはならず、かえって増やす結果となった。そして今日、PMFの活動のための予算の60%はフィリピン国内から来ている。かつてないほど多くのフィリピン人宣教師が、未開の奥地に自分たちの教会を建設しているのである。

信頼出来ない

それほど一般的ではないかも知れないが、欧米の教会にある誤った概念の一つに、欧米以外の教会は、お金を扱うにはあまりにも未熟だ、というのがある。そのため、アフリカの教会の会計係がお金を使い込んだ、実現不可能な夢のような計画にお金を注ぎ込んでいる、といった様々な例を持ち出す。

1. 間違った前提：若さ故の未熟

この間違った概念には、いくつかの間違った前提がある。その一つに、西欧以外の国の教会は若い、ということだ。すなわち、教会の長い歴史を持っていないため、経験不足というのである。現代の宣教の歴史は、19世紀初頭のウィリアム・カリーにまでしかさかのぼれないのは事実だ。しかし、南インドの教会は、一世紀にまでその歴史をさかのぼることが出来る。使徒トマスはそこに教会を作り、マドラスで殉教した、と言う。またエジプトのコプト派の教会は、その起源を教父の時代にまでさかのぼることが出来る。北アフリカのアレキサンドリアの町は、教父たちが教えた神学校があるのを誇っている。

3世紀には、キリスト教はエチオピアと中国にまで伝わっている。伝説によれば、使徒バルトロマイはアラビアに行き、西暦525年にはキリスト教はその地に広く伝えられていたのは確かなようである。

歴史家のハーバード・ケーンはキリスト教の伝播をこのように要約する。

5世紀末までに、キリスト教は、成功の度合いは異なっているにしてもローマ帝国内を広範囲に、すなわち南はサハラ砂漠から北はハドリアヌスの長壁（イングランドの北部を東西に横断して築いた防壁・2世紀）まで、そして東はインドから西はスペインまで伝わっていた。...

... 極めて早い時期に、キリスト教はメソポタミヤとペルシャに広がった。そこからインド、中央アジア、中国にと伝えられていった。これはキリスト教のネストリウス派によるものであった。... その後の時代を通して、いつもネストリアン教会が偉大な宣教教会の一つとなった。（注4）

6世紀までには教会はヨーロッパ、北アフリカ、ペルシャ、中国、インドと広く伝えられた。教会は弱く迫害やイスラムの影響で消えていったにもかかわらず、多くの土地で命の灯は残った。このように、新大陸に清教徒が上陸する何百年も前から教会は第三世界の多くの地域で存在しており、多くの地域で、その歴史がある。

西欧の教会は、迫害を通して成長の何たるかを学んだといえるだろうか。ロシアの人たちのように、信仰のために投獄されたことも、イスラムの国のクリスチャンが持っているような勇気のため、迫害されたこともない。東アフリカで数多くの人々が死んだような飢えや、かんばつや災害を経験していない。また、ウガンダのクリスチャンが経験したような、精神病で残虐な指導者によって支配されたこともない。中国のように聖書や、キリスト教の書物や教育施設なしで、クリスチャンとして生き残ることが出来たであろうか。あるいは、カンボジアの人たちのように生きるために自分の家を捨てて避難した人がいるであろうか。

これらの迫害のなかで生きたクリスチャンは、ヤコブのこの激励の言葉を自分のこととして理解出来る。

「兄弟たちよ、いろいろな誘惑にあった時、喜びなさい。なぜならあなたの信仰がためられるとき忍耐をうみ、．．．あなたは成長し、完全になり、何もかけたところのないようになるためです。」（ヤコブ1：2-4）

もし信仰の成長が苦難の副産物の一つであるならば、第三世界の教会にこそ、西側の教会に教えることが沢山ある。

2. 誤った前提：数が少ない

多く人は第三世界の教会は小さいという前提をもっている。ピーター・ワグナーは「西暦2000年までに、世界のクリスチャンのおおよそ60%は、第三世界の人たちとなるであろう」と言っている。もうすぐキリスト教は、白人の宗教とはみなされなくなるであろう。「白人のクリスチャンが減少するというのではなく—そんなことはあってはならない—そうではなく、彼らがこれからますます増大する褐色、黒色、赤色や黄色のクリスチャンと合流することになるのである」（注5）

もっと具体的に言えば、世界で最も大きな集会は発展途上国にある。例えば、韓国のソウルにある完全福音中央教会（Full Gospel Central Church）には25万人以上の会員がいて、小さなグループが一万以上あり、一週間に一度は、集会や祝会、また祈禱会や聖書研究会にあつまっている。クリスチャンの集りで史上最も大きかったのは、1980年の夏、ソウルで開かれたもので、225万から300万の人が4日間集まった。そして、200万の人が断続的に降りしきる雨のなかを徹夜の祈禱会に参加した。

1982年、ガテマラの宣教会は、ガテマラ市で宣教百年祭を

祝った。福音宣教師・ルイス・パラオは「集まって来た人は政府の集計で70万人を越えた」と発表している。

3. 誤った前提：リーダーシップの欠如

第三の誤った前提は、最も有能で霊的な指導者は、欧米から出て来ると言うものである。しかし、1980年に開かれた世界宣教のためのローザンヌ大会（COWE）では、主な代表者は第三世界の教会から来た人だった。この大会は欧米の資金と運営によって開かれたが、内容はインドのサムエル・カマレソン博士、韓国のビリー・キム博士、コスタ・リカのオーランド・コスタス博士、ウガンダのフェスト・キベンガー博士、そして、香港のジョナサン・チャオ博士などの報告や発表が主だった。タイのプログラム・ディレクターは、インドのサフィアー・アシアル博士だった。基本となるメッセージは、世界宣教のためのローザンヌ大会事務総長であるガーナのゴッドライト・オーセイメンサによって行われ、大会を通して、欧米の優位性はどこにも認められず、出席者は皆自分たちの見解や確信を表現できる機会を等しく持っていることを確認した。

12日間開かれたCOWE協議会では、いろいろな主題ごとに17の部会に分かれ、これらの部会でヒンズー教徒、イスラム教徒、中国人など世界のいろいろな人々に、どのようにして福音を宣べ伝えたら良いのか、お互いに学び合った。

参加者のおおよそ半分が、中国人への福音宣教のための部会に出席した。これらの部会のうちの11は、西欧人クリスチャンによって指導されたが、残りは全て台湾、マレーシア、フィリピンから来た中国人によって行われた。その部会の議長は、香港にある世界宣教（CCOWE）の中国連絡事務所の中心となって働いている、トーマス・ロング博士だった。

第4章 現地指導者への印象：真実か誤りか 59

ヒンズー教徒への福音宣教のための部会は、インドからの指導者によって導かれた。そして、部会の構成は現地の人々や文化、そして宣教するための最も良い方法を知っている、現地で働いている人々によってなされた。西欧の人にとって、大会に出席し最も大きな収穫となったその一つは、他の文化から来た人たちを尊敬し、耳を傾けなければならない、ということ学んだことだった。

これらの大会に、代表として出席するには、旅行のための資金や、情報を得るための費用が必要だ。しかしほとんどの場合、第三世界の指導者は彼らの生活に必要なものすら持っていないというのが現状である。

インドの教会の指導者の一人は、アメリカでの会議に、全ての費用を主催者持ちで招待されたにもかかわらず、国内から持ち出せたお金はたったの10ドルだった。彼はアメリカに着いたとき飛行場から電話をかけることすら出来ず、約束していたアメリカの他の都市をまわることも出来なかった。このような資金の欠乏は、困った時には何時でもクレジット・カードを使うことの出来る、金持ちの欧米人キリスト教指導者と混じって働くとき、違いが特に際立ってしまう。

まだ幼い、あるいは強力なリーダーシップが育っていないということで、第三世界の教会は小さく未熟であると仮定するのは間違いで、私たちはここにも欧米と同じ聖霊が働いていることを認識する必要がある。ちょうど私たちも、時に神様から信任されている資金を間違っ使ったり、運用したりすることがあるように発展途上国においても、教会や宣教師が間違いをする可能性はありうるのだ。

第三世界の指導者も、お金の価値は知っている。充分持ってい

いないが故に、私たち以上にその大切さを知っている、と言えるであろう。神様の子供として、私たちは彼らを、ちょうど私たちが自分の教会の指導者を信用しているように、信頼しなければならない。彼らもまた、神の御言葉に耳を傾け、正直な方法を採用し、そして与えられた物を賢く使うのである。しかし、だからといって援助の使い途について、私たちに説明をする必要はないと言っているわけではない。パウロですら、エルサレムの聖徒のために信任されたお金の使い途には、無神経ではいらなかった。ただ私たちは、その国の人たちが与えられたお金をどのように使うかは、自分たちで決めることが出来る、ということを受け入れなければならないのである。

宣教師は欧米人

第三世界には欧米以外の組織—ほとんどが自分の国の人たちによって設立され、運営されている—で働いている宣教師がおおよそ1万3千人いる。

この本でいう宣教師とは、自分の育った社会から離れ、少なくとも言葉、国籍、人種あるいは部族の異なる人々に福音を携えていくところの人を意味する。

この定義により、文化の垣根を越えて教会あるいは集会で奉仕する、数千人以上の現地の人の「宣教師」がいる。

例えば、シンガポールの中国人教会は、北部タイの中国人避難民だけでなく、その地域のまだ福音に接していないヤオ族にも大きな関心を持っている。彼らは中国人と、最近戸を開いたヤオ族の村々で宣教する中国人牧師と聖書の先生への援助を始めた。またごく最近、北部タイでリス族の村に教会を建てようとしている

中国人聖書翻訳者を助け始めた。

50万人のリス族のほとんどは中国に住んでいるが、1万2千人以上がタイにも移り住んでいて、この人たちにはまだ福音がほとんど伝えられていない。

他方、インドのカースト制度のなかで自分の所属していたバラモン階級の説教者が、低い階級のカーストのなかに入って奉仕をするとき、カルチャーの壁を越えて働いているといえ、「宣教師」といえる。

これらの宣教師は、欧米のクリスチャンであれば受けるであろう物質的な援助なしに、しばしば家族を離れ、神の召しだけを信じて働いている。

全ての良い考えは欧米から

宣教師は欧米人でなければならない、といったことだけでなく私たちは、欧米は少なくとも文化的にも、思想的にも「偉大な分水嶺」であって、全ては「ここから流れて行く」と信じている。

人種や文化的なプライドは、私たち欧米人以外の社会的、あるいは教会内での素晴らしい貢献を認めようとしないう、という偏狭な態度に結びつく。この高慢な精神は、それ自身を多くの巧妙な手段で覆い隠しているが、現代の宣教活動を見ると、実際に認めることが出来る。

中国における宣教の歴史が良い例である。真理を与えられた欧米からの献身した僕（しもべ）たちが「遅れた、未開の地、中国」に出航する。

出発にあたって、準備のため、文化の違いについて勉強したり訓練を受ける機会はなく、古い、そして高度に発展した中国の伝

統、すなわち芸術や発明、そして思想、哲学はいずれも不必要なもの、あるいは変えられなければならないもの、とみなされた。中国大によってなされた偉大な貢献や発明は、全て無視されるかあるいはそれがはたして中国人によるものであるかが疑われた。

宣教師は出発の時の荷造りにあたって、このように何度も言いきかされる。「『陶器』はていねいに扱ってくださいね。大切なお客さんをもてなすこれ以上のものを、中国では手にいれることは出来ないでしょうから」。ここには中国人が陶器を発明し、ヨーロッパではまだ人々が暗い森の中をうろついていたころ、中国の人たちがすでにそれを使って食事をしていた、ということは思いもよらない。

このような態度で宣教したため、中国ではキリスト教は生活に根をおろす宗教とはならなかった。事実、キリスト教は次第に西欧の恩にきせるような態度と、同意語になってしまった。その結果、このような欧米の尊大な態度から自由になろうとする強い意欲が中国の政治的指導者に植え付けられ、中国のため自分たちで答えを見出だそうとする熱意につながっていった。ロシア革命は彼らを刺激し、中国の奥地から一人の指導者、毛沢東が現れ、この毛沢東は1949年に共産党軍を勝利に導き「我々の国家はこれから決して再び外国の侮辱をうけることはない」ことを宣言したのだった。

第三世界の国々には、西欧が学ぶことの出来る豊かな文化的遺産を持った国が沢山あるだけでなく、発展途上国のキリスト教指導者は、しばしばこのように言っている。

「私たちに、自分たちの文化に最も適する方法で福音を宣教させてください。教会での礼拝のやり方、教会の管理、そして教会の音楽。こういったことを、私たちは自分たちで決めることが出

来るのです」

アフリカの人たちと働くなら、彼らが政治的にも経済的にも満足出来る状態とはかけ離れているにもかかわらず、人生の意味と幸せを見つけ出す彼らの能力に、きっと驚かされるであろう。

全ての部族には豊かな格言や言いつたえがあり、その知恵は家族から家族に引き継がれている。そしてそれらの真実は、しばしばクリスチアンの生き方に深くあてはまる。例えば、東アフリカの諺に「象が闘うとき、草は被害を受ける」というのがある。これは、より大きな戦いのなかでの無力感を説明している。あるいは「訪問者は二日の間はお客です。三日目には鎌がさし出されます」は、人々の社会的責任を教えている。このことは教会生活にもあてはまる。

韓国の教会は世界で最も急速に成長している。1990年までには、1万人の宣教師を海外に送ることを計画している。国内の働きでも、彼らはすでに指導者の強い核をつくりあげており欧米の教会も、韓国の教会から学ぶたくさんのあることがある。韓国の牧師リー・チャング・モン牧師の次のたとえ話は、教会内での協力の大切さを鋭くつき、私たちを考えさせる。

韓国のチア・リーという村に、一人の貧しい青年が住んでいました。彼は結婚することになりました。結婚式の前の日、伯父は新しい服を買うためのお金を贈りました。大喜びで彼は町のデパートに行き、服を買って来ました。その夜遅く、家に帰ってすぐに服を着てみると、なんとズボンが10センチも長いのです。結婚式は朝早く行われることになっていました。

この青年には、一緒に住んでいる優しいおばあさんがいました。おばあさんは結婚式の時、裾をまくったズボンをはかなければならぬ孫のことを考えて寝つかれませんでした。そこで起きだし、若者の部屋に行き、ズボンを10センチ裾上げしました。そして部屋に戻り安らかに眠りにつきました。

若者の母親も、息子がズボンをまくって皆の前に立っているのを考え、寝つくことが出来ずにいました。そこで彼女もまた真夜中、床から起き上がり、若者の部屋に行き、ズボンの裾を切ったのです。次の日の朝、太陽が昇るだいぶ前、彼の姉もまた起き上がり、彼の部屋に行くとズボンの裾を10センチ切りました。

結果はお分りだと思います。ここには、コミュニケーションが欠けています。三人の女の人には善意があり、自分の出来ることをしました。にもかかわらず結果は悲劇でした。

このたとえ話は、あんまり楽しいものではありません。芥子のきいた東洋のユーモアで、本来一つの体として機能しなければならない、私たちの欠陥をついています。私たちの体は、お互いの間の調和と協力が欠けると、病気や、障害、そして死にまで至るということを忘れてはなりません。（注6）

草の根レベルでの宣教活動だけでなく、第三世界の教会は、教会と宣教に関するよく実証され、示唆に富む沢山の本を出している。例えば、コスタリカのオーランド・コスタス著「教会とその宣教：第三世界からの疑問」あるいは、ザンビアのピアス・ワカタマ著「第三世界の教会の独立」などがある。

良い考えが全て西欧から出てきているわけではない。作家でも牧師でもある、ゴードン・マクドナルドは次のように言う。

私の個人的な見解によれば、最も素晴らしい説教は今日アフリカやアジア、そしてラテン・アメリカでなされています。神は現地の人の中から、ここにいるだれよりも、もっともっと素晴らしい器を用意されているのです。私たちはそのことを認めなければなりません。

私たちは彼らが伝道の原動力、知識、そういったものを西欧から得ていると思っていました。しかしそれは今では正しくありません。．．．西欧以外の国の方が、私たちにもっと与えるものを持っているのです。（注7）

そう、私たちは次のような間違った前提に、打ち勝たなければならない：

- ・私たちの援助は現地の人をスポイルする
- ・私たちは現地の自立した宣教を助けられない
- ・お金で「未熟」な教会を援助することは出来ない
- ・宣教師は欧米人でなければならない
- ・全ての良い考えは欧米から出てくる

もし私たちが、これらの間違った考えを正すならば、現地の人を助けることは正しいという事実を、容易に受け入れられるのではないかと思う。

第5章

現地の人を助けるのは理にかなう

さて、私たちは現地の人たちを援助することについての偏見を取り上げ、その間違いをはっきりさせた。次に、さらに進んで、彼らを援助するのが宣教におけるエネルギー危機を救う方法でもあることを、説明したいと思う。

1. 多くの発展途上国には、十分な教育を受けた献身的なクリスチャンがたくさんいる。

福音説教者の中で、アルゼンチンのルイス・パラオは、ビリー・グラハムと同じように良く知られている。彼のチームは中央アメリカ、南アメリカ、合衆国そしてヨーロッパと、だれの目にも明らかに成功したキャンペーンを繰り広げている。スコットランドでは20万以上の人が彼の集会に出席し、数千人がキリストを受け入れた。パラオは英語でも、また、彼の母国語スペイン語でも、同じように力強く福音を語り、聖書を解きあかし、人々に尊敬されている。彼はしばしば国際会議や協議会に説教者として招かれている。

しかし、パラオと同じ第三世界に住み、その国の指導者としてキリストに奉仕しようとする、賜物のある、献身したキリスト教指導者は沢山いる。

例えば、福音説教者・シオドラが、1978年にフィリピン宣教フェローシップ (PMF; Philippine Missionary Fellowship) の指導者になったとき、PMFのもとに40人の宣教師と35人の聖書学校の生徒が集まって来た。この人たちは、1ヶ月ほんの数ドルしか収入がないのを知っていたにもかかわらず、フィリピンの僻地で宣教師として奉仕することを望んでいた。3年後には、宣教師は95人、生徒は46人に増えた。

インドネシアで、クリス・マランテカ博士が開拓伝道を始めたとき、彼は教育を受けた経験のある開拓伝道者の必要性を痛感した。彼がそのことを表明した数ヵ月後、11人の助け手が彼のもとに集まって来た。皆、聖書教育を受けた人で、その内の数人は神学校の学位を持っていた。彼らはマランテカ博士と共に福音の証し人のいない、イスラム地域で教会を始める意志を持った人たちだった。

インドからは、クリスチャン・ナショナルズは毎年70以上の団体から、援助の依頼を受けている。教育を受けた人はいるが、お金がない。ドナルド・マックガバーンは、インドの1900万のクリスチャンの中に、宣教師の潜在的予備軍が大きな溜池のように、手付かずに残されているのを信じている。

必要な指導者が少ないという現実のなかにあって（例えば、アフリカでは教会の成長が早く、訓練を受けた指導者が追い付かない）、第三世界の多くの場所で、欧米人宣教師によって設立された教育プログラムが指導者養成に成果をあげている。

福音宣教関係教育機関世界名簿 (The World Directory of Mission-Related

Education Institutions)には、第三世界の全ての教育水準と教義を網羅する、600以上の神学校の名前がある。これらの多くは、入学にあたって小学校以上の学歴を求めず、1~2年の教育を提供する。宣教学者は、その程度の教育、訓練で、仕事の90%は充分こなせると推測する。村の生活は、それほど学問的でも、また混乱しているわけでもないで、福音説教者や牧師はその程度の知識があれば充分やっていけるのである。現地の学校に加えて、僻地神学教育(Theological Education by Extension)プログラムにより、数千人の指導者たちが教育を受けている。アジアだけでも80の神学校が、福音主義的なアジア神学協会(Asia Theological Association)に登録されている。

小さな町に神学校がいくつかあって、生徒獲得のために競争する、あるいは金持ちが自分の名誉のために神学校を建てる、といったような問題もあるが、一般的には、学校は発展途上国で質の良いクリスチャン指導者を輩出して来た。

ただ第三世界には、教授や学者あるいは著述家といった人を生み出すための、より高い水準の神学教育が極端に不足している。例えば、フランス語を話すアフリカ諸国にはたった一つの大学院課程の神学校があるだけ。新しく開設されたナイロビ福音神学校大学院(Nairobi Evangelical Graduate School of Theology)がアフリカ大陸唯一の、英語による大学院レベルの神学校となっている。

したがって、多くの学生が、欧米にある神学校やキリスト教大学院に入って来ることになり、その結果、残念な事が起る。アジ

ア神学協会（ATA）事務長、ボング・ビン・ロー博士は、過去20年の間に台湾を出て海外に行った学生のうち、クリスチャンであるないにかかわらず、90%は再び台湾に戻らなかった、と推測する。

教会は海外への「頭脳流失」によって、貴重な人的資源を失うばかりでなく、聖書学校卒業生のために十分な仕事を確保することが出来ず、一般企業にその人材を供給することになっている。

新しく生れた国では、これは特にアフリカの国に言えるが、教育を受け訓練を受けた指導者が絶対的に不足している、という事情もある。アフリカのある国では、アメリカでM. R. E.（キリスト教教育修士号）を取得して帰国した若者に、政府の役人がその国の副首相になるよう懇願した、という例があった。もう一人の青年は、アメリカで大学教育を終え帰国したところ、国の教育大臣として働いてもらえないか、という要請があった。この二人に関して言えば、社会的な地位といった誘惑にもかかわらず、自分たちの使命を忘れることなく、今日にいたるまで、クリスチャンの仕事に全ての時間を費やしていることを、神様に感謝しなければならない。

2. 第三世界の教会は、人々を宣教、教育、訓練するために十分な財源の基盤を持っていない。

多くの発展途上国の経済状態を理解出来た時、素質のあるこのようなクリスチャン指導者たちが支払った犠牲に対して、初めて感謝出来る。例えば、1980年におけるアメリカのGNPは9700ドルだったが、アフリカは530ドルにすぎなかった。しかも、多くの第三世界の国はインフレが激しく、ガーナの1983年における1日の労賃は、卵一ヶ分にしかすぎない。またアルゼンチンでは、1年で物価が400倍にもなった。

第5章 現地の人を助けるのは理にかなう 71

したがって、これらの地域に住むクリスチャンは、しばしば家族のために必要な最低の物すら、手に入れるのが難しくなっている。

海岸線にそった、平野に住んでいるケニアの宣教師は、水源から数マイルも離れている。雨季の間、屋根のトタンからの水をタンクにためればよいのだが、タンクは1つ100ドルもし、多くの人にとって高すぎて手が出ない。

ザイルの首都、キンシャサにある病院の牧師たちは、人々があまりにも貧しいのに泣かされている。ここでの習慣は、病院に入院する患者の身内が付き添い、身のまわりや食事の世話などをする。しかし、緊急患者の場合、だれも食事を作ってくれる人がいないことがある。このようなとき、牧師たちは助けたいと思うが、自分たちの貧しい収入ではどうすることも出来ない。

一人のフィリピン人宣教師は、村人の好意によって必要な家財道具などは揃ったが、自分の食事だけは自分で賄わなければならなかった。シオドラは、彼らは1日2回の「野生の芋」で、数週間耐えなければならないと言う。

都市にはもっとよい仕事があり、もっと良い賃金を得ることが出来る。しかし、伝統的に血縁者は収入の良い身内からの分け前を期待し、それをしないとケチだとみなされ、社会的にも相手にされなくなる。特にクリスチャンの場合、良い証し人とみなされない。都会の牧師の場合、5～6人の姪や甥、叔父や叔母、そのうえ田舎の従姉妹まで面倒みている、ということは良くある。この「面倒をみる」ことのなかに、子供の教育費を出すということも含まれる。

その国のクリスチャンの働き手自身の収入が少ないのに加えて

彼らを支えることの出来るクリスチャンの数が少ない、ということが言える。図-1は、世界の主な地域での、活動的な、生きたクリスチャンの人口に対する割り合いを示す。フランスでさえ、人口5200万人の中、福音活動をしているクリスチャンはたったの6万人、パーセントでいうと0.1にすぎない。このことはフランスでは、宣教のため十分な財源を確保し、教会をつくり、必要な宣教の訓練や教育を行うには、あまりにもクリスチャンの数が少なすぎると言える。しかしながら、ヨーロッパでは聖書学校を卒業し、全ての時間と労力を宣教のために用いたいと願っている若い人たちが、毎年増えて来ているのも事実である。

活動的クリスチャンの割合（全人口比 %）

西欧諸国	13.0
アフリカ	8.0
ラテン・アメリカ	6.0
共産国	1.1
アジア	1.1
太平洋諸国	17.0
カリブ海諸国	6.0
中東	0.2

P. J. ジョンストン著「オペレーション・ワールド」

図-1

それ故、経済的な見地からの必要だけでいっても、彼ら自身の教会を自ら援助出来るようになるまで、現地のクリスチャンを援

助するというのは、理にかなっている。

3. 現地のクリスチャンの働き手を援助することは理にかなっている。なぜなら言葉や文化、習慣が同じか近いので、現地の人々の生活に容易に溶けこむことが出来るからである。

情報伝達は、情報を伝達する人とされる人とが近い関係にあればあるほど容易になる。

外国人宣教師にとって、現地の言葉を理解出来るようになるには、少なくとも数年かかる。しかも、残念なことに、大抵の宣教師は現地人と心が通じる程度まで、現地の言葉を学ばないのである。

しかし、現地の人にとって、育った環境と教育によっては、いくつかの言葉をあやつれるということは、少しも珍しいことではない。例えば、ヨハネスバーグの郊外にあるアフリカ人の町、ソエトの若い人にとって、南アフリカの公用語である英語とアフリカーンズと共に、5つ6つのバンツ語を話せるということは、ちっとも珍しくない。これらの言語は、部族間の異なった言葉だが、語いと構文にいくつかの基本的な類似性があるので、彼らにとっては楽しみながら、必要に応じて他の部族の言葉をどんどん覚えてしまう。

外国人宣教師にとって、言葉を覚えるのに何年もかかるばかりでなく、言葉の裏や文化の「深い意味」、すなわちある特定の習慣や、伝統の意味、個人的な関係と社会的制度にまつわる特徴的な言いまわし、についてはどうても理解出来ないであろう。

宣教師は、現地の人を理解しているかと思っているかもしれないが、現地の人にはいかなない場合がほとんどである。不衛生にとまなう健康の問題や食事、社会習慣の違い、プライバシーの

欠如、暑さ、虫、医療施設や学校教育の遅れ、これらの全てが生活の一部となる。このことは農村部で特に言える。ある現地の指導者が言っているように、「欧米の宣教師でも熱心で献身的な人は、ちょうど我々の現地の宣教師と同じように、田舎で生活しようとする」。しかしほとんどは長続きしない。体をこわしてしまうからである。ごくわずかの宣教師とその家族しか、未開の人たちとの生活に入り込み、長期に渡って生活することは出来ない。

もちろん隣人どうしでありながら、相手のなかに入り込むことが出来ないといった「偏見」の垣根があることも認めなければならない。

しかし、一般的に言うならば、より近い生活環境から来た人の方が、容易に人々のなかに入り込めると言うことは出来る。

例えば、ジェイコブとロシー・デバサガン夫妻は、医者だった。インドでの教育を終え、より専門的な知識を学ぶため、アメリカにやって来た。妻は婦人科、夫は外科が専門で、二人でアメリカで医者として生活を続けることも出来たが、神は二人がインドに戻り、医療のない貧しい村で働くまで、心に平安を与えられなかった。

彼らは村人と共に生活する決心をし、水道も電話もない「裸電球」だけの土の家に住んだ。ロシーは言う。「私たちは村人の一人のようになりました。私たちは彼らを理解出来、彼らも私たちを受け入れました」

4年後、デバサガンはより大きな町に移り、そこで小さな病院を開いた。彼らはスクーターに乗り、村々をめぐる医療活動を始めた。

これはジェイコブとロシーがインド人だったから出来たのである。

彼らは自由に言葉をあやつり、村人の習慣やタブーを理解し、欧米人には困難な生活環境のなかにとけこんだ。

デバサガヤンは、現地人指導者が持っている基本的な利点の一つについて、このように言う。「現地人は、人々の言葉と文化をよく知っていて、皆の生活に容易に適応することが出来ます」

4. 現地の人を援助する事は理にかなっている。なぜなら、現地人は外国人宣教師の入国を認めなくなった自分の国に住み続け、教会をつくる事が出来るからである。

おおよそ40ヵ国が、外国人宣教師に対して扉を閉ざすか、入国に厳しい制限を加えている。したがって、それらの国にあって最も良く働くことの出来る、現地のクリスチャンを援助することは理にかなっていると言える。

例えば、バングラデシュでは、政治的な問題のため、単なる旅行者ですらある部族の住む地域には、立ち入ることが出来ない。しかしバングラデシュの国民であれば、そのような制約はない。バングラデシュ福音フェローシップ前総主事、サバス・サングマは、これらの地域に入った開拓伝道者や福音説教者のグループの責任者となっている。この大切な仕事で現地の人を助けるということは、単に理にかなっているということだけではなく、それ以外に道が無いのである。

ビルマもまた外国人宣教師の入国を認めない国の一つである。1966年に、国内の全ての宣教師は国外に追放された。残されたのは小さな教会と、いまだかつて福音に接したことの多い多くの地域だった。

ビルマの教会は急速に成長し、リバイバルを経験した。例えば13人の巡回宣教師チームが福音の届いていない村々を回り、短

期間に2000人に洗礼をさずけ、13の集会を組織した。シンガポールのクリスチャンたちは、自分たちが援助していたタイとビルマの国境のそばにある小さな聖書学校に、これらの回心した人たちがやって来たとき、この事実を知った。

これらの若い献身的な宣教師たちは、定期的な援助なしに数ヵ月旅行する。彼らは自分の村から始め、次の村に行くお金が出来るまで滞在する。人々の親切な捧げものに頼り、国中を歩く仏教の僧と同じやりかたである。

このチームは中国やラオスにまで行き、悪霊を追い出し、チームの一人によれば、「天地創造」このかたキリストの名前を聞いたことのない村人たちに、福音を宣べ伝え、彼らがキリストを自分たちの救い主として受け入れる、という奇跡の物語を持ち帰った。

しかし、彼らには一つの問題があった。それは、彼らの何人かは家族を家に残しており、これら家族の収入はほとんどないということだった。このような状況を知った、シンガポールの教会とクリスチャン・ナショナルズは、「ビルマの使徒行伝」に参加し彼らの重荷を分担する、という素晴らしい特権を得た。

このチームの働きは、宣教師に扉を閉ざした地域に、現地のクリスチャンたちだけが教会をつくる事が出来る、という事実を私たちに再確認させる。

5. 海外からの援助は、現地の宣教活動の効果を助けるだけでなく、国内からの援助を誘発する。

現地の援助を引き出すにふさわしい大きな教会、あるいは援助出来る教会が少ないといったことのため、このようなやり方は常に正しいとはいえないかも知れないが、現地からの援助を引き出す方法の一つに、海外からの援助に合わせて現地側にも援助させる

“matching grant” という方法がある。

あるヨーロッパの財団がこのやり方を採用し、現地で必要な資金の3分の1、ないしは4分の1援助する事とし、残りは現地の教会が調達するのである。

しかし、資金の約束をするだけで、現地の人々の「思考を刺激」し、その考えを大きく広げるに十分な場合がある。なぜなら現地の人々は今だかつて、自分たちの夢が実現したという経験がほとんどないからだ。計画をひかえめにたて、貧弱な建物とわずかの人数、あるいは訓練を受けたことのない人材で、いつも満足しなければならないのである。それが彼らの持っているもの全てであるからである。

プロジェクトのために必要な資金を援助する、という約束で、彼らの希望が現実的になり、計画自体を新しい角度から見る事が出来るようになる。

例えば、ナイジェリアの伝道師モーゼス・アリエは、都会での福音キャンペーンや大学での超教派福音宣教プログラムの指導のため、大きな教会の牧師をやめることにした。彼と妻は6人の子供をつれ、小さなトタンの家に移り、そこから「ゴスペル・ライト・ミニストリー」(Gospel Light Ministry) 宣教を始めた。

沢山の人が、このダイナミックなアフリカ人説教者の話を聞きに集まって来た。しかし、彼には印刷物、旅費、同労者の給料、大会の準備、そしてフォローアップなど必要な資金の欠乏にすぐに直面しなければならなかった。事務所や、スタッフの住む家、指導者を訓練する所も必要だった。

このような状況を知ることになったクリスチャン・ナショナルズは、彼らの本部とアリエの家族のために家をつくる費用を援助

することに同意した。

最初の援助が届くと、モーゼスはクリスチャン・ナショナルズにこのように書いた。「もはやお金を送って下さるにはおよびません。資材が入り、建物が建てられるのを見た人たちは、私たちに献金を始めました。その結果、私たちの手元に充分なお金が出来たのです。皆さんの援助は、このプロジェクトが実現する確信を私たちに与えてくれました」

多くの場合、プロジェクトのための「わずかな」お金が現地の人たちを刺激する「触媒」となり、現地の人たちの献金をうながし、その必要を満たす結果になる。

6. 現地の人を援助することは理にかなっている。なぜなら、現地の教会は、経験を積み、自分たちでプログラムを遂行出来るようになるまで、外国からの援助を必要とすることが多いからである。

第三世界の福音的教会は、地域的にも国際的にもその結びつきを強め、ますます影響力を持つようになって来ている。小さな集会は、指導者のためのセミナーや様々な訓練が必要だ。また教会の若い人には、インター・チャーチ・フェロースhipのような、より大きな組織に組み込まれることが必要である。教育施設は広範囲な支援なくして、その効果を発揮することは出来ない。教会は社会的な問題を把握し、不義に対しては声をあげ、教義的な腐敗に対しても、自分の立場を明確にしなければならない。

しかしその日暮らしの農家、あるいはわずかな現金収入しかない教会員では、教会のために出来ることは限られ、教会役員や教派のプログラムを援助する資金もビジョンも持ちようがない。事実、第三世界にあるほとんどの教会は、自分たちだけでは専業牧師を養いきれないのである。

第5章 現地の人を助けるのは理にかなう 79

以上で皆さんは、なぜこれらの教会が自分たちのことに精一杯で、教会の強化にとっても、信徒を増やすうえでも必要な、教派の指導者に余り貢献することが出来ないか、ということを理解することが出来たのではないかと思う。

この様な指導者が、牧師を養うことの出来る大きな現地の教会での比較的安定した地位を去った場合には、財政的な援助がなければ、指導者として苦境に立たされてしまう。彼らは現地宣教団体を代表するのであって、外国宣教団体の下部組織でもなければそれに対して責任を持たされてもいないのである。彼らは国内を旅行し、世界の他の地域の教会と接触する必要のある、十分に教育を受けた人たちである。しかし現実には、現地の教会が教派あるいは福音的フェロースhipのそのような指導者を助けるには、またそのような人たちに必要な教育の機会を与えるには、あまりにも資金が限られているのである。

ケニア福音フェロースhip (Evangelical Fellowship of Kenya) 総主事、アイザック・シンビリのような人を助けるのは理にかなっている。シンビリは天賦の才ある聖書の先生で、キリスト教教育者である。彼はアフリカ内陸宣教教会 (Africa Inland Mission) の教育部の重責を捨て、EFKを指導することを引き受けた。EFKの目的は、ケニアの教会のために必要な訓練と資料を提供することである。シンビリがEFKに加わったとき、持っていたのは1ヵ月分の給料とこれからの必要を祈るグループだけだった。

クリスチャン・ナショナルズの援助により、EFKは最初が一番大切な時期を教育に時間をかけることが出来、そしてその宣教をケニアの教会に広め、国内に援助の基盤を築いた。

EFKは、現地の教会の最高指導者を助けることがなぜ大切か

を示す良い例である。

7. 現地の指導者を助けることは理にかなっている。なぜなら彼らは、現地の人にとって身近なクリスチャン家族のモデルになり得るからである。

何年もの間、一組の欧米人宣教師夫妻が、アフリカの若い人たちのためのキャンプに力をそそいで来た。しばしば、アフリカの若者たちのために、貴重な学校の休みを料理や運転に費やし彼らに特別なキャンプの経験を与え、また、青年たちはこの夫婦の奉仕と献身を見て来た。

しかし、同じことを自分たちと同じ一組の若いアフリカ人夫婦がするようになったとき、人々に衝撃を与えた。ある女子修養会で、その若いアフリカの婦人が話をし、料理を教えたとき、キャンプに来ていた若い女の子たちは「ねエ、シイス・メイさんはご主人が家にいて、子供たちの世話をしているからこのように主に使えることが出来るのよ」とささやきあった。今までの伝統的なやり方と違っているので、それを見たクリスチャンの若い人に影響を与えたのである。ジュリーとメイの夫婦は、見習うべきクリスチャンの結婚と夫婦のあり方について、若者たちに一つの基準を与えた。

クリスチャンの家族は世界のどこでも、人の目にさらされている。そしてサタンはそれぞれの文化、しきたりで戦術を変えるのである。文化の「内」にいる人たちだけが、証し人として、神の恵みを完全に示すことが出来る。

例えば、ギリアマ族のなかで働くケニヤの宣教師、カバルクの家族は、本当の意味での彼らの仲間となるために、困難な試練を受けなければならなかった。

その試練とは、彼らの赤ちゃんが死んだことだった。男の子二

第5章 現地の人を助けるのは理にかなう 81

人の後、待ちに待った女の子だった。ケニアのギリアマ族の習慣で、出産を助けるのは年を取った産婆さんだった。そして、しばしばその助けはだけでは十分ではなかった。

しかし、驚いたことに、アンナ・カバルクは自分の子供の死を必要以上に嘆き悲しんだりしなかった。彼女はその年老いたお産婆さんに、何度も何度もお礼を言った。その彼女の態度の故に、村の婦人たちは、彼女への尊敬の気持ちを示すためぼろの汚いスカートの端を胸にまでたくしあげ、食べる物を持って来て、彼女の脇に座り、その悲しみを分かち合うようになった。

赤ちゃんは死んだ。しかし、その死によって村の人たちは宣教師とその妻に心を開いた。この村に住むためにケニアの高地からやって来たこのカンバ族夫婦は、今や彼らの一員となった。

村のはずれに土と草の家を作り、水をくむため川まで2マイルを歩き、四年の間、彼らは村人と同じ生活をした。村は「サウリ・モウラ」、つまり、近くに水が無かったので「悲しみの場所」と名づけられていた。

昔からの村の神々はその力を失った。老人たちは「見てごらんなさい、祭壇すらなくなってしまった」と笑う。ケニアから来た宣教師ジョナとアンナが伝えた新しい神が、ゆっくりと、また用心深く受け入れられていった。ギリアマ族は何百年にわたって変わるのに抵抗して来たが、今や人々は耳を傾け始めたのである。そして沢山の人が、ジョナが自分の家のそばに建てた小さな土の教会に集まって来るようになった。人々はこのように言う。「見てごらんなさい。アンナの神はもう一人の健康で強い子を授けて下ださった。多分この神が、私たちも助けて下ださるでしょう」

アンナとジョナ・カバルクはいつの日か、神様が祈りに答えて下ださり、ギリアマの人々が完全に自分自身を神様に委ねるよう

になるときが来ると信じている。そして、その日が来るまで、人々を愛し、教え、皆の良い手本となっていることであろう。

カバルク夫妻は村人と同じ生活をすることによって、村人と同じ試練に会い、キリストを証した。

8. 現地の宣教師を助けることは、宣教におけるエネルギー危機の緩和、すなわち費用の節約となり、お金を有効に使うことが出来るようになる。

ある人にとっては、これは方便というか、まやかしのように聞こえるかもしれない。しかし、クリスチャンの働き手の給料を決めるために通常用いられる方法を知っているならば、皆さんの理解に役立つかもしれない。

牧師は自分が牧会している人たちの平均的な生活水準で、生活すべきである。欧米の多くの教会では、牧師の給与は教区の人たちの平均給与で決まる。自分の牧会している人々の生活水準より高いと、皆の妬みや恨みをかうようになり、また、人々の必要や問題に関わり合うことが出来なくなってしまう。牧師は、貧しい人の問題に敏感でなければならないし、偽善でなく、人々に仕えることが出来なければならない。

他方、牧師を支えている人たちは牧師を尊敬し、「労働はその報酬にふさわしいものである」という聖書の教えに従うべきである。

欧米の牧師が経験し、どのように対応してよいか困難を覚えるものの一つに、自分たちの生活や給与水準が、現地の人よりもずっと高いということである。現地の人と話していて、このことが緊張や妬みや憤りの原因になっているのに気付くのに、そんなに時間がかからないであろう。

現地人宣教師も、物質的な欲望や生活の安定に対する強い希望

第5章 現地の人を助けるのは理にかなう 83

から、完全に解き放されているとはかぎらない。したがって、容易に同じような罠に落ちてしまうことはありうることだ。

現地の指導者の給与を決める場合、通常それは現実的に決められ、家族を養い、自分の仕事をするのに必要な経費、その地域の人がどれくらい収入があるのかなどを考慮し、適正な金額が計算される。

次の表は、1983年における開発途上国の宣教地別平均給与である。

<u>国</u>	<u>仕事</u>	<u>月平均支給額</u>
アルゼンチン	都市の伝道者	1050ドル
バングラデシュ	田舎の教会の牧師	55～110ドル
インド	田舎の訓練を受けた看護婦	80ドル
インド	田舎の伝道者	35～85ドル
インドネシア	田舎の牧師	80～150ドル
ケニヤ	都市の労働者	600～1200ドル
韓国	開拓伝道者	120～300ドル
シンガポール	牧師	800～1200ドル
南アフリカ	都市の労働者	600～1000ドル

これは、欧米宣教師とその家族に必要な月平均給与額が、2500～3000ドルであることを考えると、その差がいかに大きいか分かると思う。また、これらの働き手は、休暇で本国に帰る費用を必要とせず、医療保険、子供の教育費など諸々の経費もほんのわずかですむ、といったことを考慮に入れる必要がある。

一方、多くの第三世界の国々では生活費が急速に上がって来ており、これらの低い給与水準はもはや期待出来なくなって来てい

る。しかし、教会の収入が増えれば、その分教会で負担出来る金額も多くなるはずである。

そう。現地の宣教師を助けることは、宣教のエネルギー危機を緩和する上で理にかなった方法である。ただし、この様なことが出来るのは、今世紀の於ける偉大な宣教計画に注がれた欧米宣教の献身と、自己犠牲があったからこそ可能なのである。しかし、この運動の本当の効果は、中国でそうであったように、迫害や戦争の故にその国の教会が自力で立たなければならなくなったときに、その本当の価値が発揮されるのである。

現地の教会を助けるということは、ただ援助だけすればよいといった問題ではない。教会でも、その計画にたずさわっている人でも、援助にともなう危険性には十分注意しなければならない。また、援助にともなう失望も経験するであろう。現地への資金が競合する目的のために使われる、といったことも避けなければならない。こういったことには、いろいろな情報と経験が必要で、だれでもが出来るといったことではない。次の章ではこういった問題を取り上げたいと思う。

第6章

問題を直視する

干渉的にならず、若い教会を助けることは可能である。私たちは、人材、知恵、歴史といったもの以上に、彼らに返さなければならない借りがある。．．．それは、神様が私たちを豊かに祝福して下さっているので、他の教会のためにしなければならない私たちの義務、あるいは責任である。はっきりしないかも知れない。が、意識するしないにかかわらず、私たちのなかに、自分の子に対する父親のような、上から見おろす気持ちが彼らに対してある。いったいどうしたら、このような気持ちを持たずに、若い教会を助けることが出来るのであろうか。同時に、どのようにしたら、受ける側が必要以上に恩義を感じたり自由を束縛されたり、依頼心を起こしたりせずすむのであろうか。また、どのようにしたら私たちの援助が、彼らが犠牲を払う、あるいは責任をとるという気持ちを抑える事なく、受け入れられるのであろうか。(注1)

問題を直視してみよう。困難と挫折を伴わないで、現地の人を援助することは出来ない。そしてこの点に注意を払わないかぎり

私たちはすぐ落胆し、幻滅してしまうであろう。現地のクリスチャン指導者は、私たちより、超自然的でも人間性に欠けるわけでもない。

例えば、ある人は大きな外国の教派の長だった。彼の持ち前の指導力と影響力は、彼を組織のトップにした。しかし、教会は、彼の責任に見合うに必要な旅費やいろいろな経費を負担することが出来なかった。その結果、彼の教派の役員は、欧米宣教団体の助けを求めた。この資金援助はしばらく続いたが、まもなくこの資金が彼個人に使われていたことが分った。現地の人たちよりずっと立派な家に、そして、自分名義の車や家族のビジネスに、この援助が使われていたのである。

このようなことは起こりうることである。また、誤解を引き起こしたり、現地の人に現実的でない期待をかける、といった問題もしばしば起こる。このような可能性のある問題について、あらかじめ知っておくことは、問題を起こさないために必要であり、彼らがどういった人であるかを認める助けとなる。

選択の手順の間違い

後の章で、どのようにして現地のプロジェクトを選ぶか、については議論したいと思う。しかし、このことが大切な問題の一つであることには注意する必要がある。

世界はますます小さくなっている。そして今日、多くのクリスチャンが、会議や短期の宣教活動、あるいは単なる「クリスチャン旅行者」として海外の宣教の現場を訪問する。

にもかかわらず、これらの短期旅行者は表面的な印象と状況の理解だけで、現地のプロジェクトやニーズを持ち帰って来て、自

分たちの教会、あるいは教会員に資金的な参加を求めたりする。時に彼らは、手持ちの500ドルを援助してしまい、本国に戻ってから、残りの5千ドルをどのように捻出するかに、頭をかかえる。

アメリカの教会の牧師が、海外旅行に行く機会はますます増えて来ている。そして、これらの多くの牧師は、現地の宣教についての専門的知識や現地援助の落とし穴についての予備知識なしに出かけて行くのである。

ある牧師は、通訳として奉仕してくれた人に非常な感銘を受けた。そして「あなたの宣教活動に、引き続き心を留めます」と約束した。その牧師は、後日、そのような日常的に使われる激励の言葉が、援助の約束として受け止められているのを知って、心を痛める結果になった。

もう一人の牧師は、現地の宣教現場を訪問し、その宣教活動に参加し、リーダーを自分の教会の宣教委員会に招待することを約束してしまった。この招待には旅費と共に、これからも現地の宣教に参加するという経済的な義務も含まれていた。ところが彼の教会の宣教委員会では、この宣教は教会が望んでいるようなプロジェクトではないと判断し、そのことを表明した。

一方、沢山の現地の指導者たちの卵が、欧米に勉強にやって来る。彼らは欧米の教会でいろいろな人に会う。そのなかには、彼らの将来の希望に影響を与えることの出来る人たちもいる。こういった機会に恵まれることにより、しらずしらずに、自分自身の個人的な計画、野心の実現を求める結果となることがある。そして、自分の国の教会とそこの指導者たちとの間に溝をつくり、信頼関係を失わせてしまうことになる。時々、宣教の経験のない欧米人クリスチャンは、税の控除を受けられるといった便宜も考慮

に入れ、留学生に自分たちの組織の「役員」となることを求め、彼らに「自分たちの教会」の宣教に参加するように申し出たりする。

このことは現地の教会の力を弱めるばかりでなく、現地の組織の方針の変更を余儀なくさせることにもなりかねない。また、このようなかたちでの援助は、結果的にこれらの留学生を、自分たちの目的のために働かせるようにしてしまう。

金銭による支配

非常に注意深くつくられたガイドラインに従う事なくして、「お金を払うものが曲を注文出来る」という諺が事実となってしまうのである。お金は、説得力と影響力の具体的な形ともいえる。そして、資金はなんらかの方法で「中和」されないかぎり、受け取る側は資金がこれからも入ってくるように、出す側の期待に合わせるようになる。そしてこのことは、独立と本当の意味での成長を妨げる結果となる。

もし変えることが財源を失う恐れにつながるのであれば、教会の礼拝形式、指導者の役割、交わり、教義的な立場などを援助する側のやり方に合せようとするのは、いともやさしいことなのである。

どのようにして、この心理的圧力をなくすかは、欧米の援助団体にとって大きな問題である。そして、特に現地の宣教、文化を理解していない場合は、特に、非常に大きな現実的な問題となるであろう。

文化の違いは期待の違いを生む

欧米の教会や団体が現地の教会を助けるとき、通常、次のようなことを求める。

- ・定期的な報告
- ・監査を受けた経理報告と指定寄附金の厳正な処理
- ・目的と目標
- ・組織の構成およびその責務
- ・秘密を持たないこと

デニス・クラークは、教会の宣教委員会で、役員が自分たちのお金が現地教会に渡り、使われることについて、このような議論がされているであろう、と次のようなシナリオにまとめている。

テーブルの端から大きな声が響いた。

「皆さん、お金についてはどうしますか。私たちのお金ですよ。にもかかわらず現地の人たちは、そのお金を自由に使おうとしている」

ボブ・ジョンソンが机をたたいた。

「我々のお金だって。一体どこからそのお金は来たんだ？」

「もちろん教会ですよ。我々の支持者一人一人が『我々の宣教』に捧げてくれたのです」

デビッド・ヒルが間に入った。

「我々にですって。神様に捧げたのではないのですか。皆さん、この問題を整理してみましよう。お金が神様に捧げられたとき、そのお金はもうだれのものでもありません。なぜ、私たちはアジアの人たちを、私たちの一員のように信頼出来ないのでしょうか。これではまるで私たちはクリスチャンではなく、ビジネスマンと同じです」（注2）

ビジネスと同じ期待。それが、欧米における宣教のやり方である。そして、それを第三世界の宣教にも期待する。もし彼らがそうしていない場合に、お互いの間に誤解が起こるのである。

例えば、アメリカの献金者たちは、自分たちが援助している人たちからの定期的な報告を期待する。これは当然のことだ。しかし、一度でも現地を訪れ、現地の人々が働いている環境を知ったなら、なぜ、報告がこないかが分る。交通機関は値段が高いばかりでなく不定期で、しかも場所によっては存在しない。福音説教者シオドラが、PMFの宣教師たちを助け、励まし、彼らの仕事の状況を見るために訪れるには、数日間ボートやバスに乗らなければならない。そして最後の数時間は、自分の足で山を登る。

ポール・チャンがタイ北部の難民キャンプを訪れる時も、飛行機とほこりっぽい道をトラックに乗り、山の頂にある村まで危険な道を歩かなければならない。

現地からの報告書は、中国語、テレグ語、タガログ語などで書かれている。したがって、欧米の支援者に送る前に英語に直さなければならない。

郵便物はしばしば不定期であるばかりか、郵便というシステムが存在しないことがある。ある国では、僻地からの手紙は届くのには数ヶ月かかったり、届かなかったりする。

報告書が届くのに時間がかかったり届かなかったりするだけでなく、欧米的な報告や表現は、ほとんどの第三世界の社会で、一般的ではない。あるアジアの国では、その国の文化的な特徴として、自らを低くし、ひかえめな実績を報告するするのが良いとされている。中国人は相手の「顔をつぶさない」ことを心掛ける。その結果、否定的な面を表に出そうとしない傾向がある。アフリ

第6章 問題を直視する 91

力のある部族では、本当の事を言って相手を傷つけるより「相手にとって都合の良いことだけを選んで話す」のが親切で尊敬されるべきこと、と信じている。韓国では、あんまり具体的なことを聞くのは失礼だとされている。

欧米の宣教師にとって、こういうやり方は人を欺くことではなく、文化の違いであるということを理解するのに時間がかかる。こういった国に一度も住んだことのない欧米人が、第三世界の宣教師からの報告書をもらっても、それを正しく理解出来るかは疑問と言える。

定期的な報告書ですら問題があるならば、会計報告についてはなおさら、私たちの期待どうりにはいかない。

中央アフリカで、広範囲な宣教活動を行っている一人のアフリカ人の働き手が、このような不満を言っている。

「宣教師たちは、アフリカ人に対して何も報告しないのに、なぜ、私たちは使ったお金について、報告しなければならないのでしょうか」

「贈り物をした人に、それがどのように使われたかの報告を義務づける、というのは、私たちにとってなじみのないことです」と、彼は続ける。

多くの国では、お金がどのような形で入ったにせよ、一旦お金をもてば、持っていない身内の必要に対して、断るということは非常に難しいこととなっている。南部バプテスト教会の宣教師、ジョン・カーペンターは、テキサス出身の年取った黒人宣教師、マザー・ジョージとリベリアで奉仕するように命じられた。しかし、彼女はアフリカでの奉仕を50年やって初めて、彼女に助けを求めてやって来た人を、他の人に行くように言って断ることが出来たのである。カーペンターは、マザー・ジョージが「善意の

人」ではあったが、「人々が彼女を利用しているということに気が付かなかった．．．私は彼女に予算を示し、使えるお金の額をはっきりさせた。その結果、彼女はやっと黒字でまかなえるようになった。そうすることにより、彼女は自分の立場を守るようになったからだ」（注3）

アメリカ育ちで、南部の奴隷の娘であった彼女ですら、訪ねて来る「身内」の人たちの必要を見て、ただで帰すことは出来なかった（私だったらそんなことはしない、と言いきれるでしょうか）。ハロルド・フーラーは、お金と所有物を社会全体のものである、とするこのような見方について、次のように書く。

産業の発達していない社会では、お金や所有物は皆の共有物と見なします。生産された物は個人にではなく、その社会に属します。したがって、必要に応じて皆で分かち合うことになります。このような原始共産的な社会に育った人が、お金は厳格に個人の責任とする社会で仕事につくならば、いろいろな問題を起こします。彼は、お金が急に必要になったとき、金庫にあるお金を後で戻せばよい、と一時的に「借り」ます。しかしこの楽観的な考えは、「横領」という犯罪になるか、少なくとも皆の信用を失うことになってしまいます。（注4）

第三世界の指導者自身、このような考えは改めなければならないことは良く知っている。そして事実、急速に改められている。しかし、第三世界における教会の会計係が、その出し入れを適正に記録するようになるには訓練が大いに必要と言える。またそうなったとしても、欧米の会計士にとっては、現地の人やり方ある程度は受け入れていかなければならない面が残るであろう。

ゴードン・マクドナルドは、責任についての私たちの期待を、このように説明する。

「責任ということを何時も考えるのは、アメリカ人の習慣で、この責任は、私たちの社会を動かす偉大な管理技術であり、また私たちの期待に答える論理的な根拠でもあるのです」

しかし、彼は、海外の教会を援助するとき、私たちアメリカ人の立てた優先順位や興味にそって、その援助が使われるということに期待してはならない、と続ける。(注5)

欧米人は何かをするとき、時間中心に考える。したがって、海外の宣教を評価するために質問書を送るとき、次のような内容になるのが一般的だ。

- ・何時間、宣教のために時間を使っていますか
- ・平均的な一日の行動を書いて下さい（あるいは「あなたは一日をどのように使っていますか」）

目的と目標をたてるのは、宣教の効果と成果を知る最も良い方法である。したがって、現地の人には、はっきりと設定した期間における短期、長期の目標、あるいは到達点が求められる。

人類学者は、欧米の文化が時間中心であるのに対して、第三世界の文化は出来事中心である、と言う。第三世界の人にとって時間どおりに会議が始まることや、終わることはそれほど大切ではない。人々が問題を解決するまで、あるいは疲れ果てるまで十分な力を注ぐことの方が大切なのである。このような文化にいる人々にとっては、通常興味があるのは今であり、ここにいるということで、過去にではない。

出来事を身近な関心としてしていると、個人的な関係やその発展が重要なことになる。人間関係が、仕事を成し遂げるということよりもっと大切となる。そのような人たちにとって、仲間と何か一

緒にすることということ自体に意味があり、ある目的を達成すること、二の次である。最近は欧米にも、このような考え方が紹介されてきている。

宣教師たちは、教会で鐘を鳴らすことによって時間を教え、また時間に遅れる人たちを注意したりして来た。また、前もって計画を立てるということをしない人たちが、一ヶ月分のお金を数日で使って、残りの日を無一文で途方にくれることのないように、頭を痛めて来た。

宣教師は現地の教会の指導者が、古い友達が訪ねて来たということだけで、教会の会議に欠席してしまうのを理解出来ない。一方、現地のクリスチャンは、宣教師が時間が無いということだけで大切な礼拝の終わりを速め、時間内に終わらせたり、あるいは約束を守るために訪問の時間を短くする、ということを不思議に思うのである。

これらの違いは文化の違いに起因するものである。今日では、アフリカの人々は会合の時間を決める時、冗談にこのように付け加えることがある。

「皆さん、アフリカ時間ではありませんよ」

このように第三世界への圧力が西欧社会から加わり、時間の概念とか目的中心の考えは、改善されたとは言えないかも知れないが、少しずつ彼らの生活の中に入り込んで来ている。

にもかかわらず、これらの違いを認めることは大切だ。というのは、定期報告や会計報告、組織構成、目的、目標といったことだけで現地の宣教を判断しようとする、これら援助する側の人たちの期待に、現地の人たちが答えていない、と宣教の効果を誤解する結果になるからである。

問題が起こるのは

注意深く、援助の対象を選んだにもかかわらず、また援助団体と現地宣教団体との間に合意があるにもかかわらず、問題が起こることがある。デビッド・エングストロムは、次のように書いている。

「慈善は、しばしば善よりも害をもたらします。なぜなら援助される側が拘束され、依頼心を持つようになりやすいからです。．．．その結果、怠惰と無責任な態度が生まれます。また、与えたり施したりすることは、そうする人自身の尊厳と威厳をも失わせる結果となりやすいのです。多分、それが多くの外国人にとって、アメリカ人を好きになれない理由の一つとなっているのでしょう。」（注6）

現地の指導者もまた、こういった危険を知っている。あるインドの働き手は、彼の住んでいる地域が洪水にみまわれたとき、その救済運動に参加した。しかし、その後彼はこのようなプログラムに二度と加わらない決心をした。彼は「難民の生活」があまりにも容易に人々の心を蝕んでしまう、ということに気がついたからである。

教育学者、テッド・ワードはこのように言う。

援助と発展は、その論理において根本的に矛盾します。援助活動は基本的に発展を阻害します。救援活動は将来のより大き

な発展の可能性を阻害します。援助はそれなくして人々を生きられなくしてしまう可能性があるという意味において、一種の麻薬中毒と言えます。（注7）

難民が援助をあてにして、生きようになってしまうように、私たちの援助も、依頼心と事なかれ主義が入り込むのを許すなら教会と宣教から切り離せなくなり、乳離れさせることが出来なくなってしまう。ある教会では、25年前、欧米からの援助で始まったことを良く覚えていて、牧師やプログラムへの援助を、いまだに期待している。

その上、ある現地の人たちは、多くの欧米のクリスチャン指導者と同じように、自分中心の考えを持っていて、地位とか学歴にこだわり、まわりの人たちの生活水準とかけ離れた、「物質的な生活」を求めている。

多くの現地の指導者は、欧米の宣教師たちに比べ、ずうっと容易に、自分たちの文化に入っていくことが出来る。例えば、米国で学位を取得したインドネシア人カップルが、自分の故郷に本の山と一緒に戻って来た。彼らはアメリカにいたとき使っていた物や、贅沢品は持ち帰らなかった。そのため、容易に元の生活に戻ることが出来た。

お金を使ってしまって初めて気が付くことの一つは、そのビジョンや夢が、現地の人々の能力を越えたものであった、ということである。欧米人は具体性のある現実的なプロジェクトに興味を覚える。欧米の大学院や神学校で学んだ現地の指導者は、欧米の教会のやり方やプログラムを自分の国にあてはめ、自分たちの国の現状を引き上げる為のお金のかかる近道を考える。

しかし、欧米のプロジェクトが現地であまくいくとはかぎらな

い。そのプロジェクトに必要な道具や、計画や、資金を欧米から持って来たとしてもだ。持ち込んだ道具や機械は、暑さや湿度ですぐに使えなくなるかも知れない。教育や訓練を受けた人は少なく、変化を好まない保守的な人たちは多く、意思の疎通さえうまくいかなくなってしまう。．．．そして、現実初めて気付くのである。夢はあっけなく萎むのである。そうなると苦楽を分かち合うべき他の指導者を、不正直、馬鹿な奴と、公然と非難することになりかねない。私たちは、一見頼もしく、援助するに値すると思われるその「夢見る人」が、彼の国の教会を改革する、神の新しい働きのための器かどうかは、すぐには分らないのである。

彼ら自身に間違いをさせる

現地の指導者を助けるとき直面する、よく起りがちな問題について述べてきた。しかし、こういった問題でがっかりさせられるよりむしろ、私たちはキリストの言葉を思い起こさなければならない。

「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」（ヨハネ 8：7）

クリスチャンの組織であっても、完全なものはない。失敗のない指導者はいない。完全なプログラムもない。

私たちも沢山の間違いを犯す。それ故、私たちは現地の教会が同じことをするのを許さなければならない。私たちが自分の教会でするように、彼らもまた、神の前に立ち、告白し、泣き、神の慈悲と哀れみを請うのである。そして神の恵みを讃美するのである。

私たちは現地の教会が、自分の文化と経験をもとに、自分自身

で判断することを認めなければならない。私たちは、現地の教会が自分たちで学び、確信した教義を尊重しなければならない。これは妥協するということではなく、聖霊に信頼することによって、現地の教会もまた聖霊に導びかれていることを信じることなのである。

ジョージ・ピーターズは、インドの良く知られた牧師バクト・シンとの対話で、この問題を次のように表現している。

私たちはインド人のための伝道と、その主題についての話合いで、彼にこのようにたずねました。

「インドで説教するとき、あなたは何を強調しますか。神の愛でしょうか」

「いいえ、そうではありません。インド人の心は愛という言葉をきわめて官能的にとらえるので、もしあなたが愛について話すなら、彼らはセックス・ライノについて、考えてしまいます。ですから、あんまり神の愛については語らないほうが良いでしょう」

「それでは、神の怒りと、神の裁きについてはどうでしょう」

「いいえ、これも私の主題ではありません。このことはあまりにも聞き慣れてしまっているのです。とにかく全ての神は怒っているのです。彼らにとっては、怒っている神がもう一人増えたとしても、なんの変わりもないのです」

「それでは一体、何を話すのでしょうか。キリストとその十字架でしょうか」

「いいえ、彼らはキリストは助けなくして死んだ、かわいそうな殉教者として考えることでしょう」

「それではあなたのメッセージは何なのでしょうか。永遠の命ですか」

「そうではありません、もしあなたが永遠の命について話すならば、インド人は輪廻（りんね）を考えます。ですから永遠の命を強調してはいけません」

「あなたのメッセージは何なのですか」

「罪の許しと心の平和と安らぎです。このことを語るとき、人々は耳を傾けてくれます。これが私のメッセージです。人々はそれをどのようにして手に入れたらよいのかをたずねます。彼らが耳を傾けはじめてやっと、人々を自分たちの必要を満たして下ださる唯一のお方、救い主のところに導いて来ることが出来るのです」

これが、私たちのメッセージによって何を伝えるかのあらましなのです。福音に耳を傾けてくれる人を勝ち取るためです。
(注8)

ピーターズ博士は、このようなやり方だけに頼るならば、私たちの宣教は偏ってしまう危険性があることは認める。が、インドという文化圏に住む人々の心を開くための有効な方法である、と言う。現地の指導者は、欧米の同労者からの非難を受けることなしに、自分たちの文化にあったやり方で、聖書の真理を人々に示すことの出来る自由を持つべきである。

欧米の支援者が、現地の宣教を助けるにあたって、自分たちだけが真理を正しく知っているとし、現地の人たちが知ったとする真理については、自分たちの同意を得なければならないと考えているのであれば、それは大きな問題である。

もしそうであるなら、私たちは独善的になってしまい、真理か

100

らは程遠い。そして、これこそ私たちが避けようとしていることである。本当の協力とは、お互いが話し合い、助け合って築くものだ。そして、これが宣教のため協力し合う、私たちの良い関係を築く試金石となるのである。

第7章

どのように援助するか

医師、ジェブソンは、物事を革新する人、人を動かす人、その時代の前を歩む人だった。宣教の表舞台から遠く離れた、ワシントン州シアトルに住み、物静かに話すこの脊椎指圧治療師のことを知っている人は、あまりいないかも知れない。しかしN. A. ジェブソンは遠くを見ることの出来る人で、宣教に新しい時代が来るのを予知出来る、神様からの賜物を与えられた人だった。

ラルフ・ウインターが書いているように、1940年代の始めは、「信じられないような宣教発展の25年」のための道が準備され、米国でのキリスト教宣教のための基礎が築かれた時代だった。戦後の宣教ブームのための準備のように、文字通り数ダースの新しい宣教団体が出現し、米国の多くのビジネスマンは神のための有用な働き手として用いられた。

ギデオンやクリスチャン・ビジネスマン委員会（CBMC； Christian Business Men's Committee）が創立されたのもこのころである。ジェブソンはCBMCの5人の創立者の一人でもあった。セオドール・エングストロム軍曹、若い説教者ビリー・グラハム、トレイ・ジョンソン、そして「青年をキリストへ」運動を促進している蝶ネ

クタイと赤い靴下の多くの若者たち、こういったすでにきたりつつある教会発展のための「働き手」が、まさに活動に入るところだった。

ジェブソンは、シアトルに立ち寄ったクリスチャンの働き手のため、部屋を用意し（彼はこの部屋を「預言者の部屋」とよんでいた）、訪れた人にいつも自分の家を解放していた。ジェブソンの家はこれらのクリスチャン指導者のために用いられた。彼は彼らの宣教のために祈り、その草の根運動の働きに参加した。しかし、彼の心の奥底には別の波—それはまだその時代には早すぎる考えであったが、しだいに世界宣教の新しい推進力になっていく—がうねっていた。

世界的視野を、ジェブソンは持っていた。そして神の家族の一員として、海を越えた現地の教会の建設を助けることに、情熱を感じていた。彼は自分の家で疲れをいやす宣教師の話聞きながら、これからの宣教のあり方についての質問をした。

彼は4億の人口を持つ中国に特別の重荷を感じた。中国で義和団の乱が起こった年に生れた彼は、中国での宣教師の殉死と西欧の「悪魔」への憎しみの物語を聞きながら成長した。そして違う言葉と文化の中での宣教の難しさと、現地の人ですらも耐えられないような苛酷な環境のなかで、勇敢に、そして献身的にはたらく宣教師の話聞きながら、彼は中国の教会の将来は「現地人宣教者」にかかっている、宣教は外国人宣教師だけでは決して完成されないことを確信するようになっていった。

しかし、どのようにして現地の宣教者たちを助けることが出来るのか。中国でそのような働きに導く、中国人クリスチャンを、どのようにして見つけることが出来るのか。彼と話した全ての人、彼を失望させた。「私たちの宣教師が現地の宣教者を資金的

に援助することは望ましい、と判断しないかぎり、海を越えたこちら側から援助してはならない」と彼らは口を揃え、現地の教会の自立の必要を強調すると共に、ジェプソンの考えが時代遅れであることを率直に告げた。「現地の教会は自分の足で立たなければならぬ」がそのスローガンであった。資金をただ与え、彼らをスポイルしてはならなかった。

しかし、ジェプソンにはこのような宣教の指導者の態度には、何かが欠けているように思えてならなかった。それは、全ての肢体は聖霊の力と賜物を平等に受けているという「体の平等」の概念であった。彼は、神がそうされるならば、現地の人たちを通して神の教会を直接建てられるに違いない、と確信した。そして、もしそのために経済的な支えが必要であれば、彼らはそれを何らかの方法で受けるに違いないと。

そのようなとき、彼に「現地牧師の会」の指導者からの接触があった。この会は、米国からつかわされている宣教師たちを通して直接現地の牧師に資金を援助していた。しかし、ジェプソンはそのような方法でもやはり満足出来なかった。というのは、そのような直接の資金の管理では、現地の教会の独立性を妨げてしまうのではないかと憂慮したからだった。彼は良い考えが与えられるよう引き続き祈った。

中国へのCIM宣教師であったダンカン・マクロバートは、1943年、日本軍の侵略により退避し、戦争で荒果てた中国大陸への関心と祈りを集めるため、アメリカに来ていた。撤退する中国軍に混じって脱出した彼の驚くべき体験談は、アメリカの聴衆を大いに魅惑した。

幸運な事に、ダンカン・マクロバートはシアトル地域にも立ち寄った。そしてジェプソンの友人であるケパス・ラムキストは、

彼の話聴き、ジェブソンにこのように勧めた。

「この人に一度会ってみてはどうですか。君が探している答を持っているかもしれません。彼は助けが必要な中国人宣教師を知っているに違いありません。彼は君と同じような考えを持っています」

ジェブソンは興味を持ち、数人のビジネスマンと一緒にダンカン・マクロバートを自分の家に招待した。戦争による流血と荒廃の話聞きながら、ジェブソンの心は、キリストのいないその広大な土地に住む民の希望の無さに、再び痛みを覚えた。何かをなさなければならないことを強く感じて、マクロバートにこのようにたずねた。「しかし、中国のための答は何なのでしょう。どのようにして人々を獲得することが出来るのでしょうか。戦争が終わっても、外国人への反感が、我々と中国人の間に垣根となって残るでしょう」

マクロバートは答えた。

「私の義理の父、フレッド・サーベッジがその答を持っているように思います。義父は1910年、宣教師としてイギリスから中国に渡りました。彼はそれまでの宣教師のやり方に従って13年間働きました。しかし、次第に彼は中国人の中にも、キリストを宣べ伝えることの出来る、情熱と能力のある献身した人がいることに気が付くようになりました。彼らは貧しいため、それを生かす機会に恵まれていませんでした。彼らが他の地域を宣教したいと思っても、自分の土地を離れることは出来ません。文書を印刷する資金もなければ、汽車に乗るお金もありません。義父は電気技師でしたので上海に仕事を見付け、イギリスから送ってくる費用は、全て現地の宣教師に与えたのです。彼は私のように、「現地」の宣教師が福音のために中国を勝ち取る鍵を握っている、

と信じていたのです」

1943年の始め、中国人福音宣教クルセード（CNEC；China Native Evangelistic Crusade）が創立され、N. A. ジェブソン博士は初代会長となった。それは「自国民の中で、主に使える指導者を勝ちとり、訓練する」ことを目的としたものであった（この目的は、後に中国以外の国や部族にまで広げられることになった）。9人のビジネスマン理事が管理や運営、そしてアメリカ各地を旅行するための費用を負担し、支援者から受け取った資金は全て中国に送った。

その間、一つの出来事が中国貴州省（Kweichow）の西で起こった。若い宣教者カルビン・チャオは、日本軍の侵攻で他の中国人避難民と一緒に、大陸の奥深く逃げていった。小さな教会を牧しながら、彼の心はキリストのことをいまだかつて聞いたことのない、広大な中国内陸の町や村に住む人たちに、大きな責任を感じていた。時々、彼と妻、そして友人たちは野に出て、木の下で失われた人々のために泣き、中国の教会のためにビジョンが与えられるように祈った。

カルビンは、失われた人々と教会の間に立ちはだかっている、越えることの出来ない大きな壁を認めざるを得なかった。西欧的な考えと、欧米人宣教師への反感は高まっていった。迷信や伝統が人々の心にしっかりと根を張っていた。都会での安易な生活を捨てて行く、中国奥地への困難な宣教の旅は、人々の勇気をそぎ教会をそのままの状態にとどめていた。

後になってカルビン・チャオは、このように証している。

「私にはビジョンがあった。しかしそのために私は何が出来たであろうか。わたしは貴陽（Kweiyang）にある小さな教

会に縛られ、宣教のために町をでることすら出来なかった。私に出来るのは祈ることだけだった」

そして、神は彼の祈りに答えられた。ダンカン・マクロバートはカルビン・チャオの宣教への情熱と組織力を思い出し、新しく組織されたCNECがチャオに電報を打つと共に、CNECで援助するその働きを監視出来る、理事会を組織するように求めた。

チャオはその時のことをこのように書いている。

この申し出は、私をどんなに驚かせたか知れません。このビジョンはまさしく私のものでした。．．．そのため私は自分の目を信じる事が出来ませんでした。．．．私が祈っていた時、ギデオンへの神の言葉が私に強く響きました。ギデオンは主に言いました、「ああ主よ、わたしはどうしてイスラエルを救うことができますでしょうか。わたしの氏族はマナセのうちで最も弱いものです。わたしはまたわたしの父の家族のうちで最も小さいものです」。主は言われた、「しかし、わたしがあなたと共にいるから、ひとりを撃つようにミデアンびとを撃つことができますでしょう」（士師記6：15，16）

この約束で、チャオはその召命に答え、内陸に行くための「福音宣教バンド」を組織し始めた。「説教者によるバンド」の考えは中国では新しくない。宣教団体はバンドを組織し、僻地につかわし、そこのクリスチャンのグループが訓練されるまで滞在させた。しかしチャオはそのような巡回宣教者のために特別な訓練が必要であると感じた。彼のビジョンは、彼らを送り出すと共に彼らを訓練するということであった。

これらのバンドの初期の報告書は、正しく宣教の古典のそれで

あった。1944年4月、チャオは貴州省の安順（Anshun）からこのように書いた。

4日目に私たちはクライマックスに達した。救いのメッセージを説教していると、神の霊が罪の恐ろしさを知らせ、私たちの心を打った。男も女も十字架につけられた主の御臨在に、心が完全に砕かれた。そして、地獄に値する罪人にもかかわらず名前が「小羊の命の書」に記録されているのを感謝し、多くの聴衆が泣きながら立上がり、祭壇の前に来た。

1945年1月、チャオは子供2人を含む15人のカイヤン・バンド（Kaiyang band）について報告している。彼らは、3日間降り続いた雨の中、足に豆を作ってやっとのことで目的地に着き、行政官、警察署長、学校の校長を訪問した後、集会を開いた。

その同じ月、当時のCNECニュース・レター「クルセード」は、部族の村々に囲まれたファ・チ（Hua Chi）という小さな町を訪問したバンドからの報告を掲載している。

私たちが説教していると、一人の婦人がお辞儀をし、微笑みながらやって来ました。彼女は竹であんだ帽子を取り、何回もお辞儀をしながら、自分は以前福音を聞いたことがあること、そして、近くにある彼女の家には是非来てくれるよう私たちに求めました。15年ぐらい前、一人の聖書行商人が彼女の村にやって来て、説教をしながら聖書を売ったのです。彼女はその話に感銘を受け、もっと知りたいと思いましたがそれ以来、機会がありませんでした。私たちのバンドが行ったとき、彼女は聖

書行商人を思い出し、15年経ってイエスについて再び聞く機会を持ったことを嬉しく思いました。．．．彼女は初めて祈り、このとき回心しました。

2年以内に、中国人宣教師、婦人伝道者、そして学生によって組織された13の福音バンドが出来、13の福音集会所が開かれた。チベットの真北にあり、そのころ福音に扉を閉ざし、宣教師の入るのを許さなかった新疆（Sinkiang）を含め、宣教の仕事は5つの省に広がっていった。神は新疆にクリスチャンの行政職員とその奥さんを送り、その地域への扉を開かれた。彼女の夫が役人として仕事をしている間、リー夫人は証しをし、聖書を教えた。そして間もなく教会が出来た。

1945年、CNECが助けている働き手たちは、30人の学生たちと共に重慶（Chungkung）にスピリチュアル・トレーニング神学校を開いた。1946年には、南京に二つ目の聖書神学校が出来た。すでに、65人の中国人宣教師が、5つの省で奉仕をし、聖書を教えていた。教会が建てられると、その地域のクリスチャンはその教会の働き手の生活を支え、宣教師は他の地域に移って行った。このことは、欧米の家族（教会）が僅かではあっても、援助の道を開いていたので始めて可能となったことでもあった。

1945年、日本軍の降伏と共に、中国には楽観主義が広がって行った。8年にわたる戦争と苦難のあと、中国のクリスチャンはこれからの急速な教会の成長を夢みた。

戦争中出来た「難民大学」は豊かな収穫の場を提供していた。カルビン・チャオは、全国的な学生運動を始める器として用いられた。この運動は後に、中国インターバースティ・フェローシッ

アとして知られるようになったが、その時までには2千人以上の学生が参加していた。そしてその多くは、中国のまだ福音の到達していない人々のなかで宣教するビジョンと重荷を持っていた。欧米の宣教師は中国のもとの宣教区に戻り始めた。日本軍によって抑留されていた人たちは釈放された。その中にフレッド・サーベッジと彼の妻も含まれていた。フレッドは後に、CNECの理事から上海で現地の監督者として奉仕するように要請された。

シアトルのCNECの理事たちは「その時代より進んだ考え」が正しかったことが証明され、喜んだ。神は中国の指導者たちが自分で責任を持ち、福音が今だかつて宣べ伝えられなかった地域で、宣教のため戦略を立て、計画し、実行に移すことの出来るようにされた。欧米ではCNECの出版物が、「現地の宣教師を援助しましょう！あなたの1ヶ月20ドルが1人の中国人宣教師の全ての費用をまかないます」と、人々に訴えた。

しかし日本軍が降伏するやいなや、共産軍が蒋介石の国民党軍を次々と包囲し、南に追い込み始めた。第1章で書いたように、パウロ・チャンは1949年、共産軍が占領する直前に桂林を逃れた。1951年までに、CNEC福音宣教バンドへの資金援助は打ち切られた。そして、129人の現地人宣教師のうちの多くは文化革命のもとで迫害を受け、獄に入れられ、6人は信仰の故に殺された。

ジェブソン博士、セシル・ケトル（1951年、ジェブソンの後、彼に変わってCNECの舵を取るようになった）、およびその他の理事は、中国の扉が閉ざされたので香港に逃げた150万の中国人避難民のために奮闘した。後に、宣教はシンガポールと他の東南アジアの地域の中国人の間にも広げられた。CNECは

中国人以外にも宣教を拡大し、1961年、名前をクリスチャン・ナショナルズ・エバンジェリズム・コミッション (Christian Nationals Evangelism Commission; 後に Christian Nationals と短くした) に変えた。しかし、役員会は、アメリカの支援者との現実問題に直面しなければならなかった。アメリカの人たちには、まだ現地人宣教者を援助する準備が出来ていなかった。「その時代より進んだ考え」は、現地の教会を考えるかぎり時代に合っていた。しかし、アメリカの教会の宣教の戦略家や牧師、そして宣教に関心のあるクリスチャンはまだその答を保留していたと言える。

しかし、中国での政治的な改革は、宣教の歴史における曲り角となり、現地教会の指導者の考えを変えるきっかけとなった。宣教師が去った後、数億ドルに換算される病院、学校、そして他の施設が残されたが、それらを維持し証しを続けるのは、現地のクリスチャンだったからである。

このような状況のもとで、今までの欧米宣教団体は組織を再編成し、また、新しい組織も出来てきた。現地教会の自立を認め、本当の意味でのパートナーシップの大切さが分ってきたからである。中国で起こった政治的革命的津波が「西欧の救い主の役割」の崩壊をもたらし、今までの西欧の管理や経済システムへの挑戦にと発展していった。

多くの教派や宣教団体は現地教会への干渉をゆるめ、現地の人たち自身で最も効果的な組織やシステムを作り、それが発展することを期待した。「干渉主義からパートナーシップ」への変化の動きははっきりしており、現地の教会にとって、良い意味での衝撃であった。

韓国の教会は世界の注目を集めた。それは、本当のパートナーシップとは何かを教えているように見えたからである。韓国の教会は、ほとんど初めから韓国人指導者の手によって指導され運営されてきた。宣教師と韓国人指導者の間は「兄弟同士」であって主従関係はなく、一緒に働き、同じ教会の監督のもとにあった。お互いの持っている物でもって、教会のために奉仕した。朝鮮動乱の後も、教会は生き残り、より強固になり、信者は宣教に強い関心を示した。東洋宣教会 (Oriental Mission Society) のエドウィン・キルボーン博士は韓国人信者の宣教への熱意をこのように書いている。

私は韓国の人たちが泣いているのを見た。彼らには、捧げるものが何も残っていなかった。彼らは祭壇の前に来て、自分の札入れを置いた。眼鏡や指輪をはずし、服も靴も脱ぎ、祭壇の上に置いた。多く的人是会を離れ、家に戻り、夜具や衣類を持って来て「どうかこれらの物を売って、宣教のために使って下さい」と捧げた。私たちと300キロ以上離れた所から一緒に集会にやって来た説教者の一人は、祭壇の上に帰りの切符を置き、こう言った。「どうかこれを宣教のために用いて下さい」。韓国の教会は宣教に燃えているのである。(注1)

今日、韓国の教会は、世界で最も急速に成長している。毎日、6つの新しい集会が公に組織され、数千の人が、海外宣教に従事出来るよう、訓練を受けている。

一方、植民地主義はアフリカで衰退し、リベラルなクリスチャンは、教会があまりにも西欧植民地主義と同一視されていたので衰えるか、あるいは存在しなくなってしまうのではないかと予測

した。たしかに状況は安定していない。しかし、現地の自立した教会が、福音宣教のため、活発に動き始めているというのも事実である。

世界の各地で起こった急速な政治的改革が、ほとんどの宣教団体に影響を及ぼし、現地指導者に権限の委譲を早めるという結果をもたらした。1960年代には、「改革の嵐」がアフリカ大陸を横切った。45ヵ国が政治的独立を得、ナショナリズムに燃えたアフリカ人指導者は、自信を持って自国の建設にのりだした。宣教団体は意識するにしろしないにしろ、現地人指導者に責任を委譲し、お互いが平等であることを認めるようになった。学問的な訓練を積み、キリストへの献身で満たされた素質のある現地のクリスチャン指導者も生れてきた。外国宣教団も彼らの働きを認めざるを得なくなった。まだまだ弱く、問題もあったにもかかわらず、これらの指導者は教会建設に用いられ、ある程度の成功をおさめた。

1970年代の初めまでには、多くの宣教団体は方針を変え、現地の教会に資産を移し、財産の所有や組織の管理を現地の人に任せるようになった。

しかしこれらの進展にもかかわらず、教会と宣教団体との対立は、なおかつアフリカの宣教で直面している、もっとも重大な問題の一つで、宣教会議では、その問題を討議するため多くの時間が使われた。アフリカの教会が、欧米宣教団体による支配とその文化の異質性に憤慨していたにも拘らず、いまだに多くの欧米宣教師は、アフリカの人自分たちで問題を処理出来ないのではないかと思い、彼らに多くを与えることに躊躇した。ある欧米宣教師にとっては最初のステップ、すなわち現地の教会指導者を自分の国の教会に招待し、定期会議で彼らの見方をおおっぴらに発表

する、ということですら躓きの石だった。

このような問題があるにもかかわらず、東アフリカの長老派教会総主事、ジョン・ガトーが1971年2月、次のような呼びかけを行ったとき、宣教師と教会指導者は共にショックを受けた。彼はこのように言った。

「我々のこの問題に対する回答は、全ての欧米宣教師が5年以上自国に引きあげ、冷却期間を置き、双方の将来の関係がどうあるべきかをじっくり考えた上で態度を明確にするのが、一番良い方法と思われる」（注2）

欧米宣教師もアフリカ人も、福音的な指導者はこの考えを受け入れなかった。ビヤング・カトーはその理由をこのように言う。

「この問題に対する一時停止の呼びかけは、関係する各方面への影響を考慮しない、単なる感情的なアピールです。キリストの教会は一つの体です。生れ変わっていない人たちの世界も一つです。したがって、この問題に対する一時停止の呼びかけは聖書的ではありません」（注3）

こういった問題があるにもかかわらず、過去数十年の間に、アフリカでは教会の著しい成長が認められた。今日、アフリカでは2.5人に1人はクリスチャンである。1979年だけでもアフリカの教会では600万の成人が信者となった。これは毎日1万6千人が教会に加わったことになる。

世界宣教の舞台では、欧米の福音宣教団体は、開発途上国の教会の、いろいろな経験を分かち合う必要を認め、戦略的見地から宣教会議を開くための援助を始めた。

現地の人々は、最初こういった宣教会議にオブザーバーとして招待されたにすぎなかったが、エキュメニカル（世界キリスト教統一運動）な会議では、しだいに彼らは出席者の一員としての地位

を占めるようになっていった。例えば、インド人司教 V. S. アザリアは、1910年エディンバラでの世界宣教会議 (World Missions Conference) で、主な講演者の一人だった。

1966年、米国イリノイ州ホィートンで開かれた全世界宣教会議 (The Congress on Worldwide Missions) には、おおよそ150の宣教団体からの代表者938人が出席した。この会議の主題は「教会の世界宣教」だったが、いくつかのセッションでは、キリストの体において一つであることに関連し、教会の持っている特質とその意義についての実質的な面が取り上げられた。そして、閉会宣言では、世界宣教の進展は、欧米宣教師によるあまりにも多くの干渉が、その歩みを遅らせているのではないか、との懸念が表明された。

1970年、イリノイ州エルバーンで開かれた、ラテン・アメリカにおける福音宣教委員会 (ECLA: Evangelical Committee on Latin America) 後援によるフォローアップ協議会では、「現地化の原理の硬直した適用」によって引き起こされた障害に、出席者の関心が集まった (特別な状況や必要への配慮を無視した、お役所的な資金の使い方と人材の縮小)。この問題に対しては、引き続き福音外国宣教協会 (EFMA: Evangelical Foreign Mission Association) と国際外国宣教協会 (IFMA: International Foreign Mission Association) の後援による合同修養会と勉強会が、1971年9月、ウイスコンシン州グリーンレイクで開かれたが、406人の招待された代表者とオブザーバーの内、海外からの出席者はたったの15人にす

ぎなかった。

これは、その時代の、海外の兄弟を助けることへの私たちの関心の度合いを示す、バロメーターでもある。グリーンレイクに出席した15人の現地の人は、たった一つのセッションにしかパネラーとして参加出来ず、また、セッションを選択する自由もほとんどなかった。全体会議を通して、またその他のどのような形にせよ、彼らが重要な話を求められたということはなかった。彼らに与えられた、自由な発言の場は、集会の最後で、その時にはすでに、ほとんどの代表者たちは帰ってしまっていた。残っていた人も出入口のそばで、空港に行く申にすぐ乗れるよう、スーツケースを持って座っていた。

いく人かの現地の指導者は、これは若い教会と、自分たち個人に対する侮辱である、と表明した。彼らは自分たちに割り当てられたセッション（15人に45分）は「形だけ」であり、相互依存の原則を受け入れていない証拠である、と見なした。雑誌「エバンジェリカル ミッション クォーターリー」のなかで「グリーンレイク 71年の反省」という記事をメキシコのヘクター・エスピノザが書いているが、このことを次のようにコメントしている。

会議の終わりまでに、何が緊張の原因となっているのかが分かりました。15人の現地人「コンサルタント」のうち、たったの6人しかセッションで話す機会が与えられませんでした。しかもそれは、それぞれ、3分間に限られていました。したがって、この会議は、宣教師が話をし、現地の人たちが聴くという古いやり方に従って運営されている、ということが不幸にも、はっきりしてしまいました。

デビッド・エングストロムもこのように観察した。

会議の指導者によって、代表者たちは、しばしば海外からの声を「聴く」ことを促された。しかし残念なことに、現地の教会指導者の代表はわずかだったため、「聴く」ということは、もっぱら、仲間の宣教師の声を「聴く」という形になってしまった。本来ならば、海外からの出席者の「声」は現地の人の「改革のため」の叫びであり、この会議の出席者は聖霊が今日、世界のいたるところでなされている「新しい事実」に心を開くことであったはずなのである。

1966年のベルリン官教会議での主題は「人類は一つ、福音も一つ、奉仕も一つ」だった。この会議では主に福音の神学が話し合われた。そして、この会議は、欧米の教会指導者によってプログラムが作られ、運営されていたにもかかわらず、発展途上国から来た出席者にも、大きな役割が与えられた。この会議は数ヵ月後、イリノイ州ホィートンで開かれた会議に引き継がれたが、ここでは、「教会は一つ」の考えが、さらに一步前に踏み出された。

1974年7月、スイス、ローザンヌで「地球上の全ての人に主の声を」の主題のもとに、フォローアップ・ミーティングが開かれた。世界中から参加した出席者は、この会議が、今までにない新しい考えによって運営されているのに気づき、勇気づけられた。現地の人の積極的な参加を意図していたのが明らかだったからである。この会議で使われた報告や資料は本の形で出版され、世界中に広範囲なクロス・カルチャーの問題として提供された。

この会議では、キリストの体は、その肢体全てから学んだ、と言える。

次の重要な世界福音宣教協議会は、1980年6月、タイのパタヤで開かれた。会議の主体と責任が、現地の人により多くまた広範囲に移っていったのは明らかだった。組織の運営、プログラムの作成、コミュニケーションといった分野には、発展した国からの貢献があり、西側の助けがあったが、この協議会では、出席者は等しく、対等の立場で世界の教会が直面している問題を話し合うことが出来た。プログラム・ディレクターはインドのサフィア・アセール博士、主題講演発題はガーナのゴットフリート・オセイメサが行った。主なセッションで、西側が主導権を握っているとする証拠はなかった。そして出席者は皆、自分たちの見解と確信を表現するための平等な機会が与えられているのを感じた。

このタイ協議会の閉会宣言は次のようなものである。

．．． 私たちは、悔い改めなければなりません。なぜなら私たちには、キリストを宣べ伝えようと望んでいる人々に対してですら、偏見や見下し、そして敵意さえあるのに気が付くからです。私たちは、神がキリストにあって私たちを愛されたのと同様に、他の人を愛し、そして主が私たちと一緒に生活することによってご自身を示されたように、私たちも彼らのなかで生活することによって、イエス御自身を示すことの出来るよう、変わらなければならないと信じます。

1980年11月、エジンバラで海外宣教団体の代表による国際会議が開かれた。1910年には、第三世界からの宣教団体は

公式には出席していなかったにもかかわらず、1980年の会議には171団体の3分の1、出席者264人の3分の1が第三世界からだった。第三世界の宣教指導者は、4日にわたる朝の主なスピーチのうち、3つを受け持った。講演者の一人、ラルフ・ウインター博士は、第三世界の指導者はこの世紀の終わりまでに、宣教の世界で主な役割を果たす、ということを預言した。

事実、最近の宣教の活発な動きのほとんどは、現地の教会の急速な発展にともなうものといえる。現地の人たちと、その働きに律法主義、あるいは独善性を持ち込まない指導的福音宣教団体が福音宣教の指導的役割を、ますます持つようになって来ている。またこれにともない、これらの宣教団体と現地教会の間に、パートナーシップと助け合いの精神が生れて来た。

ジェプソンは1951年に死んだが、このような現地指導者を助けようとする気運の高まりを、当然のこととして、きっと驚かなかったであろう。このように福音宣教会議で、現地の指導者の貢献とその重要性を認める前に、いくつかの宣教団体では、すでにこの方向に向けて動き始めていた。

これらの団体では、これが効果的な宣教方法であることを知っていた。例えば、1934年に設立されたスラビック福音宣教団体では、第二次大戦後、フィンランド、ポーランド、そしてユーゴスラビアといった国はアメリカ及びカナダ人の宣教師に対して扉を閉ざし、その結果、これらの国のキリスト教指導者たちは鉄のカーテンの向こうで、私たちからの助けを必要としているのを良く知っていた。

バシール・ミラーによって1950年に設立された、カリフォルニア州パサデナのワールドワイド・ミッション・インターナショナルには、おおよそ20人の欧米人宣教師がいるが、その主な

第7章 どのように援助するか 119

目的は、現地の働き手を援助することである。

AMGインターナショナルは、1942年、アメリカでギリシャへの宣教を目的として、スピロサ・ゾデアテスによって設立された。教会を建設し、本を発行し、放送に従事し、ギリシャでの宣教を助けた。この宣教団が助けたほとんどの人は現地の人だった。AMGの宣教は他の国にも広がり、今日では、19の国に、200人の現地スタッフがいて、2500人以上の現地の人たちを助けている（これらの人には、教会指導者だけでなく、ライ病患者や子供たちも含まれ、ほとんどはインドにいる人たちである）。

これら3つの超教派宣教団体は、今でも成長を続け、その主な目的は共通して、現地人指導者と教会のために資金的援助をするということである。また、これらの団体のほとんどは、特定の人種を決め、一つあるいは二つの国に限定して、援助している。

例えば、エバンジェリカル・チャイナ・フェロースHIP（ECF; Evangelical China Fellowship）は、東南アジアの500人の中国人宣教師を援助している。この宣教は1947年、アンドリュー・ジー博士によって上海で始まった。共産主義から逃がれアメリカに来た彼は、この組織の目的を「中国人にキリストを」とした。いくつかの欧米宣教団体は、ECFに自分たちの宣教師を貸し、現地の人々の教育を助けている。

もう一つは「世界に聖書を」で、その主な目的は、第三世界に聖書を配布することである。それと共に現地の人たちを援助し、現地に教会を作るということに強い関心を持っている。

これは以前、インド・ビルマ開拓宣教団とよばれ、同宣教団体は「ビルマ独立教会」の設立に貢献している。この教会は外国人

宣教師の助けなしに、着実に成長している。今日、「世界に聖書を」は、300人以上の現地人指導者を援助し、その対象のほとんどはインドの人たちである。

これらの団体の多くは年間予算が10万ドル以下で、その活動は限られている。またそのいくつかは、現地人指導者によって運営され、彼らの団体に関係のある組織が米国内にあって、資金を集めている。こういった宣教団体は、現地の人だけを対象として援助している。

こういった組織のほとんどは、伝統的な欧米宣教師と協力し、奉仕している。しかし、いくつかの団体は、欧米から宣教師を送る時代はもう過ぎたとし、全ての資金は現地の人を援助するために使われるべきであると、伝統的な福音団体に対立している。

独立した現地宣教に資金を送るのが主な目的であるこれらの団体のほかに、自分たちのスタッフに現地人の働き手を加える、という伝統的な宣教団体がある。

例えば、アフリカ・エバンジェリカル・フェロウシップ(AFF; Africa Evangelical Fellowship)には235人以上の北アメリカ人宣教師がいるが、それに協力して500人以上の現地の人が働いている。ほとんどの経費は現地の教会によって賄われているが、宣教団体もその組織に働くいく人かの現地人職員を雇っていて、この経費は直接海外から来ている。

キリスト教文書を発行し、配布する世界文書クルセード(WLC; World Literature Crusade)のようなサービス団体には、WLCを通して経費が支払われている1600人以上の現地人スタッフがいて、現地人スタッフがその宣教の責任を持っている。ナビゲーターには、145人の海外で勤

務する職員がおり、それ以外に、彼らを助ける約250人の現地の人がいる。

現地人指導者を援助する多くの宣教団体のうち、クリスチャン・ナショナルズ・エバンジェリズム・コミッションは、40年以上の経験と、広範囲な宣教活動をしている。現在、約40ヶ国で1万2千人以上の小学校から神学校までの学生、及び各種教育プログラムを援助し、また、1500人の現地の指導者を助けている。

この活動により、祈りのネットワークと資金的な援助プログラムは世界中に広がっている。英国のサーベッジ夫妻は、はじめ小さな会を作ったが、この委員会は現地の人たちへの支援者を英国中で獲得しながら、次第により大きな組織である評議会に発展していった。

同じようにオーストラリアのクリスチャンたちは、中国でカルビン・チャオのアシスタントとしてはたらいていた若い中国系オーストラリア人、ドリス・ルムを助けていた。ドリスはジョン・ルーと結婚し、二人は中国で長い間、主に忠実に奉仕し、オーストラリアの人たちに、中国と彼らの必要を知らせ続けた。そしてジョンとドリスを助けていた友人たちによって作られた委員会はオーストラリア評議会に成長していった。

1960年の始め、カナダでSIM宣教師としてナイジェリアに使わされていたエド・パインは、カナダで、現地の働きを助ける評議会を設立した。

第8章

実りある関係を築く

真のパートナーシップとは、福音宣教のため、お互いが持っているものを自由に分かち合うことである。...

(ジョージ・ピーターズ博士)

前の章で述べたように、今日、現地の宣教活動を援助している宣教団体は増えてきている。それぞれの組織には、援助の指針となるガイドラインがあり、私たちにとって、他の宣教団体のガイドラインを知ることは、自分たちの宣教活動を見直すための良い助けとなるであろう。

クリスチャン・ナショナルズは、40年以上の宣教の経験があり、また、現在40カ国で活動しているので、私たちのガイドラインを紹介し、私たちの長年にわたる宣教活動によって培った現地の宣教を評価、分析するノウハウをお知らせすることは、皆さんにとっても十分有益ではないかと思う。

最も難しいのは「ノー」と言う事だ。一年間に150以上、援助の要望がクリスチャン・ナショナルズによせられる（インドからだけでも70にも達する）。それぞれに理由があり、キリスト

のために自分の国の人々に仕えたい、という願いを感じる。

例えば、次のようなブラジルからの手紙がある。

親愛なるフィンリー様

私は、ここリオ・デ・ジャネイロで始まった、ユニークな福音宣教を紹介したいと思います。．．．

私たちは、神様から与えられたビジョンにより、この地での宣教のために、平信徒のための聖書学校を始めました。この学校には、今訓練を受けている24人の青年がいます。．．．この卒業生をチームとして用いることにより、この地域に宣教し、教会をつくっていきたい、と思っています。

私たちを援助してはいただけないでしょうか。

あるいはこれはインドの例である。

親愛なるルツ様

神様は、私に職業訓練プログラムによって伝道するという、宣教のビジョンを示して下さいました。．．．2年間の訓練を終えたとき、信仰的に成長したクリスチャンになっているだけでなく、自分の生活の収入を得ることの出来る仕事も身に付けています。ここの多くの人是非常に貧しく、教育を受けることも出来ないため、仕事を見つけることが出来ず、主への奉仕も出来ません。．．．私はこのビジョンを与えられてから、祈り、主の導きを待ち続けて来ました。．．．1979年、私は銀行を止め、収入を主の御手に委ねて歩み始めました。私は小さな大工の仕事場と、手織機のある家を借りました。私はその家の一角に住み、訓練プログラムを始めたいと思っています。

私はこの重荷を、．．師にも分けました。そして、師はあなたに手紙を書くことを勧め、神がこのことについてどのように働かれるか見るようにと、私に勧めました。

どのように適当と認めるか

あるプロジェクトを援助するかどうか、その判断の責任は非常に重い。最終的な決断まで、おおよそ6箇月から1年はかかる。1年に応募してきた150の内から、たったの10しか援助出来ないのである。

アレン・ルツは、新しく始めるプロジェクトのための副理事長として、全ての要望書を読み、チェックするコーディネーターの立場にいるが、要望書を送って来た一人に、このように返事をした。

残念ながらクリスチャン・ナショナルズは、今、ザイールにこれ以上の活動を広げることは出来ません。私たちは今すでに援助しているところへの責任を果たすことで、精一杯です。

しかし、この決定は皆さんの宣教活動に興味や関心がない、ということではありません。どうかその点、ご理解下さい。私もザイールのために朝早く起きて祈らせていただきました。確かにあなたの国で宣教の大きな戦いがあるのは分ります。しかし、戦いがいかに困難であろうとも、私たちは勝利の側にいることを主に感謝したいと思います。

もちろん、私たちに書いてくる全てが、私たちの援助の対象と

して適切であるとはかぎらない。そのための「自動的」なふるい分けは、次の通りである。

- －信頼のおける現地人団体、あるいは教会組織で働いていない個人からのもの
- －自分たちの出来る範囲内で、プロジェクトを始める努力がされていないもの
- －欧米での留学の援助を求めているもの（クリスチャン・ナショナルズと協力関係のある現地の人たちからの要望の場合、援助することもある）

しかし、一つ一つの手紙には希望や夢、そして神の僕としての重荷があり、出来るだけ彼らからの手紙や問合わせには答えるようにしている。現地の人々の宣教活動はほとんどの場合、資源の不足という制約があるので、狭い範囲に限られているため何とかして少しでも彼らを力づけてあげたい、と思うからである。

現地の人たちを援助する団体には、現地の宣教を評価するためのガイドラインがある。例えば、クリスチャン・ナショナルズは救援団体あるいは開発団体ではないが、いくつかの重要な救援プロジェクト（1976年のガテマラの地震ではその救済活動）には積極的に参加した。しかし、他にもっとこういったプログラムに適した団体がいくらでもある。

私たちの主な目的は宣教であり、教会建設、開拓伝道、そしてクリスチャン・リーダーシップの推進である。そしてこれらの宣教に、私たちは優先順位を付けるのである。

第8章 実りある関係を築く 127

一方、おのおのの文化には優先順位を決定するのに考慮しなければならない、いろいろな要素がある。例えば、フランスには沢山の寺院と長いローマ・カトリックの歴史があるが、一般的に言って、公の福音宣教に対しては抵抗がある。しかし、メディア指向の社会なので、キリスト教のテレビ番組や映画には必ず人々の反応がある。したがって、ユーロ・メディア・プロダクションから、高価なテレビジョン機器の購入とスタッフのための援助の依頼があったとき、私たちはそれが軌道にのるまで、援助することにした。フィルムとテレビジョンは効果的な福音宣教の道具として用いることが出来、もっと直接的な方法を用いての収穫への道を備えることになる。

インドでは、農村部では95%以上の人々がクリスチャンではないため、個人的な宣教と戸口から戸口への文書配布が効果的とされている。多分そのような宣教方法は、教会がすでに力を持っている南アフリカの都心部では、用いられないであろう。

考慮すべきこと

宣教のための優先順位や計画の決定、及びそのゴールは、今まで働いて来た他のクリスチャン指導者や宣教師の立てた全体的な戦略に添って、決めなければならない。

基本的な教義が一致していなければならない、ということについては今さら言う必要はない。私たちは、教義についてはお互いの立場を守るため、誓約書を取り交わすことを求めて来たが、援助を求める側の人々が自分たちで教義を書き、それを私たちに出してもらった方が、より効果的であることが判明した。

援助する側と現地の教会との関係は、注意深く調査しなければならない。というのは、私たちの援助は地域全体の利益のために用いられるべきであって、一部の人だけの利益となってはならない、と信じるからである。

しかしながら実際にはこのことを調査するのは難しいことだ。例えば、私たちは現地教会の指導者が行なっている宣教をそのまま認め、援助したことがある。それは彼がこのような立場にいるということ自体が、現地の教会に良く受け入れられている証拠だと思ったからである。しかし、教会の役員がこの指導者と私たちとの関係を知ったとき、彼らはアメリカまで代表を送って来てこの人によって指導されるどのような宣教も、現地のクリスチャン社会に受け入れられるのは非常に困難である、とはっきり説明した。その結果私たちは、この援助は現地での混乱をまねくだけであると判断し、事態が改善されるまで援助を延ばすことにした。

一方、私たちはある教派に所属する、大きな教会のアフリカ人牧師を援助していた。彼はより大きな働きのため、その教派を離れることを決心し、彼の教派の人たちもそのことに喜んで同意した。クリスチャン・ナショナルズは、全国的な宣教活動を始めるこの指導者を引き続き援助し、彼の以前の教派も同じ様に援助を続けた。

教会の他に、福音宣教協会、宣教組織、そして宣教団体といった全国組織からの推薦もある。人は常に100パーセントの推薦あるいは承認を期待出来ない。もし圧倒的多数の返事が好意的なものであれば、その宣教は一緒に仕事をする上で困難がなく、教会によってそのプログラムが受け入れられるということが推測出来る。

応募してくる宣教団体の財政状態を、正しく評価することが大切である。現地での援助を得るために、出来るかぎりの努力をしたであろうか。そのニーズはただ単に価値が有るというだけでなく本当に必要なのか。それらは宣教の効果に、目に見えた変化をもたらすものなのか。

ケニア福音宣教フェロースhip (EFK; Evangelical Fellowship of Kenya) が援助を求めて来たとき、国内からの援助を得るためのあらゆる努力をして来たことがすぐに明らかになった。そして、それにもかかわらず完全に財政的に行き詰まっていた。あらゆる教派の教会から、協力と支援が必要だったが、資金がないので、そのためのプログラムや計画を立てる人すら採用出来なかったのである。

クリスチャン・ナショナルズがこの宣教を支援することに同意するや、アイザック・シンビリが、最初の専任の主事として奉仕することになった。彼のケニアの教会のための計画や教育、平信徒のための訓練などは、すでに実を結び始めている。

宣教が将来、外部からの援助なしで成長、発展し続けていくかどうか、援助を決定する上で重要である。宣教がその文化にあまりにも異質なものであれば、その地に根づかないであろう。そして、外部からの援助が打ち切られたとき、教会はそれを続けることが出来なくなってしまう。これが過去の欧米宣教プロジェクトの多くの場合だった。現地の指導者であっても、同じことをしがちである。

私たちの最初の「宣教計画」の書式に、私たちはその宣教の目的と目標をはっきり書くことを求める（これは欧米人の発想であって、多くの現地の文化においては必要ない、ということは知っている）。将来の宣教の効果を評価し、支援者に経済上の必要を

示すには、はっきりとした目的と目標が大切なことは言うまでもない。このことは、しばしば現地の人に自分たちのやっていることの目的をはっきりさせ、彼らにとってそれだけの価値があることを、私たちは経験して来た。

クリス・マランティカ博士が、インドネシアに神学校を作る計画を私たちに持って来たとき、彼はその目的と目標を明確にしていた。彼は神学校での学びを終えると、4人のインドネシア人と3人の欧米人宣教師（2人はオーバーシーズ・クルセード、もう一人はチーム（TEAM）で奉仕していた）を同労者に選んだ。

インドネシアに戻った最初の一年間を、準備期間として用い、1979年8月に学校が開かれた。開拓伝道による教会の建設は新しい神学校の試金石となるものであった。学生たちは卒業する前に、教会を作ることが求められた。この神学校を作る上での目標は、次のようなものだった。

- －西暦2000年までに1000人の卒業生
- －現場に11人の専任の開拓伝道者
- －毎年10の新しい集会組織
- －年3回の集会
- －1980年までに、インドネシア国内に4000人の支援者の獲得

私たちの祈りと調査の後、これらは実現可能な目標であって、夢ではないとの判断が下され、クリスチャン・ナショナルズはこの神学校を援助することに同意した。当初の計画どおりに、インドネシア福音神学校（ETSI; Evangelical Theological Seminary of Indonesia）は1979年に開校したが、目標は当初の計画通りに達

第8章 実りある関係を築く 131

成したばかりでなく、予定よりも早くなった。最初の4年間で、モスレムの村々の195の家庭で礼拝が行われるようになり、その内の50はすでに、そこにある地域教派に教会として認められた。ETS Iスタッフは、今世紀中に、開拓伝道により1000の教会をつくる計画である。

宣教を助けるにあたってその目的を十分考慮するだけでなく、私たちは現地役員の構成とその資質に注意する。一度ならず、他の点においては申し分なかったにもかかわらず、要請を拒否しなければならないことがあったが、その理由は、その現地役員が人を指導し、財政的な責任を取れる人たちであるとは認められなかったからである。ほとんどの場合、「単独者」を支援することは賢明ではない。そのような人は、ときには自分自身のための仕事に熱中してしまう。教会や役員の指導がないため、責任範囲が分からなくなってしまふからである。役員は方針を決め、皆の導き手として、また助言者として奉仕し、適任者を必要な仕事に任命しまた、財政問題を処理しなければならない。

どのように助けるか

クリスチャンの同情と、分かち合いの精神は聖書の教えるところである。キリストの体にあって一つになる事、霊的な交わりの大切な事、生活や資源を分かち合う事の必要性は、強調しすぎることはない。

以下はクリスチャン・ナショナルズが援助する場合の実施手順である。

1. 援助は独善的でなく、謙虚にまた愛の心で行う。私たちと同じ、あるいは私たちよりもっと賜物と能力がある人と分かち合

うことの出来るのは、私たちに与えられた貴重な特権である。

2. 宣教に全身全霊を捧げている人に援助する。このような人は「雇われている人」ではない。私たちに「雇われている」という関係は避けなければならない。また、私たちの援助を、私たちが望んでいることを彼らにさせるための、手段として用いてはならない。
3. 現地の人を利用する結果とならないよう、方針をはっきりさせる。彼らは、私たちの哀れみの対象でも、私たちの組織のための宣伝物でもない。アメリカの「成功症候群」は私たち自身に何らかの成果が必要なため、彼らの文化にのっとったやり方から彼らを離れさせ、援助を必要とするように圧力をかけることになる。
4. こちらの都合だけを考え、一方的に援助を始めない。無意識ではあっても現地の人との間に独善的な関係が生れてしまうからである。
5. 現地のプログラムに口をはさまない。それは資金を管理する権限と能力とがある現地の指導者に委ねるべきものだからである。
6. 援助の配分などは厳格に決めて実施される必要はなく、現地と国外からの援助のバランスが配慮されることがより大切である。このためお互いに自由に発言、討議し、尊敬、愛を深めることが、現地指導者の指導力の発揮と自立に貢献することになる。
7. 海外からの援助に合わせて、現地側でも資金を調達することは現地教会の運営の上でしばしば刺激となる。例えば、クリスチャン・ナショナルズは、香港の難民クリスチャンと折半で香港聖書神学校の土地を購入することに同意した。ところが、私た

ちが約束を履行する前に、必要な資金の60パーセント以上を既に得たので援助はもはや必要なくなった、という手紙を受取った。私たちの援助はほとんど必要なくなった。

8. 結局のところ、お互いが満足する、継続する信頼関係が発展するのでなければならない。

現地の人と、個人的な関係を築くことに多大な時間をかけた一人の宣教師は、かつてこのようにたずねられたことがある。

「現地の人から学んだ最も大切なことは何でしたか」

彼の答えはこうだった。

「彼らを信頼することです」

信頼は「体」が一つと感じる基本である。アルゼンチンへの宣教師、ドン・カメールディエナーはこのように書いている。

クリスチャンとしての完全な自立は、精神的な目標ではなく物欲的な目標と見なければなりません。．．．三つの自立、すなわち自給自足、独立宣教、自主管理の追及には不信とうぬぼれが伴い、その結果はしばしば不毛で沈滞した教会を招来する事になります。感謝すべきことに今日の世界に、別な、より明るい絵が見えて来ています。これらは他の土地の仲間の信者と一体となる、熱意を持ったクリスチャンたちです。彼らは精神的な交わりを喜び、他の国のクリスチャンから送られて来たお金と、生活に必要な物を受けながら、自分たちの仕事を果たしそれによって得られる神からの霊的な祝福を感謝して生きています。(注1)

相互誓約の署名

プロジェクトを援助することが決まったら、クリスチャン・ナショナルズと現地宣教団体との間に、「相互誓約」(Reciprocal Commitment)が取りかわされる。

相互誓約は、お互いの目的をはっきりさせ、その責任と同意を意味する。クリスチャンの人類学者、ジョン・ヤンソンは援助を与えることと受けることについて、次のように述べている。

無条件で物を援助したり、教えたり、助けたりする場合、受ける側は自分自身の尊厳を保つため、同じ額に相当する何らかのものを与える側に返すことが出来なければなりません。さもないと、自分自身を、劣ると思うようになるからです。その結果、自分自身の人格的価値を見下げるようになり、感謝する代わりに相手に対して苦々しく思うようになります。(注2)

クリスチャン・ナショナルズの「相互誓約」では、お互いの責任は次のようになっている。

現地宣教団体は次のことに同意する。

1. クリスチャン・ナショナルズと他の現地宣教団体が信奉する基本的な聖書の教義に同意する。
2. 自給自足に心がけ、現地の自立性を保つ。
3. 誤解を避けるため、クリスチャン・ナショナルズを通してのみ、資金活動をする。これには、資金をあおぐための印刷された郵便物や個人的な手紙をも含む。

第8章 実りある関係を築く 135

4. 外部の助けを必要とする宣教の拡大、あるいは新しいプロジェクトは、事前にクリスチャン・ナショナルズの同意が必要とされる。
5. 資金を集めるため海外へ代表者を派遣するには、クリスチャン・ナショナルズの同意が必要であり、所定の代表者派遣計画に従って派遣する必要がある。その結果集められた資金はクリスチャン・ナショナルズを通さなければならない。
6. 支援者には、少なくとも年3回は報告し、実状を伝える。写真、報告書、あるいはその他の方法を用い、その宣教が支援者の興味と支持を得ることの出来るようにする。
7. 資金は決められた用途のために用い、毎年会計監査を実施し、その複写をクリスチャン・ナショナルズに送る。
8. 国際事業部理事長、あるいはその任命する者が仕事のため訪問することを認める。
9. クリスチャン・ナショナルズからの質問書あるいは評価様式に記入し、提出する。

クリスチャン・ナショナルズは次のことに同意する。

1. 現地の人を利用して私利を求めない。
2. 支援者の指定した仕事に、その援助を用いる。
3. 現地の人独自のプログラムに干渉しない。
4. 資金は決められた予算、あるいは、特別のプロジェクトに用いられるため、現地の理事（個人にではない）に送る。
5. 現地の宣教のニーズ（必要）を広く知らせ、そのための援助が出来るようにする。
6. 現地を代表して訪れる人のスケジュールの調整、必要な経費の支出、及び、文書あるいは他の資料を準備する。

7. 現地の宣教団体と他の宣教団体との関係をはっきりと説明出来るようにし、クリスチャンの間に混乱が生じないようにする。
8. 効果的な宣教活動に貢献出来るよう、アイディアや文書を分かち合い、セミナーを開く。
 (参考までに、クリスチャン・ナショナルズの「相互誓約」を付録に入れた)

このような、現地の人と私たち之間に立った、自立と助け合いのための配慮によって、クリスチャン・ナショナルズは現地人指導者との間に驚くべき円滑な宣教の歴史を持って来た。例えばクリス・マランテイカ博士はこのように書いている。

しかし、クリスチャン・ナショナルズについて何と言ったら良いのでしょうか。私たちが彼らと交わりを持つようになってすでに3年たちました。今日の世界で、このように現地の働き手を完全に信頼して、援助している宣教団体があるのを私は知りません。．．．彼らの愛、態度、そして激励の言葉は、私の信頼と共に、インドネシアの人たちをキリストに捧げようとする私の熱意となっていくのです。

誓約は守られているか

いかに関係が善く、信頼の出来る指導者がいたとしても、現地の宣教から目を離さず、彼らの中で、そして彼らを通して神が何をなさろうとしているかを見ることは大切だ。これは私たちが信頼し、教会の発展のため彼らを援助している人たちに報告出来る

ようにするためでもある。

クリスチャン・ナショナルズと同じ様に、現地の人を助けているほとんど全ての組織は、援助しているプロジェクトをモニターし、評価するため次のようなステップを取っている。

1. 現場での指導者

組織によってその数は異なり、また援助しているプロジェクトの自立性にもよるが、クリスチャン・ナショナルズには宣教に直接責任のある、地域コーディネーターが現地にいる。

例えば、インドには私たちのコーディネーター事務所があり、そこで、オーサー・ダラバイ博士はアジア亜大陸で4つの国に宣教する私たちをコーディネートしている。彼はインドの教会、指導者教育機関、福音宣教団体の人たちと密接な関係を持ち、新しいプロジェクトのための初期の調査を助けるだけでなく、すでにクリスチャン・ナショナルズと関係のある宣教のフォロー・アップもしている。

2. 定期的な報告書と監査

定期的な報告書と監査は全ての宣教に必要とされる。加えて、年ごとの自己評価による前年の目標とその結果、そして、将来のプロジェクトの目的と目標についての報告が求められる。現地の指導者たちは、宣教のためこれを記入しなければならない。そして、国際事業本部のスタッフは内容の吟味とコメントをすることになる。

3. 地域会議

現地の指導者とクリスチャン・ナショナルズの管理部門のスタッフとの間に、地域会議が開かれる。

4. 現地訪問

国際事業部管理部門スタッフのメンバー、あるいはオーストラ

リア、カナダ、英国その他の国の評議会からの代表による現地訪問は、お互いにとって激励と祝福の時として用いられる。しばしば、新しいニーズ（必要）や関心が、これらの訪問によって光をあび祈りの油として用いられる。情報は出版物などによって支援者と分かち合うことになる。時に矛盾が表面化してくることもある。しばしば現地の人と顔と顔をつき合せて話し合うとき、手紙には出て来ない問題や、重荷、弱さ、そして夢が出て来る。宣教団体のスタッフによる現地訪問は、彼らの報告に現実性を与え、友人や支援者の信頼関係を保つことになる。

同じようなガイドラインや手順は、現地を援助しているほとんどの宣教団体にある。この様なことを簡略化してしまうと、欲求不満と落胆に陥るだけだ。しかし、このように注意深く、祈りと共に出来上がったガイドラインや手順は、世界中に教会を建て、宣教のために実を結ぶ有効な助けとして活用することが出来る。

第9章

援助した結果

1981年2月、ファンファーレと共に大きな喜びが湧き起こった。新しい教会が生れたのだ。何年もの間、集会は個人の家や貸しホール、そしてときには、葬儀屋で開かれて来た。少数に分れ、集会が開ける所であれば、街のどこででも開いて来たのである。

1969年以来、皆は自分たちの会堂のために資金を集めて来た。そして12年たって資金は33万5千ドルに達し、500人が座れる近代的な礼拝堂を建てるに充分になった。

これと同じ時期に、外国宣教への献金も、年間868ドルの予算から4万ドルに増えた。1975年の教会会計報告にはこのように記されている。

「私たちは現在、会堂建築資金と同じ額を、宣教に使っています。しかし、主は私たちの教会を祝福して下さっていて、私たちに乏しいものは何もありません」

その年、教会は目標をこのように決めた。

「私たちの目的は、海外宣教のため少なくとも予算の55パーセントを捧げます。．．．加えて、海外宣教に教会の若い人を送り

出します」

1977年には、15人の教会員が宣教、あるいはそのための訓練を受けていた。このなかにはスーダン内陸伝道 (Sudan Interior Mission) に派遣され、アフリカに行った外科医とその奥さんも含まれている。

皆さんはこれは、アメリカの教会の出来事と思うかも知れない (予算の47パーセントを宣教に使うという教会は少ないだろう)。しかし、これはシンガポールのバートレー・クリスチャン教会の話なのだ。バートレーは、1969年、ジョン・ルーの勧めで数人の高等学校生徒と一緒に家の教会を始めた。ジョン・ルーは後にシンガポールCNECのフィールド・ディレクターになった。数年の間、教会はクリスチャン・ナショナルズの資金的な援助を受けた。

今日、美しい礼拝堂を持つその教会は経済的に自立し、広範囲な宣教活動と共に、東南アジアにおけるCNECの宣教活動を援助している。

クリスチャン・ナショナルズ (ここではCNではなくCNECとして知られている) は、東南アジアでの宣教に、東と西の間に本当のパートナーシップが築かれたとき、何が起こるかの具体例である。この教会に援助を始めようとしたころ、1人の西欧人がクリスチャン・ナショナルズに参加を見合わせるよう、忠告したことがあった。「たとえあなたがたがお金を与えても、彼らはうまく使うことが出来ないでしょう」

シンガポールの役員によって、東南アジア本部は「所有」され「運営」されている。バートレー教会は、この宣教によって生れ最も速く成長した7つの教会の1つだ。事実、CNECの教会が

第9章 援助した結果 141

シンガポールで最も速く成長しており、教会成長のための調査では、過去10年間に498パーセントの増加があった。例えば、1970年に設立されたトア・パヨ聖書教会は、教会員のために毎日曜、5回の礼拝を行い、予算の50パーセント以上を宣教活動に用いている。

東南アジア本部では、インドネシア、マレーシア、ビルマ、そしてタイを管轄している。宣教師は未開の部族につかわされ、学校が建設され、数百人の児童がスポンサー・ア・チャイルドのプログラムによって、学校に行くようになった。シンガポールの若い人たちは休みにこういった地域を訪問し、その結果、現地での宣教の働きに参加する人も出て来るようになった。シンガポールのクリスチャンたちは、数百人の子供をスポンサーし、学校に行く機会を与えている。CNECと関係のある7つの教会のほとんどは、聖書学校に行く若者を助けている。平信徒短期聖書学校には、沢山の人が本部に援助されて出席している。

テープによる宣教、図書の貸出し、そして通信教育コースなどが本部によって行われているが、これらは主に地方のクリスチャンの献金と協力によってなされている。これらのテープの多くが今、中国大陸にも渡っているのが確認されている。

しかし、欧米のクリスチャンの参加がこれらの宣教を可能としているのであって、欧米からの援助が、献身的な現地の働き手の活動範囲を広げ、キリストがまだ知られていない国あるいは地域への福音の到着を早めているのである。

結局のところ、東南アジアのクリスチャンはまだ10パーセントにしかすぎない（タイは0.5パーセント）。しかし、これらの国々には沢山の中国人がいる。シンガポールの中国人クリスチャンは、これらの地域のほとんどどこにでも出かけて行くことが

出来、そこでお互いが理解し、文化的に溶け込み、人々と交わることが出来る。私たちの援助は「スポイル」するかわりに、こういった機会をつくり、彼らの宣教を助け、支えているのである。

1. 福音が宣べ伝えられていない人々への援助は、現地の人たちが自立出来るようになる、という目的のために用いられるべきである。

1950年クリスチャン・ナショナルズが香港で、難民のための援助の働きを始めたとき、難民にとって自分たちの子供に教育の場を与えることが、大きな関心の一つだった。一時期、クリスチャン・ナショナルズは、7つの小学校の建物とその運営資金を援助し、数千人の子供たちの学費をスポンサーしていた。

今日、香港のCNEC事務所の教育部門は自立し、スポンサー・ア・チャイルド・プログラムは、漸次、廃止の方向に向かっている。香港政庁は教育には特に力を入れ、今では外部機関からの助けをそれほど必要としなくなって来ているが、政庁はこれらクリスチャン・スクールの教育の質には満足している。そして、CNECのようなクリスチャンの組織に、スタッフや学校の管理を委ねることを歓迎している。最近、香港のクリスチャン資産家から多大な寄附があり、香港で二番目のクリスチャン高等学校をCNECの教育部門が建てた。前に設立された学校は、千人以上の学生に質の高い教育を施し、新しいクリスチャンを生み出す肥沃な土壌となっている。難民のための教育プログラムは、人々から高い評価を得、クリスチャン・スクールのネットワークを形成している。

2. 現地の宣教を助けることは、現地の社会で人々に尊敬されるクリスチャンの活動の良い手本となる。

第9章 援助した結果 143

1954年のオリンピック・ランナー、ビルギリオ・ザバタは北アメリカでの勉強を終え、ガテマラに戻った。そこで彼は宣教に従事し、貧しい人々と一緒に生活を始めた。教育を受ける機会すら与えられない子供たちを前にし、彼は、ガテマラの子供たちに、質の良い教育を授けることの出来るクリスチャン・スクールの建設という、他の人にとっては「不可能な夢」を見るようになった。しかし、間もなく彼を笑っていた人たちは、自分たちが間違っていたことを知った。今日、インスティテオ・エバンジェリコ・アメリカ・ラテナ (IEAL; Instituto Evangelico America Latina) は5千人の幼児から青年までの、幼稚園から高等学校そしてビジネス・スクールを網羅した、ラテン・アメリカ最大のクリスチャン・スクールになった。

IEALの役員は10年もの間、ガテマラと北アメリカで資金を集める苦勞をして来た。1964年、クリスチャン・ナショナルズが援助することに同意したとき、学校は経済的理由で閉鎖される直前だった。ガテマラ市の心臓部にIEALのキャンパスを購入することが出来たのは奇跡ともいえ、クリスチャン・ナショナルズが最後の数分の祈りにより期限前に頭金、5万ドルを集めることが出来たからであった。

今日IEALは、総長のマンフレッド・ヘルナンデスを始めとする200人のスタッフと6人の校長のほとんどが、その卒業生で占められている。今では外部からの援助は、学校の予算の10パーセント以下にすぎない。事実、ガテマラ市内にあるキャンパスは何人かの子供への学費援助とスタッフへの援助を除いて、実質的に自立している。

I E L A はガテマラのあらゆる面での仕事、医師、弁護士、キャンパス・クルセード「ここに命あり」(Here's Life)の指導者など巾広く、人材を送り込んでいる。

学校の卒業生は高い評価を得、社会の全ての層にわたって彼らの実績を認めることが出来る。しかし、最初の助けと援助なしには、I E A L は現在のような堅固で影響力のあるクリスチャンの組織として存続することは出来なかった。今日、援助の必要はもっと小さな地域の開発計画、読み書きのクラス、そして極めて貧しい人たちのための小学校の建設や運営といった分野に広がって来ている。

3. 現地の人たちを助けることは、教会があまりにも小さく弱いために、宣教活動の出来なかった地域に出かけて行くことが出来るようになることだ。

福音がまだ宣べ伝えられていない地域の一つにラジャスタン、つまりラジャ族の土地がある。数世紀にわたりこれらの君主は、西北インドの暑い砂漠の土地を支配してきた。彼らははすの花やブーゲンビリアの匂いで満ちた庭に囲まれたぜいたくな砂岩の宮殿に住んでいる。

ハーレムに住むベールを被った女たちが、こうし作りの扉から帝王孔雀がその美しさに似合わず耳障りな鳴き声で下の庭を威張って歩くのを覗き見たり、また焼けつく太陽のもとで、男たちが敵を打破るためによろいを付けて出ていくのを見たのである。

イギリスの支配下で、ラジャ族の人たちはインドの端の遠く離れたこの地域で、力の均衡と秩序を守るためにそのままの状態でとり残されていた。

ヒンズー教徒のラジャ族を怒らせないように、キリスト教宣教師

第9章 援助した結果 145

は、ほとんど入ることが許されなかった。首都ジャイプールは四角い、平らな屋根、ほこりっぽい混雑した通りとそこを悠然と歩くラクダで、一見ベツレヘムの様に見えるかも知れない。しかしここにはイエス・キリストが紹介されたことは、未だかつて一度もなかった。

1950年、イギリスはインドを去った。それと共にラジャ族もその富と力を失っていった。何人かの宣教師がこの土地に入って行ったが、ラジャの人たちは何の興味も関心も示さなかった。

ラジャ族3千万の人たちは、自分たちの「神だな」とグロテスクな偶像、聖なる木、カースト、運命論といったものに縛られ、30年にわたる断続的なキリスト教宣教の努力にもかかわらずたったの0.1パーセントがクリスチャンで、教会も35あるにすぎなかった。

しかし神はついに、キリストの為にこの「精神的砂漠」に御言葉を宣べ伝える重荷を負った一人の人を送られた。回心の前、バラモンの僧侶となる訓練を受けていたアナンド・チャウリダは、ラジャ族の主な町の全ての人に、福音を知らせようと考えた。彼は指導力と組織力に恵まれた人物だった。

地図と具体的な計画、そして彼の同労者の名簿を添えて、アナンドはクリスチャン・ナショナルズに彼の伝道計画を提出した。彼はすでにヒンズー語の聖書学校を開き、彼の毎週のラジオ放送は人々に大きな反響を引き起こしていた。しかし、彼の伝道計画であるプロジェクト78と79（この2年間にチームが伝道した町の数によって名づけられた）を援助するのは、ラジャの人々の教会の財政能力をはるかに越えることだった。

クリスチャン・ナショナルズが、この宣教をパートナーとして

分かち合うことが出来たことは、素晴らしい経験となった。ほんの僅かなドル（一人の福音伝道者に毎月50ドル）が、考えられないような素晴らしい結果をもたらしたからである。

アナンドは、バラトプアーの町を訪問した時に経験したことをこのように書いている。

私たちがトラクトを配布し始めた時、群衆が集まって来ました。群衆は二人の若い伝道者を取り囲み、肩に掛けているバッグを引張り、陰悪な状態になった。「どうしてここで、キリストの教えを説いているのだ。この町には、だれもそんな話を聞きたいと思っているものはいない。この町には、オレたちの神様がいます。オレたちに外国の神様は、必要ない」

乱闘が始まった。そして二人の福音伝道者は地面に叩きのめされた。トラクトはほこりっぽい道路に散らばり、怒った群衆によって踏みにじられた。その日はもはや、その地域で証しを続けることは出来なかった。トラクトを拾い集め、部屋に戻った。

その夜、私たち8人は話し合った。「私たちは祈りました。そして、神からの励ましを得たのです。．．次の日、私たちは再び始めました。．．そして、また殴られました。．．彼らはこのように私たちに言いました。「この町を出ない限りオレたちは徹底的にやるぞ」．．しかし私たちは聖霊と神の御言葉によって励まされ、再び仕事を始めました」

チームの人たちは、ある地域でこのような反対に出会ったが、ある地域では、一人のヒンズー教徒から彼らの会合に招かれている。その時のことを一人の宣教者は、このように書いている。

第9章 援助した結果 147

「私たちはヒンズー教徒の寺院に行き、そこで福音を話し、イエス・キリストを讃美しました」

脅されたり殴られたり、またその土地のクリスチャンから歓迎をうけたりで、まるで「使徒行伝」を地でいくようだった。

1978年から1980年にかけて、若い福音伝道者たちは、アナンド・チャウダリの指導のもとに、157の町の75万の家を訪れた。7万の人が聖書通信講座に応募したが、そのほとんどは彼らが配布したトラクトを読んだ結果、キリストを受け入れた人だった。そのなかには、かなりの数のイスラムとヒンズー教徒の女性がいた。

1981年、チャウダリは次の段階に計画を進めた。それは、福音伝道者のチームを、最も関心を示した地域に送り込み、新しく信じた人を励まし、家の教会を作ることだった。その結果1982年の末までに、21の説教所が開かれた。彼らの最終目標は5年以内に50の教会をつくることだった。

4. 現地の人を助けることは、彼らの持っている潜在能力を、宣教のために用いることが出来るようにするためである。

ガス・マーウエイがアメリカで学んだ目的は、リベリア東部の草むらの奥深くに住む未開の部族に戻り、彼らのために働くことだった。彼はそこで成長した。14歳になったとき、母は彼を海岸の近くの町に住む伯父の所に送った。彼はそれまで縫った服を身に付けたこともなく、また、教会を見たことも、讃美歌を聞いたことも、神あるいはイエス・キリストについて聞いたこともなかった。

彼はそこでキリストに出会っただけでなく、アメリカから来た黒人宣教師、マザー・エルザ・ジョージに会った。彼女はガスの

持っている将来への可能性を見、自分の仕事の後継者として彼を教育し、訓練した。しかし、リベリアに戻ったとき、ガスの計画はまわり道を余儀無くされた。後に副大統領になったウイリアム・タルボット博士が、彼に首都、モンロビアにあるリックス・インスティテュートで教えるように、熱心に頼んだからである（そしてだれがそのような依頼を、拒むことが出来るだろうか）。

しかし、彼は人々の魂の必要、そして今だに一人で仕事を続けている86才の精神的母親の奮闘、それらをただ見ているわけにはいかなかった。4年後、ガスはもはや耐えられなくなった。そしてタルボット博士の諒解を得、格式あるリックス・インスティテュートを辞め、シノエ郡に戻った。彼は既に結婚しており、2人の子供がいたので、財政的な裏づけなしに、信仰によってこのように歩み始めるには多大な勇気を必要とした。

マーウエイ一家は自分の郷里で盛大な歓迎を受けた。ガスは、アメリカにいる友達にその時のことをこのように書いている。

何という歓迎なのでしょう。この歓迎に比べれば私の最初の時は比較になりません。皆は、私たちがここに住むために戻って来たのを知ると、私たちに最大限の愛情を示してくれました。数キロも離れた隣の村々から、毎日毎日お米、鶏、やぎ、そしてキャッサバなど贈物を持って来ました。私たちはあまりにも沢山の鶏をもらったので、入れるための特別の小屋を作らなければならないほどでした。お祝いは一箇月続きました。私たちは家族のため、残りの一年分に十分な食物を確保することが出来ました。それは、私たちの祈りへの最初の応答だったのです。

ガスには夢（人々のための）があった。それは、学校や病院、聖書翻訳そして教会建設といったものだったが、彼の夢のいずれを実現するのも、平均年収が75ドル以下の部族の人たちにとってはおおよそ不可能なことだった。

しかし、クリスチャン・ナショナルズの援助により、これらの夢は夢でなくなった。5つの小学校と2つの中学校が建てられ、職員も採用された。シノエとグランド・ゲデ郡に、100の教会が建てられた（そのいくつかは、象牙海岸にも建設された）。診療所は主な場所で開かれ、若い人に技術を与えるための技術学校が、聖書学校と同じように開かれた。一年間の短期宣教のためのプログラムや、牧師のための継続的な教育（彼らの多くは半文盲だった）が行われるようになり、オランダのTWAR基金の援助により品種改良されたココア、コーヒー、米の農園、そして家畜のためのプロジェクトが最も貧しい地域で実施に移された。

西側クリスチャン「家族」の祈りと援助なしに、ガス・マーウエイが達成したこのようなことは、想像することが出来ない。鶏とキャッサバだけでは学校を建てたり、宣教師を援助することは出来ないからである。

5. 現地の人を助けることは、世界宣教に参加するよう彼らを刺激することになる。

教会の「全体としての体」の概念は、もっともっと世界中の教会に広められなければならない。そうすることにより、丁度攻撃から顔を守るために手が顔に素早く動いたり、あるいはアドレナリンが体内を疾走したりするように、お互いの必要に反応しながら違った肢体がお互いに助け合い、応答し合うのである。

この本で私たちは、今日の韓国における驚くべき教会の成長を

取り上げて来た。ライトハウス・ムーブメント、すなわち独立教会成長運動は、韓国の長老派教会から起り、一つの宣教の在り方を示している。

ライトハウス・ムーブメントは、韓国で20年間働いて来た宣教師と現地の人たちのチームによる頭脳の産物だ。長老派教会で奉仕するヒュー・リントンと彼の同労者、キィ・チャン・アンは韓国農村部における人々の精神的な貧しさに心を痛めて来た。アンはキリスト教会のない韓国の農村部を調査し、福音を証する教会あるいはクリスチャンのいない、人口500人以上の村が、1600もあるのに気がついた。また、このことに加え、教育を受けた牧師は、報酬の良い都市の大きな教会で奉仕しているという事実も分った。孤独と文化的な生活から隔離されているということが、農村伝道を極めて魅力の無い、また宣教を引き受けるのに困難なものとしていた。

ライトハウス・ムーブメントは、クリスチャン・ナショナルズの助けを得て、韓国の都会と農村の教会をユニークなパートナーシップで結び、55人の開拓伝道者のため援助を始め、彼らの給与の3分の1をそれぞれ補うことにした。

これらの開拓伝道者は、都会の教会の建物を使った小さな聖書学校で1週間に2、3日の訓練を受け、週末は自分の教会に戻り礼拝と宣教に従事するのである。

5年後、教会は財政的に独立し、開拓伝道者を牧師として受け入れるか、あるいはその伝道者が次の場所に移っていくのを助けるかの決断をくださなければならない。ライトハウス・ムーブメントでは、教会が5年経ってもまだ自立出来ない場合、問題は財政的なもの以外にあるとみなされる。

この結果、6年後には120の教会が生れた。最初に千ドルの

補助金が与えられた教会のほとんどは、自分たちの教会堂を持つようになった。クリスチャン・ナショナルズは、30の聖書学校そして、41人の開拓伝道者と将来開拓伝道にたずさわる神学校生徒を援助している。

しかし、興味深い出来事が起こっている。それは、韓国の大きな、財政的に豊かな都会の教会が、他の国の宣教と教会成長に関心を持つようになって来たことだ。韓国の教会は、クリスチャン・ナショナルズを通し、インド、ボリビア、ブラジル、バングラデシュ、ケニアなど60人以上の現地の働き手を援助している。

韓国の教会は、世界の他の国の宣教師と一緒に祈り、情報を交換し、援助することによって、他の国の人たちとの愛の結び付きを強めている。

次の手紙は、韓国の教会からアフリカ人福音伝道者に宛てたものである。

親愛なるフェリックス・マアフォー様

主イエス・キリストの御名が崇められますように。

二週間前、貴方からの手紙を受け取りました。韓国語に訳し教会の壁にはってだれでも読むことが出来るようにしました。私たちは貴方の手紙に感銘を受けました。

ガーナの郵便状態は非常に悪いようですね。

私たちはイエス・キリストの名において、貴方を知ることが出来たのを嬉しく思っています。私たちは日曜日と共に、毎日の日の出前、そして水曜日の夜礼拝を守っていますが、そのたびごとに皆さんのため、そして貴方の国の政情の安定のために祈らせていただいています。私たちの出来る最善を尽くそうで

はありませんか。主の日は近いのです。

私たちは、アフリカのいくつかの地域で、宣教の働きを助けています。良い実を結ぶのであれば、もっと多くの活動を助けることが出来ます。

豊かな収穫を目指し、お互いに頑張りましょう。神様の祝福が豊かにありますように。

韓国より愛を込めて
キム・シウオン

これらは旨くいつている教会の例で、全ての宣教が5年以内に自立出来るというわけではない。20年かかる場合もあるであろう。極端に貧しい、あるいは福音への抵抗の激しい地域ではより長い時間が必要とされるだろう。しかし、多くの場合、外部からの助けは沈滞している教会に新しい活力をもたらすに違いない。

6章で、私たちは現地の人を助けることによって起こるかも知れない様々な困難について述べた。実際、結果はいつも勇気づけられるものでも劇的なものでもない。しばしば失敗であり、打ち負かされることもある。依頼心を生んだり物質的な動機で動かされてしまったり、また停滞や無関心も宣教に入り込んで来る。

どのようなパートナーシップであっても与えることと受けること、理解することと許すことを学ぶ必要が出てくる。ジョージ・ピーターズ博士はそれをこのように表現している。

宣教におけるパートナーシップは、神聖で抱擁力のあるものでなければなりません。それは確信で結ばれ、目的、努力、責任、権威、誉れ、非難、重荷、喜び、悲しみ、勝利そして敗北を分かち合うといったことです。（注1）

世界の他の地域に住む兄弟姉妹に、私たちの持っているものを分け与えるとき、それによって愛と団結で全ての体、すなわち教会とクリスチャンを益することになる。そしてこの一つになることこそが、今の世界に最も必要なことなのである。

第10章

宣教団体間の協力

カエザル・モレバツが、青年のための宣教団体、ユース・アライブ（Youth Alive）の指導をするため南アフリカに戻ったのは、丁度、1976年の暴動の時だった。彼は南アフリカに生れ、ユース・アライブは彼がキリストを知り、回心し、成長したところだった。ヨハネスブルクの郊外、ソエトの真中にある近代的なセンターは、何百という若者の活動の中心であり、何年にもわたって多くの新しいクリスチャンが育っていった所でもあった。

カエザルは暴動の間、センターの安全について特に心を砕かなければならなかった。というのは、デモ隊は、政府関係の「白人によって働かされている」組織と、白人と関係のある組織に対して行われ、その欲求不満の捌け口となっていたからである。

しかしユース・アライブの建物は彼らの襲撃をまぬがれた。このユース・アライブは、アフリカ・エバンジェリカル・フェロウシップ（AEF: Africa Evangelical Fellowship）の欧米人宣教師により設立され発展して来たのであるが、3年ほど前アフリカ人指導者に委ねられた。それは丁度、カエザルがアメリカで学んでいた時のことだった。

そして、彼はユース・アライブの指導者に任命され、その職務を果すため郷里に戻ったのだった。3年の間にユース・アライブは黒人社会の間に信用を培っていた。スタッフは全員アフリカ人、プログラムはすべて彼らによって作られ実施されていた。ユース・アライブとソエトの人たちの心は「自分たち」ということで結ばれていた。

しかし、一つの大きな障害があった。それは、ユース・アライブのプログラムは、外部からの援助なしに遂行することが出来ない、ということだった。

宣教師がその仕事を現地の人に委ねたとき、彼らは「カエザルに任せよう。そうすれば大切な若い人たちに証しを続けることが出来るだろう」と、言った。しかし、欧米人クリスチャンは独立した組織にお金を出し続けることを躊躇した。宣教師がこの仕事から離れれば、1万キロ以上も隔たったこの地に何が起こっても知るすべがなかったからである。

「なぜ欧米のクリスチャンたちは、現地人の役員に仕事を委ねるとき、経済的な援助まで止めてしまうのか」

これは多くの現地の人々の持つ疑問だ。そして、この疑問に対する答えに、現地の人たちが同意するかどうかは別として、下記のような理由があげられる。

1. 宣教の方針

多くの宣教団体にとって、現地での教会の自立の達成は遅々として進まず、驚くほどの忍耐を必要とされる。宣教団体は教会の財政的援助、すなわち牧師を任命し、給料を払い、建物を管理しなければならない。そして今日においても、現地の指導者は宣教師を責め「どのようにしたら良いのか我々にちっとも教えなかった」と言う。しかし教え、助けても、何年たっても事態は進展せ

ず、現地の人たちが自分の足で歩もうとしない、というのも事実なのだ。

宣教団体の指導者たちはこのジレンマに気が付くようになり、自己管理、自己啓発そして自立することの必要を強調するようになった。1954年に出版された宣教の古典「文化の接点での宣教」で、ベテラン宣教師スタンレー・ソルタウは、このように言う。

人々の社会的、経済的水準がどのようなものであっても、最初から援助なしに責任を負わなければならない、ということを強調しすぎることはない。（注1）

このように、ほとんどの宣教団体は自分たちのプログラムに「自立」の方針を加え始めた。援助の段階的な削減、そして最終的にはソルタウが「例外なしに」と言っているように、規則で援助を拒否してしまう。このことは、教会を強化し独立を助けるために必要なように見えた。結局、もし宣教師がそこでの仕事を終えるのであるなら、現地の人々が精神的にも財政的にも宣教師や外国からの援助なしで充分やっていける教会を残さなければならないのだ。

宣教団体は、アシスタント、運転手、ハウス・ボーイ、賄い人など現地での宣教団体組織のために働く人々には給料を払い続ける。しかし一旦、自分たちが設計し、計画し、実行したプログラムを現地の人に委ねてしまった後は、それらが継続出来るように経済的に助けることの正当性と必要性は認めない。これは宣教団体にとって、受入れられる方針ではなかった。

例外は、初期のころから現地の人と協力して教会を建設しよう

とした、わずかの団体があるにすぎない。

2. 前例を置く

宣教団体は、あるプロジェクトについて援助の継続が必要と判断しても、そのために前例をつくるのを恐れる。しかし、このことにはやはり矛盾がある。なぜなら、援助しているプロジェクトやプログラムはあるからである。どうしてある宣教プログラムについては援助し、他については出来ないと言えるのだろうか。援助を受けようとする現地の人の中で、混乱や嫉妬を生み「宣教師のペット」となる人たちや、そういう人たちを非難する人が当然起こって来る。世界宣教には、こういった問題を加えなくても様々な困難が今すでに山積みになっている。

3. 機構の欠如

時計の振り子は完全な自立から相互依存、つまりパートナーシップに移って来ている。現地の教会のある分野、例えば、福音がまだ宣べ伝えられていない地域への宣教、新しいプロジェクトなどには海外からの助けが必要とされている。しかし、現地の教会には他の国の援助を求めるシステムがない。

「フェイス」と呼ばれる宣教団の宣教師は、自分たちで必要な援助を集めようとする。そして多くの時間をこのためにさく。教会を訪問し必要を訴える。インフレがいたるところにはこびり、強い財源を持つ宣教師ですら彼らへの仕送りを増やしてもらわなければならないが、必要な援助を得ないままに現地の宣教に戻らなければならないことも多い。

フェイス・ミッション (Faith Mission) には、一般的に自立した現地のプロジェクトに割当てることが出来る、自由な資金がなく、またわずかの団体しか、現地の人たちの必要を知る立場の人を現地に持っていない。彼らには支援者に現地の

プロジェクトを評価し、追跡調査し、報告するシステムがない。それはスタッフのためにも、また安定した財源の確保のためにも新しいやり方、システムが必要であることを意味している。

4. 支援者への責任

通常、宣教団体は支援者からの資金の扱いについては非常に注意を払っている。受け取りはIRS規則にのっとって行われる。支援者の資金はあらかじめ決められたように用いられなければならない。現地での宣教は、宣教団体の教義と倫理基準にそってなければならない。しかし、資金が他の国の独立した宣教団体に送られるとき、これらの資金が集められたその目的に従って用いられるかどうか確認するのは難しい。したがって、8章の相互誓約で述べたようにこれらを保証するなんらかの対策が方針のなかに盛り込まれている必要がある。

以上のように、すでに自分たちの宣教師によって管理されなくなったユース・アライブの宣教のために、アフリカ・エバンジェリカル・フェロースhipが財政的な責任を取らなくなったとしても、理解することが出来る。しかし、特にユース・アライブのために指定されて献金が送られて来る場合が今でもある。この場合は勿論、ユース・アライブに送られる。しかし代表もおらず、定期的な報告、必要を知らされることなくして援助が継続して来るということは期待出来ない。

カエザルはアメリカに留学しているとき、クリスチャン・ナショナルズの代表に会った。それは、神の備えられた最も良いときだった。彼はユース・アライブの仕事のために援助を要請した。現地を訪問し、検討を加えた結果、クリスチャン・ナショナルズは、ユース・アライブが南アフリカで十分な援助を得ることが出来るようになるまで、援助することに同意した。

今日、プログラムはソエトのウイークリー・クラブで約千人の若者に福音を宣べ伝え、クワズルの支部でも同じような成果を上げている。7人のアフリカ人スタッフがクラブの指導を担う若者を訓練し、教会のユース・プログラムを助け、キャンプや修養会を実施し、そしてソエトにある全てのハイスクールとクワズルのいくつかのバイブル・クラブで証しをしている。結婚前、及び結婚後のカウンセリングはソエトの若い人たちへの大きな助けとなっている。今や予算のほとんどは自分たちの献金によりまかっている。しかし、完全に自立したプログラムとはほど遠い状態にあるのも事実である。クリスチャン・ナショナルズの助けがなかったら、「前の状態」を維持することは出来たかもしれないが、今のようなプログラムにまで発展するということはなかったであろう。

自立はしても財政的に貧しく、自分たちの現地宣教を助けてもらうためにクリスチャン・ナショナルズに来た、歴史的に古い宣教団体もまた同様である。

例えば、アフリカ・インランド・チャーチは、ギリアマ族（第3章参照）に宣教師を送るだけでなく、マサイ族とタルカナ族にも福音を宣べ伝えるため助けを求めて来た。彼らはこれらの部族のために重責を感じていたにもかかわらず、経済的な理由により宣教師を送ることが出来なかったからだ。クリスチャン・ナショナルズの資金援助により、A I Cはこれらの部族にボランティアを送ることが出来るようになった。

援助は同様に、スーダン内陸宣教会（S I M）によって設立された、西アフリカ・エバンジェリカル・チャーチ（E C W A ;

E v a n g e l i c a l C h u r c h o f W e s t
A f r i c a)からも求められた。1976年に独立したE C W

第10章 宣教団体間の協力 161

Aは、第三世界の宣教のリーダーで、ナイジェリアの様々な部族に、400人以上の宣教師を送っている。

1980年、北部ナイジェリアのモスLEM、マグザワ族（ハウガス族の分派）が福音に関心を示し始めた、という驚くべきニュースが入って来た。マグザワ族はイスラムの教えを受け入れてはいなかった。事実、彼らの名前は「イスラムからの逃亡者」を意味している。彼らはキリスト教宣教師を自分たちの所に送って、イエスについて教えてくれるように依頼して来た。ECWAの牧師たちはその願いにすぐに答え彼らの宣教プログラムを作った。母教会を離れ、家族を北に残し、教会を建てるに十分な期間滞在するため、1980年、58人のECWA聖書学校卒業生全員も生活状態が最も悪いハウサ村に行くことを希望した。しかし、ECWAの財政状態は、限界に達していた。そして、SIMを通して、クリスチャン・ナショナルズに助けを求めて来た。

数年前から、クリスチャン・ナショナルズはSIMと手を結びイボ族のなかでECWAの教会を助けて来た。1960年代の内戦の後、田舎は荒廃し、人々は貧しさに苦しんでいた。外部からの援助が、イボ族の教会が戦争による荒廃から立ち直るのに必要だった。

いったん勤勉なイボ族が自分たちの足で立てるようになると、資金援助は必要となくなり、援助は他の目的に使われるようになった。

SIMは彼らの宣教の結果生れた現地宣教の自立を助け、伝統的なフェイス・ミッションとして、貢献して来た。しかし、1976年、SIMは90年前に始めた宣教の全ての責任をECWAに移した（そしてその作業はすでに1954年から始まっていたものだ）。

ヘラルド・フーラーは彼の著書「ミッション—チャーチダイナミック」で、ECWAとの関係でSIMの現在の財政方針をこのように書いている。

「教会は自立すべく努力して来た。牧師たちだけを考えるならば、それはもう何年にもなります。特別の場合を除いてこれは常にSIMとECWAの方針でもあります。．．．教会は牧師を援助し、宣教師を送っています。彼らはECWAにおけるラジオ宣教にも貢献しています。自国語による聖書学校の援助も始めました。しかし援助の必要なプロジェクトはまだ沢山あります。そして教会（そのほとんどは農村にあります）はまだそれらのプロジェクトを助けることが出来ないでいるのです。．．．もしかしたら、自分たちの宣教師と牧師への援助に影響が出てしまうからです。（注2）

SIMのように、主な教派の多くが自分たちの教会に自主性を与えてからだいぶたつ。そして、その多くは若い教会と未熟な組織を財政的に助けている。

他方、フェイス・ミッションの多くも、若い教会が助けが必要で、それなくして彼らの宣教の機会を生かすことが出来ないとき程度に応じた助けを提供している。

この面での革新団体である、ラテンアメリカ・ミッション（LAM; Latin American Mission）は教会に自主性を20年前に与えた。1971年、コミュニティ・オブ・ラテン・アメリカ・エバンジェリカル・ミニストリーズ（CLAEM; Community of Laten American Evangelical Minis-

tries) が生れた。これは出版、神学教育、そして宣教に従事する13の独立した組織のグループによって設立されたものである。LAMは「ラテン・アメリカ宣教のためのサービス機関」と自らを位置づけ、援助にともなう支配、管理が入り込まないようにしている。

前CLAM事務総長ポール・プレテェズは、現地の人たちが自尊心を傷付けられたり威厳を損ねたりすることなしに外国からの援助を受けるためには、次のことがはっきりしていなければならないという。

まず、教会、組織のなかで、管理は自分たちの手にあるということがはっきりしていなければなりません。それであって初めて、自分たち自身の判断で外国からの援助を求めることが出来るのです。(注3)

もちろんこれには、ある種の危険がともなう。「ミッションチャーチダイナミックス」で、ヘラルド・フーラーは「LAMのイメージは、教会のコントロールがない自立した宣教団体の故にいろいろな教義の背景を持つ教師を神学校に招くことになった。そのためLAMの強力な福音宣教団体としての使命は、その教義の重点がはっきりしないことにより脅かされることになった」(注4)と言う。事実、1981年に教義的な問題が職員の間で起こったため、LAMはラテンアメリカン・バイブル・セミナーと分れなければならなくなった。

このような危険は、多くの伝統的宣教団体にとって、自立した教会や組織を援助することを躊躇させる一つの原因となっているかもしれない。にもかかわらず、やはり援助しなければならない

という方向ははっきりしているようである。そして、自分たちに資金がない、あるいは教会の方針で直接援助が出来ない、あるいはおかれているなんらかの状況等で出来ない場合、クリスチャン・ナショナルズといった専門の宣教団体を通して援助をするようになって来ている。

宣教団体であろうと教会であろうと、援助の意志があるならばクリスチャン・ナショナルズは全ての関係者あるいは団体と密接な連絡を取り、必要な橋渡しをすると共に、どのようにしたらその目的を達成するのに最も良い方法が見つかるかを検討し、アドバイスすることが出来る。

第11章

どのように分かち合うか

現地の宣教を援助し、分かち合うことの意義を認めたなら、次のステップはこれが意味深い参加となるよう、個人あるいは地方の教会を通してどのようにしたら良いのか、その道を探すことである。

カナダのトロントにあるポール・スミス博士のピープルズ教会は、この点について長い間はっきりとした確信がなかった。

現地人のクリスチャンについて、私はあんまり確信を持ってなかったのです。ヨーロッパや北アメリカの宣教師だけが本当の意味での福音を宣べ伝えることが出来る、と思っていたからです。現地の人にお金や責任を与えるなら、彼らをスポイルするだけではないかと恐れたのです。私は彼らが本当に信頼出来るかどうか分かりませんでした。

1972年、スミス博士はカリフォルニア州マウント・ヘルモンで開かれた会議にスピーカーとして出席した。プログラムの中

で、クリスチャン・ナショナルズから援助を受けている現地の人
が話をしたが、「私は驚きました」と、ポール・スミスは言う。
「現地の指導者を個人的に知って、神様が彼らを用いられている
のに深い感銘を受けたのです」

スミス博士は翌年ピープルズ教会の宣教会議に、ポール・チャ
ンと何人かの現地の人を招待した。ポールと他の現地の人との証し
は教会員の心を動かし、今までにない高額な献金の額という結果
となった。このとき以来スミス博士は、ポールのことを「百万ド
ルの人」と呼ぶようになった。彼らは欧米人宣教師の汗の結晶で
あり、しかも今宣教師の出て来た国で福音の光を輝かせている。
そしてその事実、教会の人たちは興奮したのである。そしてそれ
は、教会員の宣教へのコミットメントの原動力となった。それ
以来、ピープルズ教会では毎年の会議に現地の人々の出席を求め
るようになった。数年の間にピープルズ教会の宣教予算は、60万
ドルから100万ドルになり、教会はクリスチャン・ナショナル
ズを通して、97人の現地の宣教師を助けるようになった。そし
てそれは次の年に112人に増え、1981年には150人以上
の現地の人々がクリスチャン・ナショナルズを通してピープルズ教
会の家族の一員となった。

なぜ、ポール・スミス博士は、自分の見方を変えたのであろう
か。

ほとんどの宣教団体は、アメリカと現地のクリスチャン指導
者の間にある、大きな文化の溝を埋めることが出来ないでいま
す。．．．しかし「クリスチャン・ナショナルズ」は違います。
現地のクリスチャン指導者と彼らが育った文化を公平に、正し
く理解し、また私たちの間の文化の違いを、寛大に扱っている

第11章 どのように分かち合うか 167
ように感じます。過去クリスチャン・ナショナルズは、私たちと現地の人の間に問題を起こしていません。

スミス博士の好意的な言葉以来、ピープルズ教会は現地人宣教者を教会の宣教役員に加えた。宣教のための予算はほとんど150万ドルに達し、毎年の宣教会議は宣教プログラムを評価する上での一つの基準となった。

組織の大きさや会員の平均収入がこのピープルズ教会以上であっても、この教会の宣教の水準に達している教会は少ないのではないか。宣教に使命をもっている教会は、少なくとも現地宣教のために予算を別にしておくべきである。

牧師で著述家でもあるゴードン・マクドナルドは、クリスチャン・ヘラルド誌のインタビューで、このように述べている。

私は、この国の多くのクリスチャン、あるいは教派の人たちは、現地の人をより良く助けることの出来る専門的な宣教団体に、自分たちの援助を委ねていくようになるのではないかと思います。(注1)

紐付きでない援助には、特別の愛がいる。それは干渉あるいは支配の代わりに、彼らを導いている聖霊を認めるといふある種の信頼が要求されるからである。それは会ったこともない人たちのしている仕事を援助するという、新しいタイプの宣教へのコミットメントなのだ。

現地のクリスチャンへの援助は増えて来てはいるものの、多くのアメリカの教会はまだ現地にいる欧米人宣教師の数によって、福音が宣べ伝えられているかどうかの評価をしがちである。そし

て現地の指導者を援助するより、自分たちの教会から宣教師を送るほうが、より容易に資金を集めることが出来る。召命に応じ宣教師となる自分たちの一員を助けることの大切さは言うまでもないが、「世界家族」の一員としての責任をはたすことも、私たちのコミットメントに必要なバランスを加えることになるのではないだろうか。

今日、ますます多くの教会がクリスチャン・ナショナルズに、現地の宣教に参加する道と、現地の説教者呼んで彼らの話を聴く機会を求めて来ている。

人と人との結びつき

何千という人が宣教会議や聖書集会に出席し、またラジオや宣教に関する出版物で個人的に現地のクリスチャンのパートナーになった。

例えば、南カリフォルニア州サムターに住むD. B. 氏は15年以上も現地の人を援助している。彼はどのようにして援助を始めるようになったのか。

私は香港のアンドリュー・ソン博士の話を聞いた後、一人の現地の人を援助するようになりました。それは私たち家族が宣教に参加出来るようになるため主が備えられたものでした。現地の人たちがサムターを訪問したとき私たちは彼らを個人的に知り、お互いに祝福されました。その時、彼らは私たちの家にも泊まりました。

カリフォルニア州サンノゼのロイス・Bはリベリアから来たガ

ス・マーウエイが話すのを聞いた。そのときに「アフリカ人のようには、かゆがっているアフリカ人をかくことは出来ません」といったその言葉に心を動かされた。そして、ロイスは現地の働き手を援助し始めた。今ではその現地の人は自立し彼女は別の現地の人を助けている。

しばしば、スポンサーあるいは教会の牧師は、現地の人を訪問し、感激して戻って来る。ある教会では、クリスチャン・ナショナルズを通してフィリピンの宣教を考え、そのため牧師と宣教委員会の委員長を夫婦で現地につかわした。彼らは農村部での宣教状況を見るため旅行し、開拓伝道者や訓練中の学生と話し、役員に会い、どのようにして助け合えるか話し合った。その結果、教会は長期に渡る資金援助のコミットメントをし、お互いの関係は発展していった。このコミットメントはクリスチャン・ナショナルズが間にたってまとめたもので、お互いの良い関係を発展させるのに貢献した。

教会を通して援助するにしても、個人またはグループ単位で現地の働きを援助するにしても、次のような基準が守られる必要がある。

1. 現地で公認された宣教団体を通して、あるいはそこで保証された現地の団体あるいは人を援助する。
2. 「単独で働いている人」への援助は避ける。実りのない援助になるか、あなたの善意を個人的に利用する結果となるかもしれない。
3. 定期的な援助をコミットメントをする。現地の指導者たちは私たちと同じように、月々の支払いや家族への責任があり、固定収入を必要とする。私たちが援助を続けられなくなった場合でも援助を続け、コミットメントを続けること

との出来る、責任ある機関を通して援助することが必要である。

4. 現地の人に資金を送る場合、アメリカではIRSに明確な規定があるのを知らないクリスチャンが多いようだ。政府に登録してある宗教団体（教会あるいは宣教団体）への個人的な寄附は、その団体の宣教の一環として使われるのであれば、税金が控除される。
5. 現地の働き手に励ましの手紙を書く。あなた自身の生活を知らせ、祈って貰いたいことがあれば書く。この「結びつき」は、お互いにとって大きな祝福の源になる。しかし、英語を読んだり書いたり出来ない多くの現地の人がいるので、この場合は、翻訳に時間がかかることになる。（クリスチャン・ナショナルズでは、個人どうしの手紙のやりとりより、手紙の往復が確かとなり、またお互いの理解を助ける仲立ちとなりうる、宣教団体を通して行われるよう勧めている）。
6. 贈物はもちろん感謝である。しかし、お金や贈物をする前にその宣教団体に連絡し、送って良いかどうか確認する必要がある。お金を送ることは難かしいかもしれない。また贈り物は税金がかかる場合もある。欧米で一般的に使われている物が、他の国では使われていない、ということもあり得る。
7. 現地の働き手を援助し続けることが出来なくなった場合、その宣教団体に必ず連絡する。規則的な援助が来なくなったのに気が付くまで数ヵ月かかることがあり、その間に、他のスポンサーを見つけることが出来たかもしれないからである。

第11章 どのように分かち合うか 171

8. あなたが自分の家族にするように、現地の働き手のために規則正しく祈る。この祈りは貴重な体験となるであろう。

この祈りが現地の人の宣教を助けるのである。

前の章で書いたように、現地の人のために必要な援助額は国によって異なる。また同じ国であっても村や農村部と都会では違って来る。一人のスポンサーで、一人の現地の働き手、あるいは神学校の生徒を完全に援助することが出来るかもしれないし、欧米人宣教師を援助する場合と同じように、他の人と分かち合うことになるかも知れない。援助と共に現地の宣教には、建物、輸送、文書、神学校、器具などにも、特別な資金を必要とする。このような現地の必要に対し、こまやかな対応を示し責任を払うことによって、援助の効率と効果に大きな違いをもたらす。

経験を積んだ宣教団体であれば、プロジェクトを検討し、他の国に資金を求める前に現地で必要な援助が手に入るかどうかの可能性を調べる。このような宣教団体の指導に従うのが賢いと言える。クリスチャン・ナショナルズは、宣教の必要、あるいは働き手の個人的な必要であっても、どのようなプロジェクトも現地の役員を通して行い、援助を個人的に受け取るということのないようにし、人間的な誘惑に陥らないように注意している。

現地の人を援助している宣教団体の多くは、現地での宣教にどのくらい費用がかかるか知っている。クリスチャン・ナショナルズは現地との通信、資金の移送などの経費を見込んで、働き手に対して最低、月25ドル、聖書学校の生徒には20ドルとしているが、普通は月当たり、100ドルを目安としている。

働き手は、あなたが希望する国から選ばれる。あなたが現地の人を毎月援助することを決めると、個人あるいは家族の写真と一

緒に信仰の証し、そして年3回の現地報告書あるいは手紙を受け取ることになる。

今時点でクリスチャン・ナショナルズは福音宣教、開拓伝道、教育、青年伝道、幼児伝道、開発、救済など、おおよそ50ヵ国約1500人の働き手と聖書学校の生徒を援助している。

もっと援助するには

宣教についての本を読むような人は、すでにいろいろな宣教プログラムに十分関与して来ているのではないかと思う。したがって、自然な疑問は「私はすでに十分やっています。これ以上出来ません」ということではないかと思う。

このような疑問に対しては「私たちの持っているものを、今一度、見直そう」ということだ。私たちは経済的な負担と「富への誘惑」に極めて敏感な世界に生きている。そして私たちは「自分が先」と言う自己中心の世界に住んでいる。このことを自覚することなくして、私たちの望みと欲望は「必要」という言葉でほとんど理由付けされてしまう。

欧米で1980年に行われた600人を越えるビジネス・マネージャーに対するアンケート調査には、次のような質問が含まれていた。(注2)

ほとんどの人は通常、次のような関心を持っている：

- a. 他の人を助けたい
- b. 自分の必要を満たしたい
- c. 両方の組み合わせ

第11章 どのように分かち合うか 173

67パーセントの人は「b」にまるをした。これは聖書の教え「何事も党派心や虚栄からするのではなく、へりくだった心をもって互いに人を自分よりすぐれたものとしなさい」（ピリピ2：3）に反している。

世界には、多くの地域で私たちの信じられないような貧しさがある。

世界救援機構（World Relief）によると、世界中に身寄りも住む家もない1600万の孤児や難民がいる。

毎日6万の人が飢餓で死に、10億（米国の人口の4倍）の人がいつもお腹をすかせている（国連開発プログラム）。

地球上の4分の1の人たちの収入は、週3ドル以下だ。経済的な不均衡は、アメリカ合衆国と第三世界のGNPを比べると次のようにひどく開いているのが分る。

一人当りのGNP（注3）

北アメリカ	12、405ドル
ラテン・アメリカ	2、063ドル
アフリカ	783ドル
南アジア（インド、バングラデッシュ、 パキスタンを含む）	251ドル

新聞、テレビでほとんど毎日のように報道されているので、この人たちの貧しさを知らないはずはない。にもかかわらず私たちの多くは、毎日の生活の営みに疲れ、物質的な生活の中に埋没することによって、彼らの痛みを自分の痛みとして感じないで過ごしてしまっている。

インドで医療宣教をしているポール・ブランド博士は、一時休

暇で自分の国に戻って来た時、このように言った。

インドでは年3ドルでライの患者をみていました。にもかかわらず私たちは資金の不足で、十分な患者をみることは出来ませんでした。アメリカに戻るとここでは、100万ドルの教会体育館、新しい教会堂の建設のための委員会、また教会員のための税の軽減の勉強会などが開かれていました。私は皆に、マドラスにいる婦人で、適切な医療を受けることが出来ないままに腫瘍が大きくなっていき、ゆっくりと死に向かっている私の患者のことを話さないわけにはいきませんでした。おのおのの細胞が全体の必要に心をくばってこそ、全体の健康を保つことが出来るということをご覚悟下さい。（注4）

フランク・ガエベリンもこのように言う。

預言者アモス以上に、富の不正な使用に対する強い警告を聞いた事はありません。預言者たちの証言は、偶像を崇めることとその結果が何なのかを私たちに警告しています。（注5）

キリストは毎日飢えで死んでいく人々を哀れみ、これらの人々を忘れてはいない。世界の4分の1の人が貧困にあえぎ、他の4分の1の人が信じられないほどの豊かさの中で生活しているのである。

ジャマイカの古代の建物にこのような落書きがある。「貧しいものは、これ以上取ってはならない」。これは私たちへの警告でもある。

平等と正義を達成する鍵は、私たち自身にある。私たちが与えられた仕事を十分に成し遂げるには、エネルギー、滋養物が私た

第11章 どのように分かち合うのか 175
ちの体全体、すなわち、全ての肢体、全ての関節に行き渡っていない
なければならない。

初期の教会は、このことをよく知っていた。エルサレムの信者は自分たちの持ち物を売り、他の貧しい信者に分け与えた。その結果「彼等の中に乏しい者は、一人もおらず」（使徒4：34）「家族のきずな」は非常に強かった。

また、パウロは彼らの兄弟姉妹が空腹であるにもかかわらず、食べたり飲んだりしているコリントの人たちを、このように叱っている。「あなたがたは、．．．貧しい人々をはずかしめるのか」（コリント第一11：22）

別の手紙で彼は、「等しく」なるため富を分かち合うように促している。彼らのキリストへの愛を認めたくえて、パウロはやさしく、キリストは富むことが出来たにもかかわらず私たちのために貧しくなられたことを思い起こさせた。

その結果、エルサレムの貧しい人たちに分け与えられた援助の物資は、キリストにあって文化の違いを越えた交わりの見事な実証となった。

宣教の歴史は、宣教の「最前線」にいる人たちと彼らを支え「手を携える」多くのクリスチャンの信仰と犠牲を語ることなくして十分に言い表わすことは出来ない。

クレイ・クーパーは彼の本「世界を勝ち取る」で、宣教の働きに直接かかわっていたにもかかわらず、健康を害して国にもどらなければならないようになった若いカップルについて書いている。このカップルは外国での宣教のかわりに、神の国を宣べ伝えることの出来るよう献金することを決心したのである。

彼らの父親は歯医者だったが、副業として無醗酵の聖餐式用ワインを作っていた。2人は父のこの「趣味」を受け継ぎ、世界宣

教の夢を実現しようとした。彼らはこれを、億万ドルのビジネスにしたてあげ、売上げを宣教に献金した。グレーブ・ジュースのウエルチ (Welch) がそれで、家族の名前をそのまま使っている。

多くのクリスチャンは、極貧に打ちひしがれた人たちのため何かをしなければならないということを知っている。しかし賄賂、どん欲、汚職、といった社会悪や、地理的な隔たりといった障害を前にして、無力感に襲われてしまう。その結果、何もしないということになってしまうのである。

1980年、ロンドンで開かれた簡素な生活のための国際協議会では、「あなたの簡素な生活は、貧しい人にどのように寄与するのでしょうか」という問かけで、問題が提起された。

多国籍企業、政治、不正、こういったことがしばしば極貧の中で生活している、数億の人たちの生活を変えることを困難にしているということを認めながらも、この問題について協議会はこのように誓約した。

私たちは簡素に生活することにより、もっともっと与えることの出来るよう私たちの収入と支出を今一度見直します。

もしこれが単なる提案でなく、個人的な生活信条となるものであるならば、豊かな人から貧しい人に必要な物が流れるその道がなければならない。今日多くの人は西側諸国内で頻繁に寄附のやりとりをしている。1979年、アメリカ国内だけで約200億ドルのお金が教会や宗教団体に寄附されている。(注6)

しかし宗教関係の寄附の96パーセントが英語を話す世界、すなわち全世界の人口のたった6パーセントの人たちにのみ使われ

第11章 どのように分かち合うのか 177

ている。言いかえると、私たちの献金や捧げ物の4パーセントしか、残りの世界の94パーセントを占める兄弟姉妹には使われていないと言える。

その結果、インドの医療チームのカップルのように、古いスクーターに乗り、妻の膝の上に乗せた黒い鞆の中に全ての医療品を詰め込んで村々を回らなければならない。彼らは夕方村から帰って来て「お金を払うことの出来る」患者の支払う1、2ドルによって、やっと自分たちの生活を支えているのである。．．．そしてジャマイカの牧師は、自分たちの家族を養うために働かなければならず、その結果、宣教に当てる時間はほとんど無くなってしまふ。．．．福音がまだ伝えられていないバングラデシュのチタゴング・ヒル地区の数千の子供たちは学校に行っていない。そしてこれからも、月55ドルの給料を先生に支払うことが出来るようになるまで、その状態は続く。．．．そして、ガーナの働き手たちは他の地域に行くガソリン代がないため、彼らの宣教プログラム「全ての人を新しい生活に」(New Life for All)をクマシ周辺に制限せざるをえない。．．．そして、．．．そして、．．．

この本を読んでいる人で、毎月の生活から25ドルを捻出出来ないという人は少ないと思う。このお金があれば、多くの第三世界の国では聖書学校に行くことが出来る。ヒンズー教の村では一人の宣教師が働く一箇月分の給料、バングラデシュでは先生の給料の殆ど半分に相当する。

努力すればもっともっと私たちのぜい肉を取ることが出来る。そしてそれがクリスチャンの宣教のために使われることを求めるのであれば、私たちの捧げるものを現地で有効に使うことの出来る真面目で信頼出来る組織はたくさんある。

ロナルド・サイダーは皆がこの働きに参加するよう、このように勧める。

イエス・キリストの教会は、今日、世界で最も普遍的な体です。私たちに必要なのは、私たちが礼拝する方に真実に服従するということです。服従するということは従うということの意味します。そして主は貧しい抑圧された人たちの中に住み、苦しんでいるこれらの人たちのために正義を求めています。私たちの時代にあっては主の歩みに従うということは、シンプルな個人生活を意味します。また、貧しい人の行う礼拝と同じように、私たちの教会も変えられなければならないということの意味します。それは値を払わなければならないことで、教会員のコミットメントが必要とされます。私たちは今、そのような信仰と勇気を持っているでしょうか。（注7）

現地にでかけて行く

インター・バースティ・クリスチャン・フェローシップのディレクターでウルバナ81の立役者、ジョン・カイルは短期間の海外宣教に参加する若い人は現地の指導者のもとで、クロス・カルチャーの経験を持たなければならない、と強く主張する。

数年前までこれは不可能なことだった。しかし、今日の第三世界の教会には、献身した賜物のある指導者が沢山いるので、短期長期を問わず熟練した欧米人クリスチャンの働き手の助けを歓迎するであろう。

一般的には短期宣教師は西欧人宣教師と働くが、宣教団体によっては現地人指導者のもとで働く機会を提供する。アフリカ・イ

ンランド・ミッション(AIM)、スーダン・インテリアー・ミッション(SIM)のような宣教団体は、現地の教会のもとで働くよう宣教師に求める。そして短期宣教師に対しても同じことが出来る。

宣教団体によっては、現地の宣教団体のために働く人材を派遣する。例えばOMFは、シンガポール聖書学校で教えるために人材を派遣している。この聖書学校は東洋で最も高く評価されている聖書学校の一つだ。

O. C. 宣教団体では、インドネシア・エバンジェリカル・セオロジカル・セミナリー校長、クリス・マランティカの依頼でそこに二組の夫婦を派遣している。宣教師が現地の組織のために働いているということは、インドネシアの外国宣教団体に対する規制の強化があっても、そのまま現地にとどまることが出来るという可能性がある。

現地の宣教団体と一緒に働くことを主な目的としている宣教団体の一つに、ラテン・アメリカ・ミッション(LAM)がある。LAMが行なっている宣教は現地の役員によって管理され、LAMは現地人役員の依頼にもとづいてアメリカ人を派遣する。宣教師はその宣教団体と3年ないし4年の契約を結び、必要に応じてその期間の終わりに更新する。

LAMは必要に応じて組織の財政的な援助をする。しかし個人的な援助はしない。LAMの改革は、傷あとを残すことなしにはなされなかった(163頁参照)。が、基本的に宣教団体と現地人指導者はその結果に満足している。1人のLAM役員は言う。「古い組織では出来なかった信じられないほどの沢山の事を成し遂げました」、と。

宣教師あるいは短期宣教師として現地人の指導のもとで奉仕す

るには、クロス・カルチャー・コミュニケーションの特別の訓練を受けなければならない。他の文化の中で働くだけであれば、たかだか欲求不満をつのらせることだけですむが、現地の役員のもとで奉仕するとなると、それがお互いの利益となるよう自分の態度と生活様式を相手に適応させることが必要となる。

現地の宣教団体と働くための基本的な指針としては：

1. カルチャー・ショックを受入れる

最初の数日間はどうなにも格好良く、面白く、また素晴らしく見えても、文化の違いを受入れる準備が出来ていなければ、すぐにいらいらしたり奇異に感じたりするようになる。

例えば、教会は夏休みを利用して宣教活動の一環として、若い人たちをいろいろな国に送る。この場合、多くの指導者は男女のカップルにした方がより安全だと思う。しかし、現地に着いてみると多くの第三世界の国では、若い男と女が一緒にいるというのは好ましく思われていないということを知って驚かされる。そして非常に注意深く行動しないかぎり、不道德とみなされてしまう。自分たちが好ましいと思っていることが、他の文化ではそうではないということに気が付かないと、せっかくの宣教の効果は損われてしまう。

2. 奉仕の気持ちを大切に

求められたことは何でも謙虚にすることが大切だ。自分のほうが良く知っている、国ではもっとうまくやっている、といった印象を与えないようにする。

地理的に近いこともあって、多くの人たちがアメリカからメキシコに行く。しかし、メキシコのある聖書学校の指導者は、これらの人たちは奉仕に来たのではなく、観光や遊びに来たという印象をしばしば受けると打ち明ける。それと反対に休みの

間に、寄宿舎にペンキを塗ったり、お手洗いをきれいにし、キャンパスで長時間一生懸命働いた人たちについては、今でもよく話がでる。

3. 少なくとも一人の現地の人と暖かい、密接な関係を発展させる。

短期の任務ではこのことは無理かもしれない。特に言葉の問題があるとき。しかしそれはあなたが違った文化と人々の心の「中」に入って行く唯一の方法でもある。「私は学びたいのです。何か間違ったことをしたら教えて下さい。もし私がヘマをしたら正して下さい」と言うことを恐れてはいけない。

時折、西欧の人の方が、現地の人と親しくなるのを妨げている場合があるのは残念である。アフリカにつかわされたある短期宣教師は、彼女が教えている女学校の西欧人スタッフから、彼女が何時も生徒たちに「まつわりつかれ」、休みの日すらも生徒たちと過ごしている、と非難されたと言っている。

その一方で、短期間の宣教師にとっては遠慮がなく、居心地が良いといった理由で、自分たちと同じ西欧人宣教師と一緒にいたいという誘惑にかられるかもしれない。一般的に、現地の人たちは外国人との特別な友情関係を求めようとも、自分自身を売り込もうともしない。しかし一度現地の人との間の垣根を乗り越え、心を開き、生活を分かち合うならば、その経験はあなたの人生にとって最も貴重なものとなり、キリストにあって一人の兄弟、姉妹を得ることになるだろう。

あなたが現地に行き宣教に参加するにせよ、自分の持っているものを捧げることによって現地の人々の召命を助けるにせよ、共に働くことが「家族のみずな」を強めることになるのである。

第12章

私たちの参加の意味

クリスチャンにとって、主に委ね、神様の御心に従って歩いている人を見ることより大きな喜びはない。

これこそが、私たちが現地の宣教に参加する大きな意味であり結果なのだ。そして私たちはこの本で、パートナーシップは神の計画であることを見てきた。

パウロがコリントの人たちに、聖徒たちを助けるため彼らに出来ることをするように勧めたとき、彼はその利益を詳しく述べ、彼らが寛大に与えるならそれに従って大きな報いがあるだろうと言った。

神の家族のために真心から捧げた人に対する豊かな報酬は、

こうして、あなたがたはすべてのことに豊かになって、惜しみなく施し、その施しはわたしたちの手によって行われ、神に感謝するに至るのである。なぜなら、この援助の働きは、聖徒たちの欠乏を補うだけではなく、神に対する多くの感謝によってますます豊かになるからである。すなわち、この援助を行なった結果として、あなたがたがキリストの福音の告白に対して

従順であることや、彼らにも、すべての人にも、惜しみなく施しをしていることがわかってきて、彼らは神に栄光を帰し、そして、あなたがたに賜わったきわめて豊かな神の恵みのゆえにあなたがたを慕い、あなたがたのために祈るのである。

コリント第二 9：11-14

それでは、私たちが会う機会もない、そして私たちと違う言葉話す他の文化の中に住む人を援助するとき、どのようにして神はこの約束を満たされるのだろうか。

ここに一人のアメリカの学校の先生と韓国人開拓伝道者の文通の抜粋がある。手紙は他の韓国人牧師によって韓国語から英語に訳されたもので、英語は完全ではないが状況ははっきりと私たちに伝わって来る。

親愛なるスポンサー

クリスマスの贈物、感謝して受け取りました。老人たちに玄米パンとスープを御馳走することが出来ました。皆、感謝で一杯でした。...

ヨン・タエ

ヨン・タエの上司はこの状況をもう少し補足して、次のように手紙に書いている。

私たちはヨン・タエ夫婦を僻地の山あいに訪ねました。... 教会の建物は出来上がっていました。しかし写真のように牧師館はもっと手を入れる必要があります。... およそ30人の大人が礼拝に来ます。... 3年前、彼らがここに来る前はクリス

チャンは一人もいませんでした。

ヨン・タエのスポンサーは自分の写真を送り、自分自身について書き、その手紙の終わりにこのように付け加えた。

ちょうど4年前、私の主であり、救い主であるキリストを知ることが何なのかを知りました。それ以来、クリスチャンであることが素晴らしいことになりました。．．．私は何時もあなたとあなたの奥さんのことを祈っています。キムさんと彼の花嫁のために（ヨン・タエが手紙に書いた）キリストがこの結婚を祝福されるよう祈ります。どうか私が心と精神と霊の全てで主を愛することの出来るように、私のためにもお祈り下さい。

ジョアンナ

しばらくたって、ジョアンナの贈り物で牧師館に窓が取り付けられた。

お手紙と贈り物ありがとうございました。外国からの初めての手紙でした。．．．あなたの手紙を見たとき、涙がこぼれました。そしてあなたを知ることが出来たのを主に感謝しました。

あなたの助けで家を修理しました。家の修理が終わったらあなたを招待出来たらどんなに良いのに、と思います。

教会員一同あなたの手紙と写真を見て喜び、感謝しました。クリスチャンでない人もきっと同じ印象を受けたことでしょう。．．．私は主に祈ります。あなたが主の力強い僕であるようにと。

そして数ヵ月後のジョアンナの手紙には．．．

あなたのお手紙を受け取り、また家を完成させることが出来るのを知って本当に嬉んでいます．．．

私たちが世界のどこにいようと、キリストが私たちを愛で結び付け、クリスチャン以外の人に証し人として用いて下さっているのを感謝します。

最近の休暇と新しい学期についての抱負（彼女は17年間、学校の先生をしている）を書いた後、彼女はこのように締めくくっている。

私のためにどうか祈って下さい。私がもっともっと質素に生活することが出来るように、そして主の働きのためにもっと捧げることの出来るように。

こういったことは、現地の人との働きに参加することによって生れるもう一つの利益でもある。生活に必要な物すら満足に持つことが出来ないでいる現地のクリスチャンと親しくなると、私たちはぜいたくな生活をそのまま続けることが出来なくなる。

独身の学校の先生であるジョアンナにとって、生活を切りつめ冬を向える前に韓国のヨン・タエの家の窓を取り付ける助けをしたということは、彼女にとって大きなことだった。

アフリカのギリアマ族の働き手に援助している人たちは、たったの100ドルがトタン屋根からの雨水を集めるタンクになり、乾期に最も近い川まで毎日2マイル歩かないですむようになる、ということを知った。そして援助している人たちは、わずかの生

第12章 私たちの参加の意味 187

活費を切りつめることにより、現地の人たちが容易に水を得ることの出来るよう助けることが出来たのを喜んだ。

私たちの「豊かさ」の中から少し切りつめることにより、少しでも貧しい人を助けることが出来るならば「家族の一員」として共に生きる私たちの生活のあり方は、論争のための学説以上のものになる。あるスポンサーが書いているように、「人に投資することは、石油、公共事業、不動産に投資するよりもっと素晴らしい」ことなのである。

生活は単に物資の所有や管理、またそれらを使うための優先順位だけでなく、私たちの時間の使い方にまでも及ぶ。私たちの価値は時間をどのように使っているか—すなわち仕事での残業、付き合い、パーティー、家の手入れなど—によって決められる。

韓国の教会は、祈りを優先させて来た。韓国動乱以来、祈禱会のために教会の扉が開かれている。毎日朝早く、教会の鐘は祈りのために人々が集まるよううながす。この熱心な祈りと、教会の急速な成長との間には強い相互関係があることに疑いの余地はない。

ジョアンナにヨン・タエが皆で毎日彼女のために祈っていると手紙に書く時、ジョアンナはこれが役に立たない決り文句ではないのを良く知っている。

現地の人を援助したとしても、全ての人が詳細な手紙を受け取るとはかぎらない。多く人は私たちと同じように紙の上に自分自身や、自分のやっていることを表現するのは難しいと感じるであろう。また多くの人たちはその文化的な背景により、自分自身を誇っているとは思われたくないの、西欧では当然と期待されていることについてすら書くのをしばしば躊躇する。

しかし、ひとたび私たちが現地の宣教を援助し、祈り始めるならば、私たちの地平線はどんどん広がっていく。その国の政治的・軍事的な危機は、私たちの祈りのポイントになり、今までにない熱心さで援助している国の情報に目を留め、読み始めることになる。

このことこそ、自分自身と他の神の家族との絆を深めるとき何が起るか、ということなのだ。その国の政策やその変更そして天災などが、どのように自分の家族の一員に影響を及ぼすか、気遣われることになる。あなたの愛する誰かが休暇先で竜巻か洪水にあったのを知ったならばどうだろう。あなたの家族が住んでいる所の天気予報ですら特別な関心を払うのであれば、通常でない出来事が報道されればすぐに電話で安否を確認するであろう。

ちょうどそのように、私たちが世界宣教に参加することは、世界の出来事に私たちが敏感にする。そして私たちは、その国とその人々について出来るだけのことを知りたいと思うようになるであろう。

子供たちをもまた「世界のクリスチャン」になるよう訓練することが出来れば、なんと素晴らしいことだろう。多くの家族にとって、第三世界の子供たちを援助するのは、彼らが援助を必要としているということだけではなく、自分の子供が彼らのために祈り、海を越えた「兄弟姉妹」を理解するようになるためである。

現地の人々がスポンサーの家庭を訪問する機会があれば、それは特別な祝福になる。もちろんこういったことはめったにないだろう。しかしまったくないわけではない。このような機会はあなただけでなく、関心を持つまわりの全ての人にとっても素晴らしい経験となるであろう。

第12章 私たちの参加の意味 189

異なった文化に最初に出会う時、しばしばユーモラスなことが起こる。ザンビアで、しばしば悪霊とその礼拝にかかわっていた人が、アメリカ人牧師の家に滞在することになった。そして休むため部屋に入ったとたんショックを受けた。祈るためベットにひざまずいたとたん、ベットが持ち上がり、あたかも霊に取り付かれたように動き始めたからである。彼は恐れ驚き、階段をころげ落ちてきた。単なる水ベッドにすぎなかったのに、後で、皆に大笑いされたのは言うまでもない。

現地の人が私たちに多くのものをもたらすことがある。ある若いクリスチアンの家族は、ナイジェリアから来た人が町にいる間家に滞在するようにと招待した。この家族は最近主に導かれたばかりで、子供たちと一緒に家族礼拝を持ったことがなかった。家族について尋ねられたのでこのナイジェリアの人、ディビッドは国で毎日どのように聖書を読み、子供たちと祈っているかを話した。そして求められるままにその家で礼拝を導いた。この家族はこのナイジェリアの兄弟から学んだことを決して忘れず、家族礼拝を続けることだろう。

多くの教会が現地の人を迎えることにより、宣教に新しい幅を加える、ということに気が付きつつある。トロントにあるピーブルズ・チャーチは、教会宣教プログラムの指導的立場にあったが現地の人を教会に迎えたとき、彼らの教会内での宣教に対する影響力に気が付いた。そしてその結果、宣教の予算が驚くほど増えた。このことは多くの教会で現実に行っていることの一つの例にすぎない。

あなたの教会が、現地の宣教に寄与出来るために大きく、また財政的に豊かである必要はない。数年前、アメリカの東海岸にある小さな独立教会は、一人の若いマレーシアの牧師を援助するこ

とを決め、毎月50ドル捧げ始めた。数年後、このマレーシアの牧師は、彼を援助しているアメリカの教会よりもっと大きな教会をジホール・バルーに建てた。モスレムの国マレーシアに、クリスチャンが生まれているというのは、何と素晴らしいことであろう。このマレーシアの教会は、アメリカの教会の精神を受け継ぎ他の地域の宣教を助け始めた。そして1980年には、宣教の予算は3万3千ドルに達し、6つの教会をつくるにいたった。

私たちの国にやって来て、私たちの教会で宣教する現地の人たちは、私たちの奉仕に新しい幅をもたらす。例えば、インド、ミゾラム州から来たミゾ合唱隊が、クリスチャン・ナショナルズの支援のもとに3ヶ月間、北アメリカを旅行したとき、人々は新しいかたちの宣教へのコミットメントを知った。バングラデシュとビルマの間に挟まれたミゾから来たこの若い人たちは、85年前までは福音とは縁のない首狩り族だった。そしてリバイバルが起こり、今日この陸に囲まれた極貧の人たちの95パーセントはクリスチャンとなっている。

ミゾ族にとって宣教は、彼らのメッセージであり、生きる道である。彼らの「サマリア」は6億5千万人が住むインドである。1987年には、20万人のこの部族は回りのインドの州に150人の宣教師を送っている。これらの宣教師は最低生活を送る農民の犠牲的な献金によって支えられている。合唱隊のメンバーは宣教のための資金を集めるその方法について証した。例えば家族は、彼らの薪から一束を別にしておき、教会は月の終わりに家々の薪を集めて町で売り、宣教の資金とする。

第12章 私たちの参加の意味 191

婦人たちは宣教の資金を集めるいろいろな方法を考える。例えば、お米を料理するときは家族の必要な量をはかり、そこから一握りを別の容器に入れておく。そしてそれを月の終わりに教会にもってきて、宣教のために売るのである。家族にとってはほんの僅かな量ではあっても、毎日2回、1年間続けるとき、その合計はある程度のもことになる。(注1)

このような方法で集められた資金は、加速のついている世界宣教の必要の拡大に見合うとはとうてい思えないかもしれない。しかし、その熱意と献身は見習う必要がある。なぜならこのようなミゾ族の宣教によって人々の心が動かされるというのは事実だからである。一人の牧師はこのように言う。

ミゾラムからの素晴らしい、献身的なクリスチャンによる証とコンサートを聞くことが出来、本当に感謝しています。私は合唱隊がここで多くの人々の生活の上に、大きな影響を与えたということを個人的に証ししたいと思います。

現地のクリスチャンの方が私たちよりもっと信仰的で、成熟しており、献身的である、とするのは現実的ではない。しかし、多くの現地の人たちは私たちよりもっと苦しみ、多くの迫害に耐え他の人の排斥や家族からの敵意に会い、また回りの狂信的な宗教に身をさらして生きている。そしてこういった経験が、洞察力となり、私たちへの証しの力となっている。

ゴードン・マクドナルドは今日、最も素晴らしい説教はラテン・アメリカ、アフリカ、そしてアジアの指導者によってなされているかも知れないと、次のように言う。

第三世界の兄弟姉妹たちは、知恵を求めるといことが何なのかを知っています。なぜなら彼らは生きるためにそれが必要だからです。彼らは空腹が何なのかを知っています。また、家がないのがどのようなことか知っています。彼らは信仰によってものを見、そして生きるということを知っています。私はもうすぐ第三世界の教会から私たちが宣教師を受ける側になるのではないかと思うのです。(注2)

家庭の崩壊が私たちの大きな関心の一つになっている今日、教会はお互いの住む世界がばらばらになり、家庭が崩壊した人たちの傷を癒すため、一生懸命働いている。私たちは自分のことだけを考え、身近な問題にだけ関心を払えばそれでよいのだ、という誘惑を時に感じるかもしれない。しかし分別ある生活そのものがこの問題の多い世界で、なを神の主権が存在していることを示しているとも言える。「私は私の教会をつくるであろう」と主は約束されている。そして今主はそのことをなされつつある。それは主が最初にされようとしていることでもある。もし私たちが主に従って歩むならば、それは私たちのものなのである。神の「世界家族」の一員になるには、私たちの努力が必要であり、「家族」にある不公平を是正し、傷をいやそうとする聖霊の求めに私たちの心を開く必要がある。

キリストと共に私たちは御国の相続人でもある。しかし、何億という人たちは、キリストが自分たちのために死に、その死によって私たちが御国の相続にあずかることが出来る、ということを知らない。私たちは誇りある神の家族の一員として、私たちの持っているものを分かち合うために、この世から呼び出されたので

第12章 私たちの参加の意味 193

ある。それは他の人たちがこのように言っ合って驚くためでもある。「ごらんなさい。どんなに彼らが愛し合っているか。．．．」

付録 I

現地宣教援助の選択の手引き

1. 現地宣教団体が活動している地区で、何を必要としているかを調べ、その優先順位を決定する。
2. 現地宣教団体の歴史とその発展を調べる。通常、個人的な「ビジョン」を援助するより、既存宣教団体の戦略的方針を援助した方が結果は良い。新しい宣教団体を助ける必要があると認めた場合、十分な調査をしてからにする。
3. 現地宣教団体の教義的立場を調べる。その宣教団体と指導者を知っている人から、十分話を聞き、調査する。
4. 現地宣教団体に参加している現地教会との関係を調べる。良い関係にあるか、指導者が訓練不足であるかどうか調べ、判断する。
5. 他の現地教会団体とうまくいっているかどうか調べる。
6. 福音主義的な交わりに対してどのような態度を取っているか調べる。
7. WCCを含むいろいろな現地、国際間における協議会、交わりに参加しているかどうか調べる。
8. 政府との関係、法的地位、財産所有などについて、その地域のクリスチャンの意見を聞く。
9. その地域から財政上の援助と支援があるかを調べる。

196

10. 短期、長期にわたる目標と宣教の基本的方針を分析する。
11. 現地宣教団体が奉仕している地域の働き、および必要を良く知っているクリスチャンの指導者、宣教師、そして宣教団体の意見と評価を得る。
12. 現地宣教団体の管理体制を調べる。特に役員管理、責任能力に注意する。
13. 宣教団体の財政方針とコリント第二8：21に書かれている聖書の御言葉、すなわち「わたしたちは、主のみまえばかりではなく、人の前でも公正であるように、気を配っているのである」に従っているかどうかを率直に討議する。
14. 現地宣教団体が、すでに国外の人、あるいは組織に援助を求めているかどうかをはっきりさせ、お互いの間に食い違いや不信感が生れるのを避ける。

注：1977年、アレン・B・フィンリーがEFMA/IFMAリトリートで準備した資料からの抜粋。その後、教会宣教委員会協議会で使用。

付録 I I

クリスチャン・ナショナルズと現地宣教団体との間の相互誓約の原則

国際事業部理事長

アレン・B・フィンリー

誓約の原則

1. クリスチャン・ナショナルズと現地宣教団体との間に聖書教義の理解で基本的合意があること。
2. クリスチャン・ナショナルズは、現地の人と現地の宣教団体に対する非搾取政策を堅持することを誓約する。人々からの献金は最大の注意を払って現地に送られ、これらの資金は献金者の指定されたことに用いられる。
3. クリスチャン・ナショナルズは現地の自主性を認め、その運営に干渉しない。クリスチャン・ナショナルズは単独、あるいは独立してやっている人に資金を送らない。全ては公認された現地の組織、あるいは役員監督のもとになければならない。実施契約書はクリスチャン・ナショナルズと現地の役員の間で作成される。
4. 現地役員（組織）は、自主性の保持と自給自足の実現に努力する。

5. クリスチャン・ナショナルズの援助を受けている現地宣教団体の役員が、自国以外に資金の援助を求める場合には、クリスチャン・ナショナルズと協力関係のある国、又は地域に限ること。資金援助を集める目的の手紙あるいは出版物は、全てクリスチャン・ナショナルズ国際事業部を通してなさなければならない。
6. 現地宣教団体の立てた自主的なプログラムは、その国でのプロジェクトの実施にあたって前もっての書面によるクリスチャン・ナショナルズの同意を得る必要はない。
7. 現地宣教団体の立てた自主的なプロジェクトを促進するために海外に行く場合、クリスチャン・ナショナルズの代表派遣プログラムにのっとり行かなければならない。集められた資金は、クリスチャン・ナショナルズを通してプロジェクトのために使われる。
8. 現地宣教団体は、クリスチャン・ナショナルズが彼らの働きを出版物により紹介するのに同意する。そのため現地宣教団体は、働き手の写真と証しを用意し、クリスチャン・ナショナルズが人々の興味と支援を得ることが出来るように助ける。クリスチャン・ナショナルズの援助を受けている現地宣教団体は、クリスチャン・ナショナルズの現地事務所を通して求められる手紙と報告書を提出しなければならない。これらの手紙や報告書は郵送上の制約とクリスチャン・ナショナルズの方針により編集し直されることがある。
9. クリスチャン・ナショナルズはどのような報告、宣伝においても、他の宣教団体との関係をはっきりと説明し、他のクリスチャンを混乱させないようにし、また疑われたり、信用を落とさないようにすることに同意する。

10. 現地の自立したグループは、毎年会計監査報告を出し、その複写をクリスチャン・ナショナルズ国際事業部に送ると共に、いつでも最高責任者、あるいはその指名する人が訪問することに同意する。
11. クリスチャン・ナショナルズは、現地宣教団体の自主性を障害しないようプロジェクトを助け、文書やテープを作り、また必要な人がセミナーに出席出来るよう助け、プロジェクトの成果が上がるように貢献する。クリスチャン・ナショナルズに支援されている現地宣教団体は、国際事業部からの質問書や評価用紙に記入、回答することに同意する。現地宣教団体は他のクリスチャンあるいは支援者の助けとなる祝福や成功例をクリスチャン・ナショナルズに報告する。

1968年 初版

1974年 改訂

1978年 改訂

1983年 改訂

Notes

Chapter 2

1. Kenneth Scott Latourette, Missions Tomorrow, Harper and Brothers, New York, 1936, p.127, 130.
2. James Wong; Peter Larson, Mission from the Third World, Church Growth Study Center, Singapore, 1973.
3. Kenneth Scott Latourette, Christianity in a Revolutionary Age, Harper&Row, New York, Vol.5, 1962, p.526.
4. Roger C. Palms, "3,000,000,000 People How Shall They Hear?" Decision, Billy Graham Evangelical Association, October, 1980.
5. Stephen Neill, "Building the Church on Two Continents," Christianity Today, July 18, 1980, pp.18-23.
6. "A New Era," Evangelical Missions Information Service, 1980 Annual Report, annual board meeting, December 11, 1980, p.1.
7. Samuel Wilson, editor, Twelfth Edition Mission Handbook, Missions Advanced Research and Communication Center, Monrovia, CA, 1979, p.25.
8. J. Christy Wilson, Today's Tentmakers: Self Support an Alternative

Model for Worldwide Witness, Tyndale House Publishers, Wheaton, IL, 1979, p.9.

9. Lawrence E. Keyes, The Last Age of Missions, William Carey Library, Pasadena, CA, 1983, p.62.

Chapter 3

1. Kenneth Donald, "What is Wrong With Foreign Money for National Pastors?", Evangelical Missions Quarterly, Volume 13, Number 1, January 1977, p.20.

2. Peter Beyerhaus, "Internatinal View of Mission," 1964, Vol.53:393-407. Reprinted in Readings in Dynamic Indegineity, eds. Kraft and Wisley, WCL 1979, pp.29-30.

3. Evangelical Missions Quarterly, Summer/1972, p.195/1972, p.159.

4. Allen Roland, Missionary Methods: St.Paul's or Ours, William B. Eerdmans Publishing Company, Grand Rapids, MI, 1962, pp.143, 144.

Chapter 4

1. Roger E.Coon, "Unchanging Task:Changing Roles," Evangelical Missions Quarterly, Vol.16, No.4, October 1980, p.208.

2. T. Stanley Saltou, Missions at the Crossroads, Van Kempen Press, Wheaton, IL, 1954, p.117.
3. Pius Wakatama, Independence for the Third World Church, An African's Perspective on Missionary Work, Inter-Varsity Press, Downer's Grove, IL, 1976, p.37.
4. Harper Kane, A global View of Christian Missions, Baker Book House, Grand Rapids, MI, 1971, p.14.
5. C. Peter Wagner, Stop the World, I Want To Get On, Regal Books, Glendale, CA, 1974, pp.102-103.
6. D.Jhon Richard, "Evangelical Cooperation," AIM, November, 1980, pp.6,7.
7. Gordon MacDonald, "Your Church in God's Global Plan," Christian Herald, November, 1980, p.49.

Chapter 6

1. Wade Coggins, and E. L. Frizen, Jr. "Issues Confronting Evangelical Missions," Evangelical Missions Tomorrow, William Carey, Pasadena, CL, 1977, p.157.
2. Dennis Clark, The Third World and Missions, World Publishers, Waco, Texas, 1971, pp.125.

3. Lorry Lutz, Born to Lose, Bound to Win, Harvest House, Irvine, CL, 1980, p.176.
4. Harold Fuller, Mission Church Dynamics, William Carey Library, Pasadena, CL, 1980, pp.182, 183.
5. Gordon MacDonald, "Your Church in God's Global Plan," Christian Herald, November, 1980, p.52.
6. Ted Engstrom, What in the World is God's Doing? The New Face of Missions, Word Publishers, Waco, Texas, 1978, p.101.
7. Ted Ward, "The Impossible Dream" message given at Association of Evangelical Relief and Development Organizations annual meeting in Kansas City, Nov.19-21, 1980.
8. Wade Coggins, and E.L.Frizen Jr., op.cit. p.167.

Chapter 7

1. Clay Cooper, Nothing to Win but the World, Zondervan Publishing House, Grand Rapids, MI, 1965, p.46
2. Harold Fuller, Mission Church Dynamics, William Carey Library, Pasadena, Clifornia, 1980, p.100.
3. Ibid., p.104.

Chapter 8

1. Don Kammerdiener, quoted in "Our Readers' Opinions," Evangelical Missions Quarterly, Vol.13, No.2, April 1977, p.113.
2. Levi O. Keidel, "The Peril of Living," World Vision, November, 1971, p.8.

Chapter 9

1. George W. Peters, A Biblical Theology of Missions, Moody Press, Chicago, 1972, p.238.

Chapter 10

1. T. Soltau, Missions at the Crossroads, Van Kampen Press, Wheaton, Illinois, 1954, p.22.
2. Harold W. Fuller, Mission-Church Dynamics, William Carey Library, Pasadena, California, 1980, p.220.
3. Paul Pretiz, "Church-Mission Tensions Today," Laten America Evangelist, March-April, 1980.
4. Fuller, op. cit., p.39.

Chapter 11

1. Gordon MacDonald, "Your Church in God's Global Plan," Christian Herald, November, 1980, p.52.
2. Jeanne Polston Greene, "People Management: New Directions for the '80s," Administrative Management, January, 1981, p.25.
3. 1983 World Population Data Sheet, Population Reference Bureau, 1337 Connecticut Avenue, N.W., Washington, D.C.
4. Paul Brand, "Fat Cells in the Body: Issues of Loyalty," Christianity Today, October 10, 1980, p.45.
5. Frank E. Gaebelen, "Challenging Christians to the Simple Life," Christianity Today, September 21, 1979, pp.23,24.
6. American Association of Fund Raising.
7. Ronald J. Sider, Rich Christians in an Age of Hunger, A Biblical Study, Inter-Varsity Press, Downers Grove, 1977, p.225.

Chaper 12

1. Lorry Lutz, The Mizos: God's Hidden People, Christian Natinals Evangelism Commission, San Jose, California, 1980, p.36.

2. Gordon MacDonald, "Your Church in God's Global Plan," Christian Herald, November, 1980, p.49.

BIBLIOGRAPHY

1. Books

Allen, Roland, The Spontaneous Expansion of the Church, World Dominion Press, London, 1946.

Berney, James, Editor, You Can Tell the World, A Mission Reader, Inter-Versity Press, Downers Grove, 1979.

Camara, D. H., Revolution Through Peace, Harper & Row, New York, 1971.

Cervin, Russell A., Mission in Ferment, Covenant Press, Chicago, 1977.

Clark, Dennis E., The Third World and Mission, Word Books, Waco, 1971.

Coggins, Wade T. and E. L. Frizen, Jr., Evangelical Missions Tomorrow, William Carey Library, Pasadena, 1977.

Cook, Harold R., Highlights of Christian Missions, Moody Press, Chicago, 1967.

Cooper, Clay, Nothing to Win but the World, Zondervan Publishing House, Grand Rapids, 1965.

Costas, Orlando E., The Church and Its Mission, A Shattering Critique from the Third World, Tyndale Publishers,

Wheaton, 1974.

Cowen, Paul A., China and Christianity,
Harvard, Cambridge, 1963.

Dayton, Edward R. and David A. Fraiser,
Planning Strategy for the World
Evangelization, Eerdmans Publishing
Company, Grand Rapids, 1980.

Douglas, J. D., Let the Earth Hear His
Voice, Worldwide Publications,
Minneapolis, 1975.

Engstrom, Ted, What in the World is God
Doing? The New Face of Missions, Word
Publishers, Waco, 1978.

Fenton, Horace, Myths about Missions,
Inter-Varsty Press, Downers Grove,
1973.

Fife, Eric S. and Arthur S. Glasser,
Missions in Crisis, Inter-Varsity
Press, Downers Grove, 1961.

Fuller, Harold, Mission Church
Dynamics, William Carey Library,
Pasadena, 1980.

Getz, Gene A., The Measure of A Church,
Regal G/L, Glendale, 1975.

Kane Herbert, A Global View of
Christian Missions, Baker Book House,
Grand Rapids, 1971.

Keyes, Lawrence, The Last Age of Missions, William Carey Library, Pasadena, 1983.

Kraft, C. H. and Tom N. Wisley, Readings in Dynamic Indigeneity, William Carey Library, Pasadena, 1979.

Latourette, Kenneth Scott, Missions Tomorrow, Harper and Brothers, New York, 1936.

Latourette, Kenneth Scott, Christianity in a Revolutionary Age, Harper & Row, New York, Vol. 5, 1962.

Lindsell, Harold, The Church's Worldwide Mission, Word Books, Waco, 1966.

Lutz, Lorry, Born to Lose, Bound to Win, Harvest House, Irvine, 1980.

McGavran, Donald, Understanding Church Growth, Eerdmand Publishing Company, Grand Rapids, 1970.

Miura, Ayako, The Wind is Howling, Inter-Varsty Press, Downers Grove, 1977.

Neil, Stephen, A History of Christian Missions, Penguin Books, Baltimore, 1964.

Nelson, Marlin L., The How and Why of Third World Missions, William Carey Library, Pasadena, 1976.

Peters, George W., A Biblical Theology of Missions, Moody Press, Chicago, 1972.

Pollock, John C., A Foreign Devil in China, Worldwide Publications, Minneapolis, 1971.

Sider, Ronald J., Rich Christians in an Age of Hunger: A Biblical Study, Inter-Varsity Press, Downers Grove, 1977.

Soltau, Stanley, Missions at the Crossroads, Van Kampen Press, Wheaton, 1954.

Tegenfeldt, Herman, A Century of Growth, The Kachin Baptist Church of Burma, William Carey Library, Pasadena, 1974.

Wagner, C. Peter, Church/Mission Tensions Today, Moody Press, Chicago, 1972.

Wagner, C. Peter and Edward R. Dayton, Unreached Peoples '81, David C. Cook Publishing Co., Elgin, 1981.

Wilson, Samuel, editor, 12th Edition Mission Handbook, Missions Advanced Research and Communication Center, Monrovia, 1979.

Winter, Ralph, The 25 Unbelievable Years 1945-1969, William Carey Library, Pasadena, 1969.

2.Periodicals

Brand, Paul, "Fat Cells in the Body: Issues of Loyalty," Christianity Today, October 10, 1980.

Conn, Harvie, "The Money Barrier Between Sending and Receiving Churches," Evangelical Missions Quarterly, Vol. 14, No.14, October 1978.

Coon, Roger E., "Unchanging Task: Changing Roles," Evangelical Missions Quarterly, Vol. 16, Nov.4, October 1980.

"COWE: 200,000 by the Year 2000," (editorial), Christianity Today, August 8, 1980.

Donald, Kenneth, "What is Wrong With Foreign Money for National Pastors?" Evangelical Missions Quarterly, Vol.13, No.1, January 1977.

EMISsary, Evangelical Missions Information Service, Vol.11, No.3, June 1980.

Fuller, Harold, "Guiding Principles Mission-Church Relationships," Africa Pulse, Evangelical Missions Information Service, Vol.13, No.3, November 1980

Gaebelein, Frank E., "Challenging Christians to the Simple Life," Christianity Today, October 10, 1980.

Greene, Jeanne Polston, "People Management: New Directions for the '80s," Administrative Management, January 1981.

Keidel, Levi O., "The Peril of Giving," World Vision, November 1971.

Kenyon, John, "Your Church in God's Global Plan," Christian Herald, November 1980.

Lamb, David, "Spreading African Christianity," Los Angeles Times, March 21, 1980.

Lovering, Kerry E., "The Ethic Approach: One Tribe at a Time," Africa Now, No.88, September/October 1976.

Lutz, Lorry, "Mission Money Isn't Just for Westerners Any More," Christian Life, May 1971.

MacDonald, Gordon, "Your Church in God's Plan," Christian Herald, November 1980.

McQuicken, J. R., "The Thailand Consultation by B. Hogard," Mission Frontiers, Vol.2, No.8, August 1980.

Neil, Stephen, "Building the Church on Two Continents," Christianity Today, July 18, 1980.

Palm, Roger C., "Three Billion People: How Shall They Hear?" World Evangelization, Bulletin No.20, September 1980.

Plueddeman, James E., "Church Maturity: Old Hat?" Evangelical Missions Quarterly, Vol.16, No.3, July 1980.

Pretiz, Paul E., "Church-Mission Tensions Today," Latin America Evangelist, March/April 1980.

"Reflections on '71," Evangelical Missions Quarterly, Summer, 1972.

Richard, D. John, "Evangelical Cooperation," AIM, November 1980.

Strom, Donna, "Christianity and Culture Change Among the Mizo," Missiology, Vol. VIII, No.3, July 1980.

訳者あとがき

私たち日本のクリスチャン パートナーズが学費を援助している子供たちを訪ねるため、西カリマンタンのポンティアナクを訪れたのは、1986年5月のことだった。子供たちはスラム街に住んでいた。そしてスラム街は湿地帯にあった。この湿地帯に入っていったとき、あまりにも多くの人たち、多分、数万あるいはそれ以上の人たちが、私たち日本人には想像することも出来ない環境のもとに生活しているのが分って唖然とした。雨季に流れている湿地の水が、ところどころで溜っていて、ガスが出ていた。そして人々はそのような水を使って、体を洗っていた。私の目には体を汚しているとしか見えなかった。

会った子供たちは無心に遊んでいた。そしてその目は輝いていた。日本の子供たちにはもうみられないキラキラした瞳だった。そして、老人たちの虚しく空をみつめるような目とも対照的だった。しかし、手をさしのべてくる幼い子供たちの多くは、栄養失調のためかお腹が大きく、また皮膚病ができていた。また子供たちの多くは義務教育である小学校ですらかよえない状態だった。

日本にいるとき子供たちの写真を見て、結構、良い服を着、中にはピアスをしている子もいたので、なぜこのような子を援助するのかと疑問に思ったりもした。だがその理由はすぐに分った。写真を写そうとすると、親が家の中から晴着を持ってきて子供にさせるのである。母親も同じで、写真を写すとなると時間をかけ

やめようかと思った。そのようなとき励まし、支えてくださったのが、クリスチャン パートナーズの他の理事の方々だった。鳥海理事は真先に訳文を読み、全ページに渡る直しと、適切なコメントをくださった。松本理事は原文と比較して読んでくださり、訳の間違いを数箇所指摘してくださった。また理事長の草野さんはまえがきを快く引き受けてくださった。理事会でも度々この翻訳については取り上げられた。したがって、この翻訳は私一人の力によるのではなく、クリスチャン パートナーズ理事全員の力によるものである。とはいえ翻訳の間違い、至らなかった点は全て私の責任である。皆さまからのご注意、ご指摘を受けたいと思う。

尚、本書では抜粋聖書の箇所は、日本聖書教会発行1954年改訳「新約聖書」を使用させていただいた。

この翻訳が少しでも海外の宣教に関心のある人、教会の役に立つように祈る。

1989年6月

木ノ内一雄

訳者について

木ノ内一雄

1944年、鳥根県に生れる。

1975年米国イリノイ州ホイートン大学大学院卒業（MA）。

1984年、クリスチャン パートナーズ（Partners International-Japan）結成と共に理事として参加、現在に至る。

デュポンジャパン リミテッド勤務。

住所、横浜市旭区今宿町2414-36。

家族の絆

発行日 1990年3月1日

著者 アレン・フィンリー

ローリー・ルツ

訳者 木ノ内一雄

発行所 クリスチャン パートナーズ

千葉市園生町1223-1 A-705 草野方